郡家町文化財報告書　18

鳥取県八頭郡郡家町

KŌGE　SAWADAYAMA

郡家澤田山古墳群

KUNŌZI　OTATEYAMA

久能寺御建山27・31号墳

宅地造成工事に伴なう埋蔵文化財調査報告書

1997.3

郡家町教育委員会

序　　文

郡家町には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査の必要性が高まっています。埋蔵文化財は、先人の残した文化遺産であり、地域の古代の生活を語る歴史資料として後世に残し伝えていくべき町民の貴重な財産です。

郡家町教育委員会では、このような認識にもとづき関係各機関と協議を重ね、また地元町民のご理解をいただきながら、地域の発展と文化財の共存を図るよう、文化財保護行政を進めているところです。

さて、今回調査を実施した郡家澤田山古墳群、久能寺27・31号墳は、宅地造成に伴う発掘調査として、平成７年３月から調査を行い、報告書発刊のはこびとなりました。調査の結果、古墳時代初期から終末期にわたって築造された古墳８基が検出され、当地域の古代文化の一端を明らかにする資料を得ることができました。

ささやかな冊子ではありますが、本書が町民の郷土研究の一助として活用され、埋蔵文化財の保護意識の高揚に役立てていただければ幸いです。

おわりに、この調査にご理解とご協力をいただいた工事関係者や地元の皆様をはじめ、ご指導をいただいた方々関係各位に対し心から感謝し、厚くお礼申し上げる次第です。

平成９年３月

郡家町教育委員会

教育長　北　村　一　利

例　　言

1．本報告書は、郡家町教育委員会が宅地造成計画にともなって実施した、1995年度郡家澤田山古墳群、1996年度、久能寺御建山27・31号墳の埋蔵文化財発掘調査記録である。

2．郡家町澤田山古墳群は、鳥取県八頭郡郡家町大字郡家澤田山に、久能寺御建山27・31号墳は、郡家町大字久能寺御建山に所在する。

　国土座標はV系を基に、郡家澤田山古墳群はX＝－66163、Y＝－7250、久能寺御建山27・31号墳は、X＝－66173、Y＝－7350である。

3．本報告書で使用した方位は磁北であり、標高は、「国土地理院発行、因幡郡家　1/25000」建設省郡家国道維持出張所前「B・M71.8m」を基点とした標高値である。

4．本報告書記載の地形図は、「郡家町役場発行　郡家町全図　1/5000」による。

5．出土遺物の整理・実測及び図面の浄書は、岡村博恵・道谷冨士夫が、執筆・編集は、道谷冨士夫が当った。

6．発掘調査によって作成された記録・出土遺物は郡家町教育委員会に保管されている。

7．発掘調査・整理作業にあたっては下記に便宜をはかっていただいた。

　郡家町役場・藤原組

凡　　例

1．本報告書における遺構記号は次の通りである。

M＝古墳　　SK＝土坑　　E＝東　　W＝西　　N＝北　　S＝南　　H＝標高

2．本報告書における実測図は、図に表わされた縮尺による。

3．遺物には遺跡名（郡家澤田山－K・S・A、久能寺御建山－K・K・O）・遺構名・グリッド名・取り上げ番号・取り上げ年月日を基本的に記載した。

4．図版37～46は郡家澤田山古墳群・図版47は久能寺御建山27・31号墳の遺物であり、図版中の番号は遺物番号である。

5．図版中の説明で（東・西・南・北）は、被写体に対するカメラ位置である。

6．土坑の規模は（長径×短径×深さ）で表わした。ただし、長径、短径は上縁部での規模である。

7．久能寺御建山27・31号墳の遺物番号には、郡家澤田山古墳群の遺物と区別するため、Bを付した。

8．挿図の出土遺物実測図中、２色刷は黒…上層、赤…下層より出土したものであり、３色刷は黒…上層、赤…中層、青…下層より出土したものである。

目　　次

序文
例言・凡例
目次
第１章　調査の経緯
　第１節　調査にいたる経過……1
　第２節　調査経過と方法……1
　第３節　調査体制……5
第２章　位置と環境
　第１節　歴史的環境……6
　第２節　地理的環境……9
第３章　郡家澤田山古墳群の調査
　第１節　郡家澤田山古墳群の概要……10
　第２節　郡家澤田山古墳群の遺構と遺物……21
　　１．古墳……21
　　(1)　５号墳　(2)　６号墳　(3)　７号墳　(4)　８号墳
　　(5)　９号墳　(6)　10号墳
　　２．土坑……31
　　(1)　SK01　(2)　SK02　(3)　SK03　(4)　SK04　(5)　SK05
　　３．石器・石材……33
第４章　久能寺御建山27・31号墳の調査
　第１節　久能寺御建山27・31号墳の概要……38
　第２節　久能寺御建山27・31号墳の遺構と遺物……42
　　１．古墳……42
　　(1)　27号墳　(2)　31号墳
　　２．土坑……46
　　(1)　SK01　(2)　SK02　(3)　SK03　(4)　SK04　(5)　SK05
　　(6)　SK06　(7)　SK07
　　３．他の遺物……48
第５章　考察
　第１節　郡家澤田山古墳群……49

第２節　御建山27・31号墳……50
第３節　まとめ……51
遺物観察表
観察表１……郡家澤田山古墳群遺物……53
観察表２……久能寺御建山27・31号墳遺物……56
遺物実測図
写真図版
報告書抄録
郡家澤田山古墳群発掘調査報告
久能寺御建山27・31号墳発掘調査報告

参　考　文　献

1.	雄　山　閣	はにわ読本
2.	学　生　社	古墳時代の鏡・埴輪・武器
3.	富士平工業Ｋ・Ｋ	新版　標準土色帖
4.	鳥取県教育文化財団	一般国道９号（羽合道路）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅰ
5.	郡家町教育委員会	郡家町誌
6.	郡家町文化財協会	郡家町の地名
7.	角　川　書　店	日本地名大辞典　－鳥取県－
8.	平　凡　社	鳥取県の地名
9.	郡家町教育委員会	山田窯跡群
10.	〃　　〃	下坂窯跡群
11.	〃　　〃	花原窯跡群　Ⅰ・Ⅱ
12.	〃　　〃	郡家澤田山古墳群・久能寺御建山遺跡試掘調査報告書
13.	鳥取県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財発掘技術研修会　資料

挿　図　目　次

――〈郡家澤田山古墳群〉――

挿図１　調査地全体図
挿図２　郡家澤田山古墳群調査グリッド一覧表
挿図３　郡家町全体図
挿図４　郡家町遺跡分布図＜調査地関連区域＞
挿図５　上・中段境界断面図
挿図６　SK04　平面・断面図
挿図７　郡家澤田山古墳群概略図
挿図８　郡家澤田山古墳群（調査後）平面図
挿図９　周溝埋土　土層断面図　(1)
挿図10　周溝埋土　土層断面図　(2)
９号墳　墳丘断面図
挿図11　５号墳周溝内出土遺物実測図（土師器の壺）
挿図12　５号墳周溝内出土遺物実測図（土師器の甕）
挿図13　５号墳周溝内出土遺物実測図（高台付広口壺）
挿図14　６号墳周溝内出土遺物実測図（土師質の壺）
挿図15　８号墳墳頂部埋蔵施設平面実測図
挿図16　８号墳周溝内出土遺物実測図（土師器の椀）
挿図17　９号墳出土遺物実測図（須恵器の蓋杯）
挿図18　９号墳墳頂部平面図
挿図19　10号墳周溝内出土遺物実測図（管玉）
挿図20　土坑01～03平面図
挿図21　土坑05実測図
挿図22　土坑05出土遺物実測図（器台）

――〈久能寺御建山27・31号墳〉――

挿図23　御建山27・31号墳（調査前）墳丘平面図
挿図24　御建山27・31号墳（調査前）墳丘断面図
挿図25　御建山27・31号墳周溝ベルト土層図
挿図26　御建山27・31号墳（調査後）墳丘平面図
挿図27　御建山27号墳遺物出土状況図
挿図28　御建山27号墳遺物Ｂ２・Ｂ５・Ｂ６出土実測図
挿図29　御建山27号墳遺物Ｂ７・Ｂ８・Ｂ９出土実測図
挿図30　御建山27・31号墳土坑土層断面図
挿図31　御建山27・31号墳SK01遺構図
挿図32　御建山27・31号墳SK02遺構図
挿図33　御建山27・31号墳SK03遺構図
挿図34　御建山27・31号墳SK04遺構図
挿図35　御建山27・31号墳SK05遺構図
挿図36　御建山27・31号墳SK06遺構図
挿図37　御建山27・31号墳SK07遺構図

――〈郡家澤田山古墳群・久能寺御建山27・31号墳出土遺物〉――

挿図38　郡家澤田山古墳群出土遺物　1
挿図39　〃　〃　2
挿図40　〃　〃　3
挿図41　〃　〃　4
挿図42　〃　〃　5
挿図43　郡家澤田山古墳群出土遺物　6
挿図44　〃　〃　7
挿図45　〃　〃　8
挿図46　久能寺御建山27・31号墳出土遺物

挿　表　目　次

挿表１　郡家澤田山古墳群　出土遺物観察表
挿表２　久能寺御建山27号墳　出土遺物観察表

図　版　目　次

図版１　澤田山古墳群・御建山27号墳調査前全景（西上空より）
図版２　(1)澤田山古墳群全景（西小屋上）
(2)６・７・８Ｍ調査前全景
(3)７・６・５・８Ｍ調査前全景
(4)６・５・９・10Ｍ調査前全景
図版３　(1)５Ｍ調査後全景（北）
(2)５Ｍ調査後全景（西）
(3)５Ｍ北東側周溝（西）
(4)手前５Ｍ・左９Ｍ・上10Ｍ
図版４　(1)５Ｍ・８Ｍ周溝の接点
(2)５Ｍ西半分・８Ｍ（北）
(3)５Ｍ周溝南側土層断面
(4)５Ｍ周溝西側土層断面
図版５　(1)５Ｍ周溝西側出土遺物
(2)５Ｍ周溝南西側出土遺物
(3)５Ｍ周溝南側出土遺物
(4)５Ｍ周溝南東側出土遺物
図版６　(1)５Ｍ周溝東側出土遺物
(2)５Ｍ周溝東側出土遺物
(3)　〃　〃
(4)　〃　〃
図版７　(1)５Ｍ周溝東側出土遺物
(2)５Ｍ周溝北側出土遺物
(3)上・中段境界断面　①
(4)　〃　〃　②
図版８　(1)　〃　〃　③
(2)　〃　〃　④
(3)　〃　〃　⑤
(4)　〃　〃　⑥
図版９　(1)　〃　〃　⑦
(2)　〃　〃　⑧
(3)６Ｍ表土除去後
(4)６Ｍ周溝北側
図版10　(1)６Ｍ周溝西側
(2)６Ｍ周溝東側
(3)６Ｍ周溝東側ベルト土層断面
(4)６Ｍ周溝西側ベルト土層断面

図版11　(1) 6 M周溝西側出土遺物
(2)中・下段境界断面
(3)　〃　　〃
(4)　〃　　〃
図版12　(1) 7 M表土除去後　全景
(2) 7 M周溝西側
(3) 7 M周溝南東側
(4) 7 M周溝東側
図版13　(1) 7 M周溝南側
(2) 7 M周溝西側
(3) 7 M周溝北東側
(4) 7 M　北西側
図版14　(1) 7 ・ 6 M境界
(2) 7 M　全景
(3) 7 M周溝東側ベルト土層断面
(4) 7 M周溝南側ベルト土層断面
図版15　(1) 7 M周溝東側ベルト土層断面
(2) 7 M北西側土層断面
(3)　〃　　〃
(4)ＶＡ出土遺物
図版16　(1) 7 M周溝南側出土遺物
(2) 8 M完掘　全景
(3) 8 M表土除去後
(4) 5 ・ 8 M周溝境界付近
図版17　(1) 8 M遺構　木棺痕　①
(2)　〃　　〃　②
(3)　〃　　〃　③
(4)　〃　　〃　④
図版18　(1) 8 M周溝　南側
(2)　〃　〃　南西側
(3) 8 M周溝南西側ベルト土層断面
(4) 8 M周溝南東側ベルト土層断面
図版19　(1) 8 M周溝南東側ベルト土層断面
(2) 8 M周溝南東側ベルト土層断面
(3) 8 M周溝出土遺物
(4) 9 M発掘前　全景
図版20　(1) 9 M発掘中
(2)　〃　　〃
(3)　〃　　〃
(4) 9 M　完掘
図版21　(1) 9 M周溝西側ピット
(2) 9 M主体部発掘中
(3)　〃　　〃
(4)　〃　　〃
図版22　(1) 9 M主体部出土遺物〈鉄器〉
(2)　〃　　〃　〈 〃 〉
(3)　〃　　〃　〈蓋杯〉
(4)　〃　　〃　〈 〃 〉
図版23　(1)　〃　　〃　〈蓋杯〉
(2)　〃　　〃　〈杯身〉
(3) 9 M発掘中北壁土層断面　①
(4)　〃　　〃　②
図版24　(1)　〃　　〃　③
(2)　〃　　〃　④
(3)　〃　　〃　㊀
(4) 9 M周溝北側落ちこみ　①
図版25　(1)　〃　　〃　②
(2)　〃　　〃　③
(3)10M周溝西側土層断面
(4)10M周溝西側出土遺物
図版26　(1)　〃　　〃
(2)10M周溝東側出土遺物
(3)SK03出土遺物
(4)SK04土層断面
図版27　(1)SK04　発掘中
(2)SK04　完掘

(3)SK05土層断面
(4) 9 M南側とSK05
図版28 (1)SK05出土遺物
(2) 〃 〃
(3) 〃 〃 〈弥生器台〉
(4)澤田山古墳群発掘風景
図版29 (1)御建山27・31号墳発掘前 全景
(2)27・31M発掘前全景〈掃除後〉
(3)27・31M周溝発掘前
(4)27・31M周溝発掘前
図版30 (1)27・31M周溝発掘中
(2)27M周溝東側土層断面
(3)27M周溝中央部土層断面
(4)27M周溝西側土層断面
図版31 (1)31M周溝北側土層断面
(2)27M・31M周溝完掘
(3) 〃 〃
(4)27・31M周溝東側、SK04・05完掘
図版32 (1)27・31M周溝西側、SK01・02・03完掘
(2)31M完掘 南側面
(3)完掘側面 南東側
(4)SK01 土層断面
図版33 (1)SK02 出土遺物
(2)SK04 上縁
(3)SK04 底に穿かれたピット
(4)SK05 完掘
図版34 (1)SK06 土層断面
(2)SK07 完掘前
(3)27M周溝中央寄り出土遺物
(4) 〃 〃
図版35 (1) 〃 〃
(2)27M周溝東寄り肩出土遺物
(3)27M周溝中央部出土遺物
(4) 〃 〃
図版36 (1)31M周溝内出土遺物
(2) 〃 〃
(3)澤田山古墳群・御建山27・31号墳発掘調査協力者

――〈遺　　物〉――

図版37～図版46 郡家澤田山古墳群出土遺物
図版47 久能寺御建山27号墳・31号墳出土遺物

第１章　調査の経緯

第１節　調査にいたる経過

郡家澤田山・久能寺御建山はいずれも遺跡分布地として指定されており、特に久能寺御建山27・31号墳は相当古くから古墳であると云い伝えられ、外観上から見ても方墳と断定させる丘陵である。

６年11月、郡家澤田山地区、８年８月、久能寺御建山地区の開発事業（宅地造成）が県段階で認可されたが認可に至る迄の手順として、町段階では後述の諸調査を実施した。

平成６年２月開発予定地全体の状況を把握するため分布調査を、その結果を受け、平成６年４月～６月、郡家澤田山古墳群。平成７年２月～３月、久能寺御建山遺跡群（27・31号墳を含む）の試掘調査を、鳥取県教育委員会（埋蔵文化財センター）の指導を受け、郡家町教育委員会が調査主体となり行なった。

調査の結果、郡家澤田山古墳群・久能寺御建山27・31号墳共に、遺構・遺物が検出されたことから発掘調査を実施したものである。（第１図　調査地全体図）

第２節　調査経過と方法

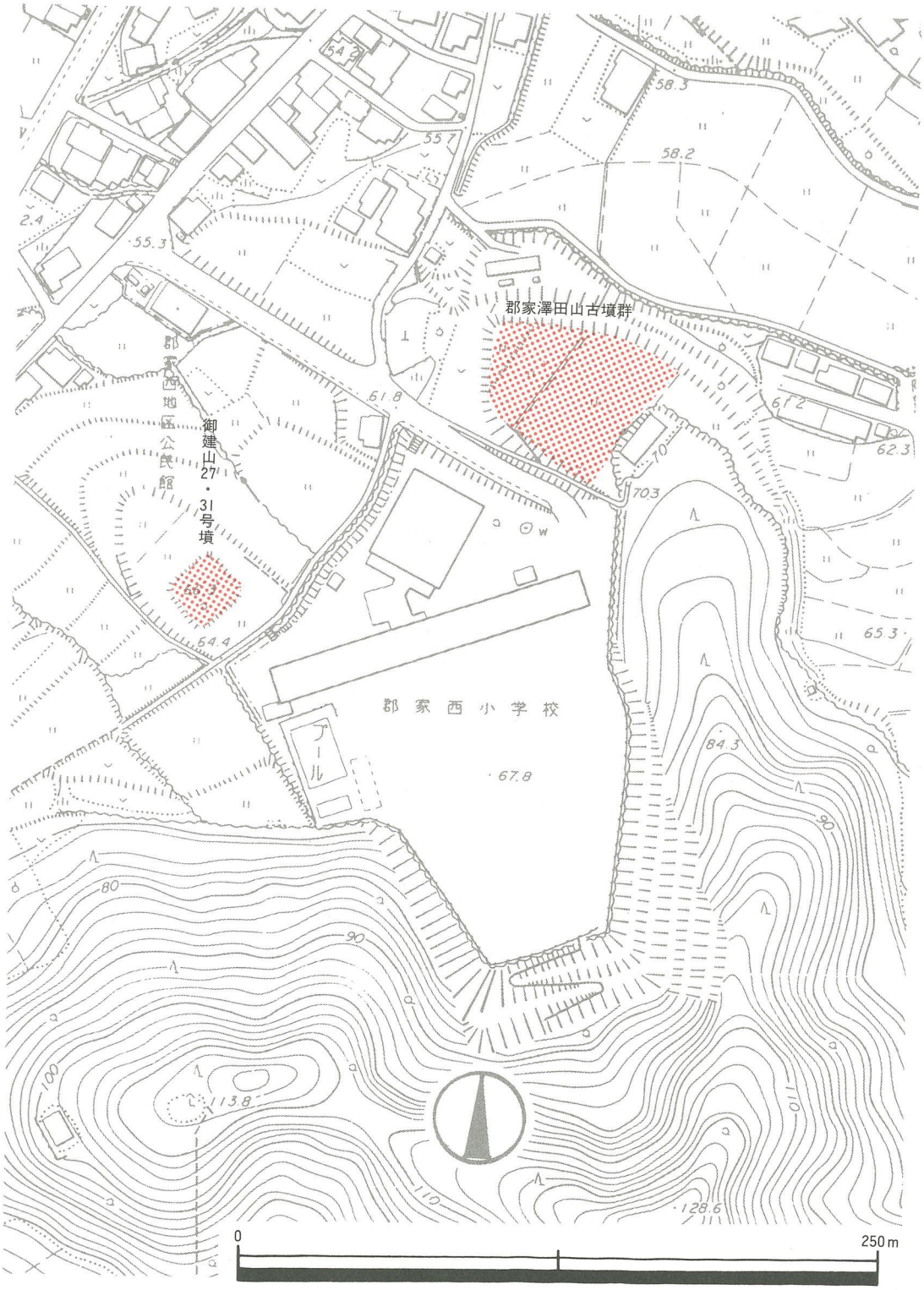
開発計画に従って、先ず郡家澤田山古墳群の発掘調査（現地）を、平成７年４月～８月まで実施した。

調査面積（階段状に開発された３枚の水田）約3,000m²、Ｈ＝66.00m～68.50mである。

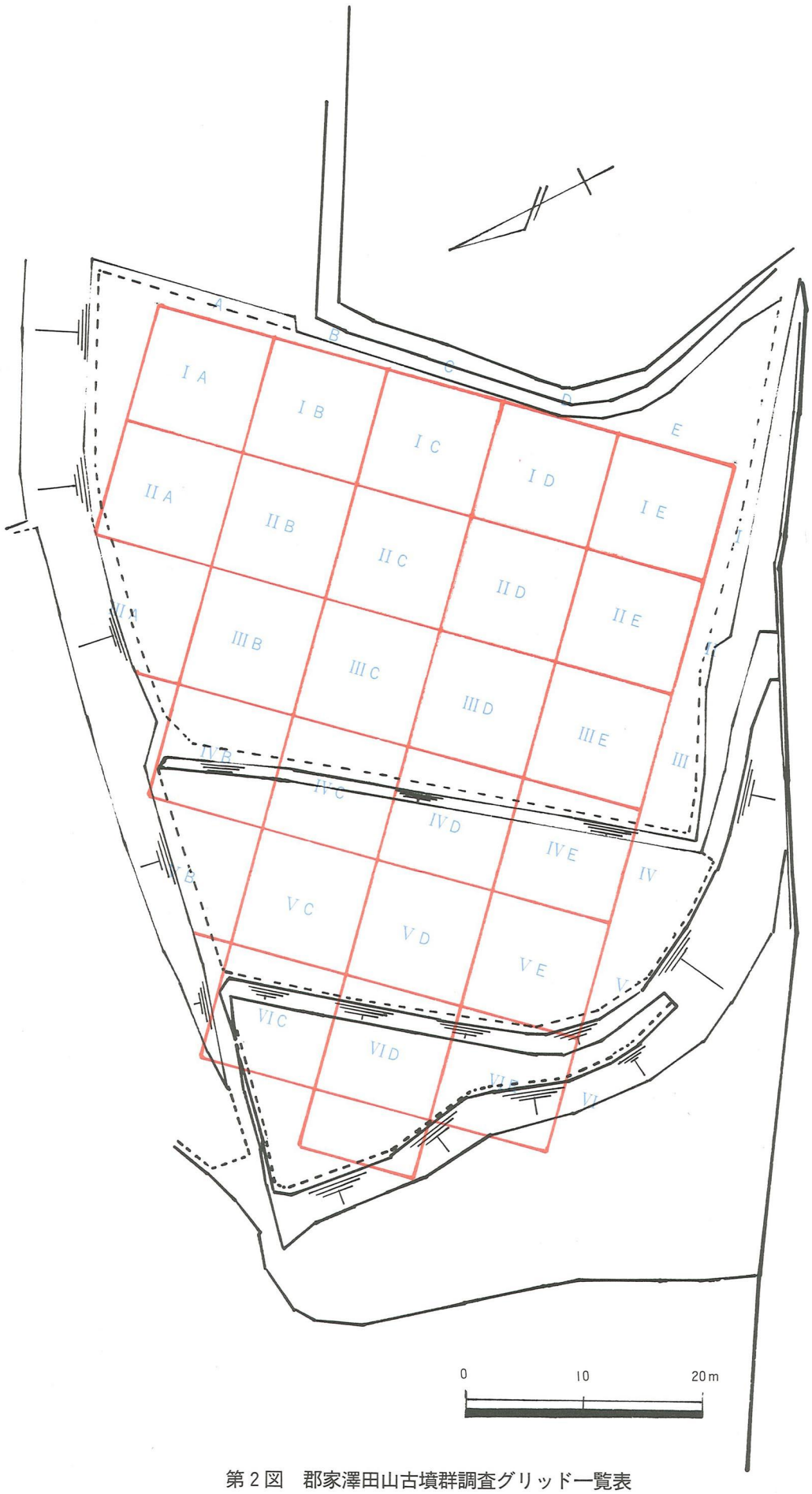
逆二等辺三角形に近い地形を考慮し（$\frac{5}{100}$の勾配をもつ丘陵地）上段水田の南側則線、（畦→北66°東）を基線としてこの基線を10m間隔に、この基線から北を10m間隔に区切り10m方眼に区割りした。この方眼を、東～西へＡ～Ｅ・南～北へＩ～Ⅶとし、グリッド名をＩＡ～ＩＥ・ⅡＡ～ⅡＥ・ⅢＡ～ⅢＥ・ⅣＢ～ⅣＥ・ＶＢ～ＶＥ・ⅥＣ～ⅥＥ・ⅦＤとした。（第２図　郡家澤田山古墳群調査グリッド一覧表）

広範囲のためと永年耕作が続けられた水田という事で、調査員立会いのもとに表土（耕作土）剝ぎを重機で行なった。その後漸次人力で上段より掘削を進めて行った。

平成７年９月より整理・報告書作成作業を行なったが、久能寺御建山27・31号墳調査報告書と合本することで平成８年３月作業を打切った。



第１図　調査地全体図



第２図　郡家澤田山古墳群調査グリッド一覧表

久能寺御建山27・31号墳は、水田の中央部に約２ｍの高さをもち、縦・横共に20m、約400㎡の面積をもつ畑作が行なわれていた丘陵である。

試掘調査時設定された中心杭、№04を基杭とし東西にそれぞれ10m、南に８ｍ、北に10ｍ（試掘杭№05）の杭をうち作業に取りかかった。

グリッドは、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４グリッド（各100㎡）とした。

畑として耕作されていたため撹乱による土坑が５穴あり、掘った土を盛ったものと判断される盛り上がりが処々に見られ、保存状態は良好とはいえなかった。また、畑として耕作されてはいたがここ何年間かは人の手が入った様子がなく、雑草が生い繁り中には数十年もたったと思われる栗の木等があり、表土除去にはかなりの困難をきたした。

まわりの法敷面（約80m）は雑木が繁っていたため、その表土と丘陵の外周10m余の水田耕作土を調査員立会いのもとに重機で除去した。

発掘調査は、現地作業平成８年９月～11月、整理・報告書作成作業は郡家澤田山古墳群と一緒に平成８年12月～平成９年３月をもって完了した。

第３節　調査体制

調査主体	郡家町教育委員会	教育長　北村一利
事務局	郡家町教育委員会	次長　丸山　勉
		係長　中川義隆
調査指導	鳥取県埋蔵文化財センター・中野知照	
調査担当	郡家町委嘱調査員　道谷冨士夫	
調査協力	清水好夫・今嶋勝雄・今嶋芳一	
	今嶋己和子・岡村博恵・新竹忠三	
	林　賢・堀　安子・宮本静夫	
	大野昌之・大野美佐栄・福本　司	
	福本弘江・田中貞子・田中孝子	
	和田孝子・上田昌彦・森本哲史	
	田村文子・兼田育子・村上起枝子	
	Ｋ・Ｋ藤原組	

第２章　位置と環境

第１節　歴史的環境

郡家町は、鳥取県東部の最大河川である千代川に流入する八東川と私都川に挟まれた流域に所在し、北側は鳥取市と国府町、西側は河原町、南側は船岡町・八東町、東側は扇の山を県境として兵庫県美方町に接している。（第３図　郡家町全体図）

郡家町の歴史的環境は、遺跡の密集度の高い地域として知られている。

縄文時代後期の遺跡として、町南部八東川下流域の北岸に位置する西御門遺跡、私都川と八東川に挟まれた段丘上に立地する万代寺遺跡が存在する。

弥生時代の遺跡としては万代寺遺跡の木棺墓群、下坂より出土した銅鐸の存在が知られているが、これらの遺跡は段丘上あるいは丘陵斜面に展開しており、私都川周辺の肥沃な沖積低地を生産基盤とした農業集落の広がりを推察することができる。

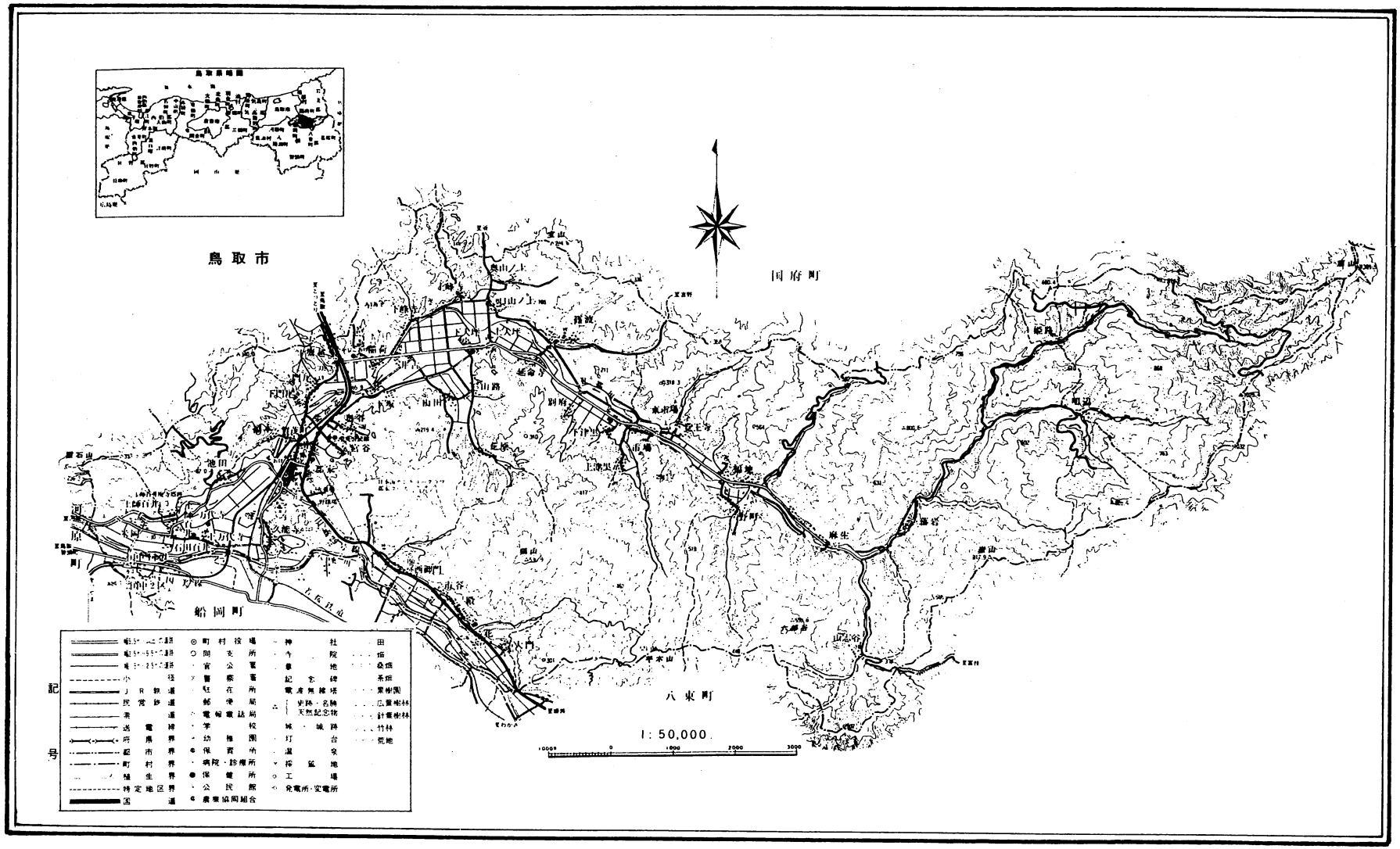
古墳時代中期後半以降になると、私都川流域を中心として丘陵斜面に飛躍的に古墳の数が増加する。

久能寺の北方、八頭高等学校の東側丘陵に埴輪を囲繞させた御建山古墳群、出土遺物から５世紀末葉から６世紀初頭ごろの盟主墳と考えられる稲荷古墳群、６世紀後期ごろ築造といわれる寺山古墳・宮谷１号墳はいずれも前方後円墳であり、前記に続く時期の盟主墳と思われる。また、この時期になると、私都川中・下流域を望む丘陵斜面には径10m前後の横穴式石室を主体とした群集墳・石棺を主体とした群集墳が造られている。これ等のもっとも密集した地域は、郡家町北東部の山田地区、北西部の霊石山山麓、南部の久能寺地域である。

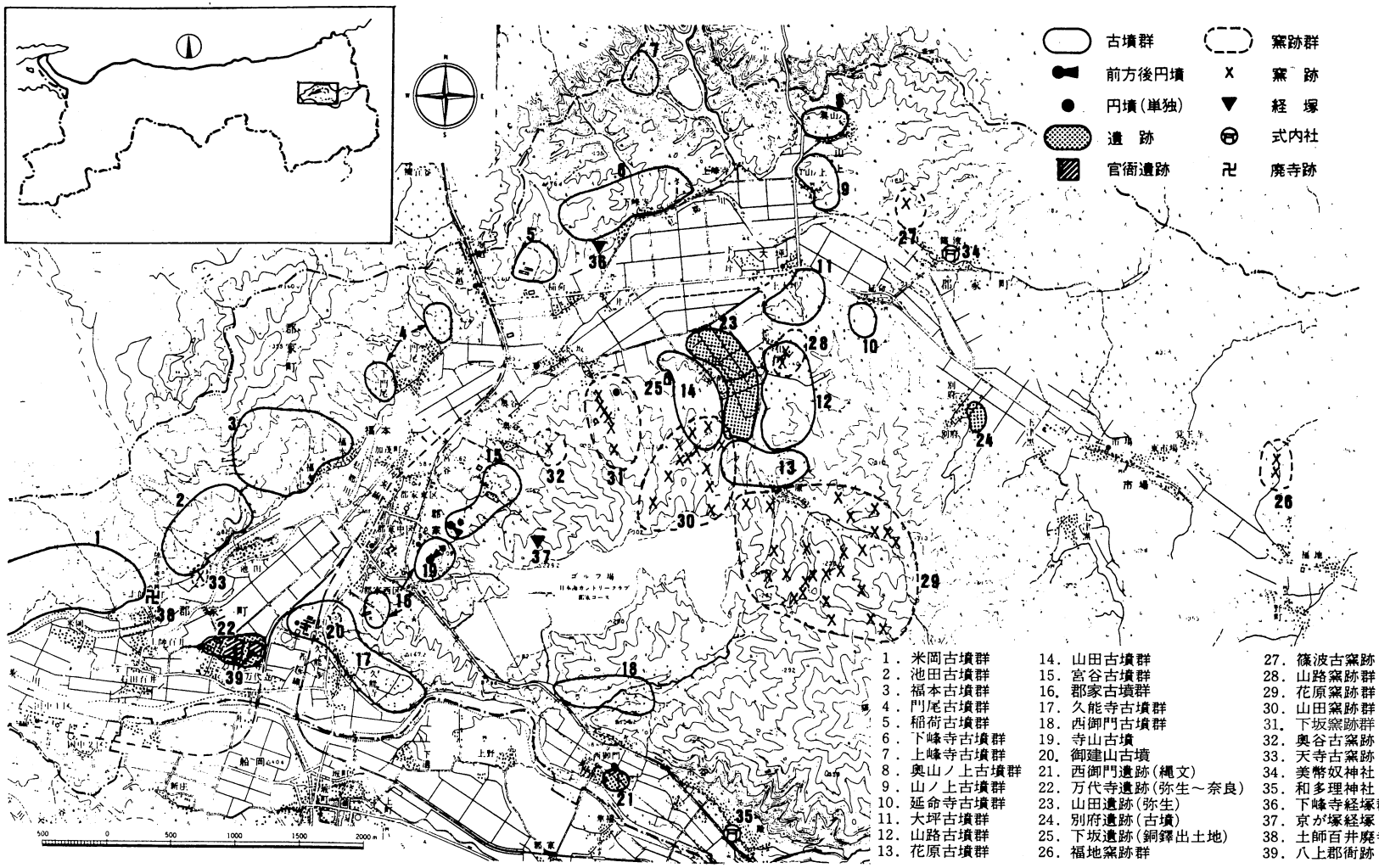
これ等の地域は寺院跡や官衙跡ならびに、これ等に関連の深い窯跡群なども見られる地域である。

霊石山山麓では白鳳時代後期の法起寺式の伽藍配置をもつ土師百井廃寺の存在が知られており、万代寺遺跡では、八上郡郡衙跡と考えられる掘立柱建物群を検出している。また、私都川中流域には数多くの古窯跡群が存在している。中でも福地・花原・山田・下坂等の私都古窯跡群は一般によく知られている窯跡である。

土師百井廃寺の瓦片・鴟尾片が奥谷瓦窯跡の出土品の中に見られること、郡衙跡から出土した杯・壺・円面硯等の遺物は、私都古窯群の一つである花原窯から供給されたものと思われている。（第４図　郡家町遺跡分布図＜調査地関連区域＞）



第３図　郡家町全体図



第４図　郡家町遺跡分布図（調査地関連区域）

第２節　地理的環境

町内には二つの河川、私都川・八東川が流れ、町内西部に広がる国中平野を形成している。

私都川は、町東端に立地する扇ノ山に源を発し流長27㎞、町内を西流している。八東川は若桜町に源をなして町南部を西流する。そして両河川は、町内西端で合流しさらにその下流で千代川に合流し日本海に注いでいる。

今回の調査地、郡家澤田山古墳群・久能寺御建山27・31号墳は、私都川・八東川が合流する約３㎞上流私都川左岸の丘陵上端部に隣接して構築された古墳群である。

郡家澤田山古墳群(平成８年３月31日改定　郡家町遺跡分布地図　消滅古墳№399～404)は郡家町大字郡家字澤田山に、久能寺御建山27・31号墳（平成８年３月31日改定　郡家町遺跡分布地図　消滅古墳№391・709）は郡家町大字久能寺字御建山に存在している。

澤田山古墳群は郡家町役場より南へ約300m。御建山27･31号墳は澤田山古墳群から南西へ約150mの地点にあり（第１図　調査地全体図）標高は、澤田山古墳群63.50m～67.50mに御建山27･31号墳は、64.50m～67.00mに在る。

地図上の位置	澤田山古墳群	東経　134°15′12″	北緯　35°24′13″	
	御建山27・31号墳	東経　134°15′08″	北緯　35°24′11″	
国土座標は	澤田山古墳群	X＝－66163	Y＝－7250	
	御建山27・31号墳	X＝－66173	Y＝－7350	

である。

いずれも郡家西小学校裏山(128.6m)から北西にのびる尾根の裾部に位置しており、私都川流域までは約400m、河原町・船岡町からかけて米岡・池田・福本・門尾・堀越部落、扇ノ山が一望できる高台である。

第３章　郡家澤田山古墳群の調査

第１節　郡家澤田山古墳群の概要

郡家町大字郡家字澤田山は郡家部落の南西。郡家西小学校裏山の尾根が北西に伸び平地に至る裾部に位置している。

字澤田山の奥部は、字牛ヶ迨（サコ）、西隣りは牛ヶ迨口である。「迨」（サク・サコ…通り抜けの不自由な地の名称）といい、調査前は水田であり水源は通り谷の留池より求めていたようである。

古来、この地方は水の便が悪かったため畑地が多く、本調査地も山林か畑だった可能性が強い。

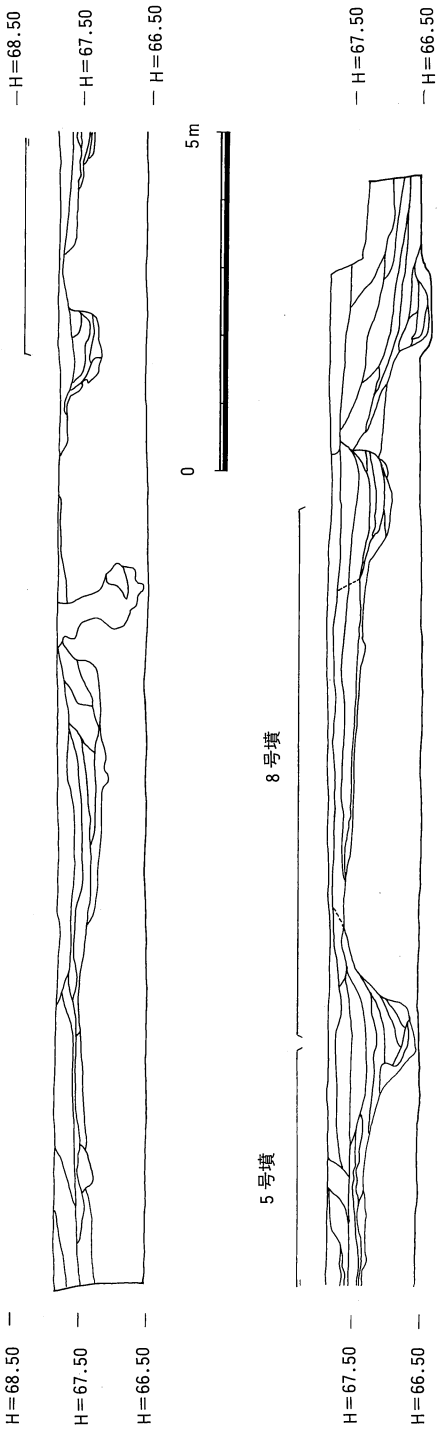
1823年４月（文政６年）安藤伊右衛門によって安藤井手が完成し通水された数年後、削平、埋立、削平、埋立によって水田として開発されたものと考えられる。それは、三段ある最上段の水田試掘トレンチ土層断面図を見ると明らかである。(郡家町文化財報告書　17　P15「26トレンチ断面図）巾約50mある水田で、東20m、西10mは盛土によって水平が保たれている。

調査対象地は、丘陵を三段に開発（以下上・中・下とする）した総面積3000m²の土地である。

調査は、表土（耕作土）除去を調査員立会いのもとに重機で行ない、後、人の力で上段から中段へと進めて行った。

先ず上段中央部で５号墳の周溝を検出した。径約17.5m、北西部分は一部失なわれているが、これは中段の水田を造成するため削り取られ埋土に使用されたものと思われる。同じように、８号墳の北西部分も失われている。

５・８号墳の周溝で一部重なりが見られ、重な



第５図　上・中段境界断面図

りの最深部（８号墳の周溝になる）より、弥生土器が検出された。この事から、５・８号墳の下層に弥生の住居跡の可能性も考えられたが、確実な資料を得るに至らなかった。また、５・８号墳の周溝埋土中より多数の円筒埴輪片を検出した事から、５・８号墳は、古墳時代の早い時期に構築されたものと思われる。

中段で６号墳が検出された。この６号墳は、削平が大であり周溝も浅いものであった。

下段で７号墳を検出した。周溝径約20m、５・８号墳と同様に、北西部分から西部分にかけて大きく掘削されその下段の水田との高低差は約３ｍである。ここでは土師器の赤彩の椀（弥生後期）・赤彩の高杯他が出土している。

６・７号墳共に多数の出土遺物から、古墳時代後期の円墳と考えられる。

８号墳は前述の通り、周溝の北西部分が失われている。

澤田山古墳群で検出された６基の古墳の中では周溝がいちばん深く、約1.20mを測る部分も見られる。位置的に尾根部分より谷寄りにあったと推測され、墳頂部と考えられる部分が存在しており、木棺の痕跡もあり埋葬施設であった事が確認された。然し削平と撹乱のため、埋葬施設としての確たる遺物の検出はなかった。

周溝では埴輪片・弥生後期の土師器の椀（２個）が検出されている。

９号墳は位置的に埋め立てられた所であるが、８号墳と同様谷寄りに位置していたと思われ、小型であるが（径９ｍ）円墳と認められるものである。

検出された墳高は、５号墳基部（地山面）より約0.5m低いが主体部が残存しており、主体部の一部から、完全な蓋杯一対・甕の口縁部（弥生後期）が出土した。また、床部より鎌か刀子と思われる鉄製品も検出されている。他、検出された遺物から７世紀初頭ごろの円墳と考えられるが、９号墳より約2.5m東で検出された土坑（ＳＫ05）で、弥生後半ごろと推定される完全な器台が出土しており、主体部周辺の埋土中より弥生と思われる土器片が出土している事からここでも弥生の住居跡との復合遺跡の可能性も考えられる。

10号墳。周溝はほとんど削平によって削滅し原形をとどめていないが、盛土中より円筒埴輪片が多数、また、一部残存している周溝底部より碧玉製の管玉が50個体検出された。周溝径は６基の古墳中最大の約20m内外であると推察される。

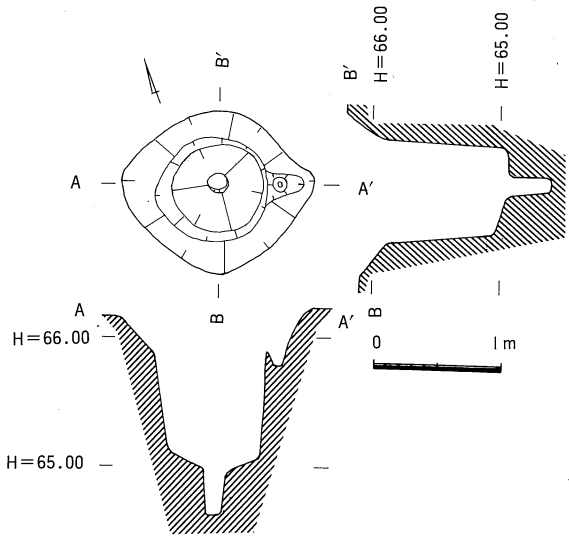
土坑関係では、グリッドＶ－Ｅの東で検出されたＳＫ04は、落し穴の様相をもつ土坑である。深さ約１ｍの底の中央部に丸太を建てていたと思われる深さ約50cm余の細い穴が穿かれている。（第６図　ＳＫ04　平面・断面図）

９号墳の東約2.5m、グリッドⅢ－Ａで検出された方形土坑で弥生後期ごろと推察される器台が出土している。かなり大型の器台であり、器高約21cm、受器部径20.5cm、底部径15.5cm、土師器でありかなり見ごたえのする器台である。この土坑の埋土は、赤黒色・黒色・黒褐色とほとんど黒系統であり、炭片を含んでいた事が特徴である。

（第９・10図　周溝埋土土層断面図（１）・（２））

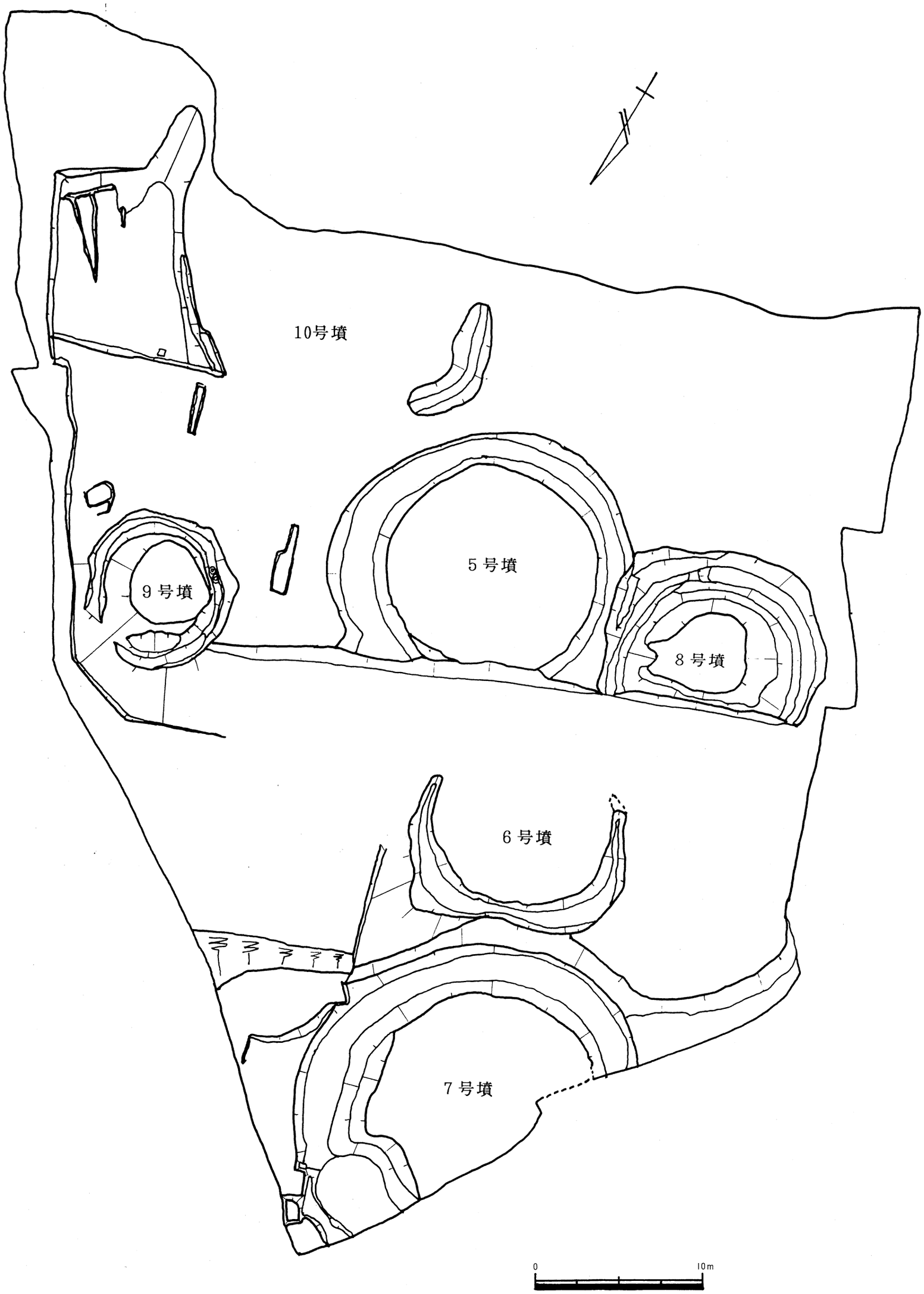
本調査地を概観するに、字澤田山の奥部字牛ヶ迨には尾根上に２基の古墳が確認されており（未調査）本調査地はそれより約100m下方である。

澤田山古墳群を上部からみて行くと、10号墳は尾根から郡家部落寄りの谷にかけて、３世紀後半～４世紀前半。５号墳は尾根上に３世紀後半～４世紀前半に。それと平行して８号墳は久能寺寄りの谷部へ。次いで尾根の裾部へ６号墳・７号墳が６世紀後半から７世紀へかけて、５号墳と平行して郡家寄りの谷部へ９号墳を７世紀初頭ごろ構築されたものと推察される。

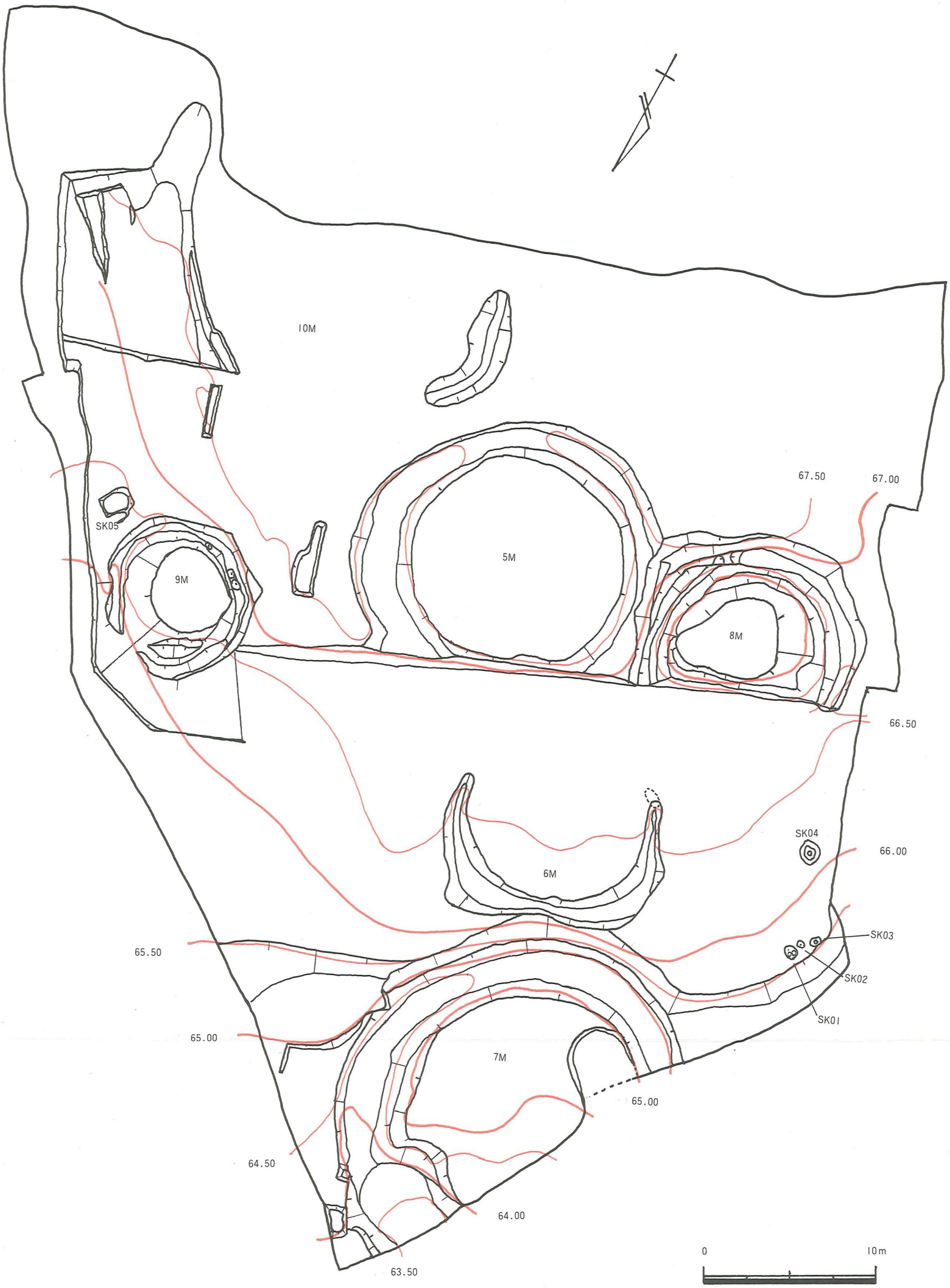


第６図　SK04平面・断面図

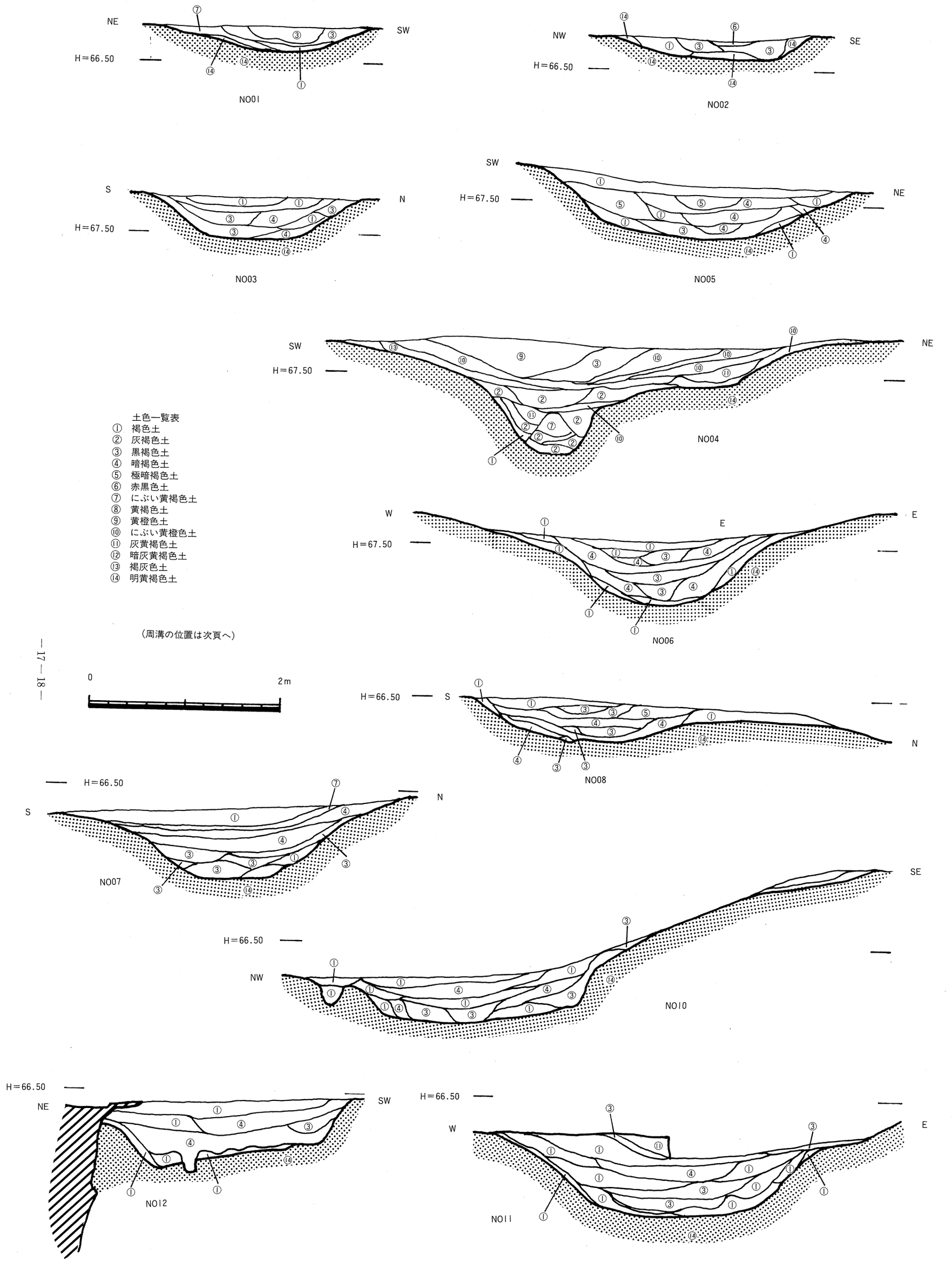
また確認までに至らなかったが、８・５・９号墳は弥生住居跡との復合遺跡の可能性も考えられる古墳である。（第７図　郡家澤田山古墳群概略図）



第７図　郡家澤田山古墳群概略図



第８図　郡家澤田山古墳群（調査後）平面図



土色一覧表

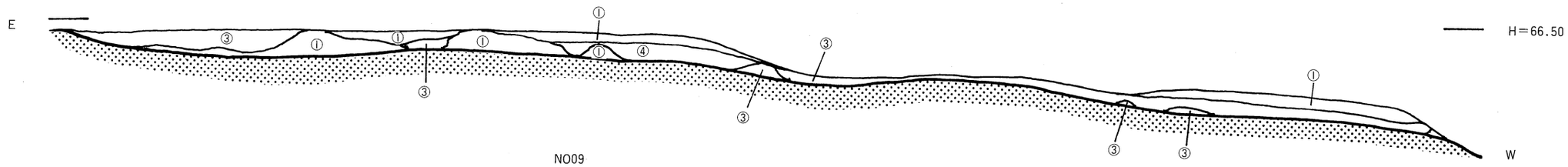
① 褐色土
② 灰褐色土
③ 黒褐色土
④ 暗褐色土
⑤ 極暗褐色土
⑥ 赤黒色土
⑦ にぶい黄褐色土
⑧ 黄褐色土
⑨ 黄橙色土
⑩ にぶい黄橙色土
⑪ 灰黄褐色土
⑫ 暗灰黄褐色土
⑬ 褐灰色土
⑭ 明黄褐色土

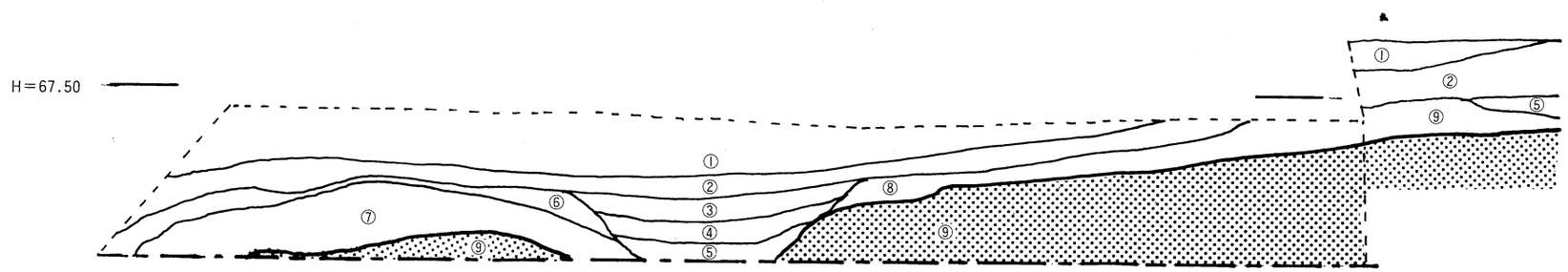
(周溝の位置は次頁へ)

第9図　周溝埋土土層断面図

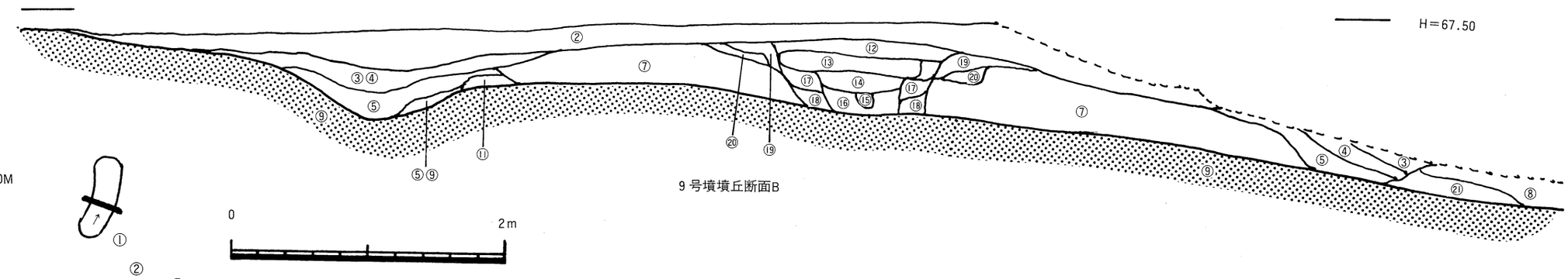
土色一覧表(NO09)

① 褐色土
② 灰褐色土
③ 黒褐色土
④ 暗褐色土
⑤ 極暗褐色土
⑥ 赤黒色土
⑦ にぶい黄褐色土
⑧ 黄褐色土
⑨ 黄橙色土
⑩ にぶい黄橙色土
⑪ 灰黄褐色土
⑫ 暗灰黄褐色土
⑬ 褐灰色土
⑭ 明黄褐色土

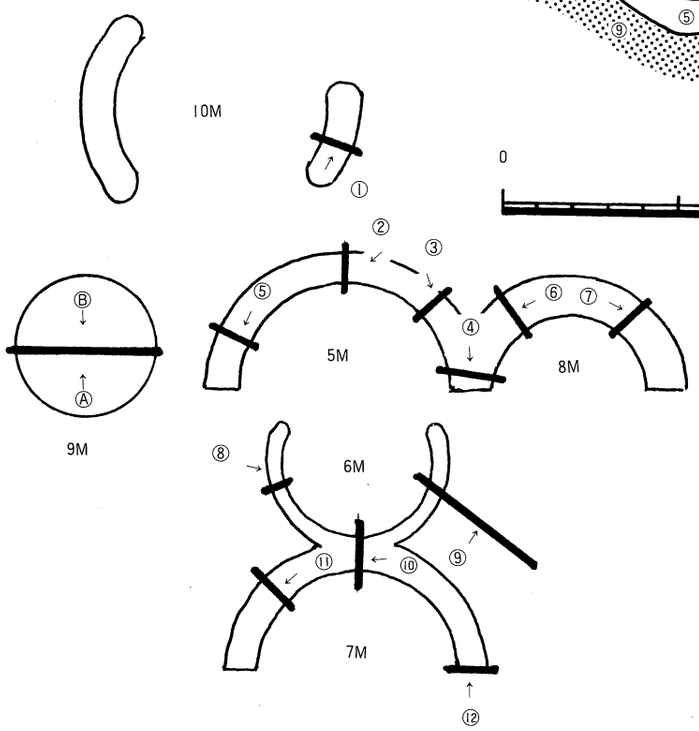




9号墳墳丘断面A



9号墳墳丘断面B



9号墳墳丘断面図土色一覧表

① 灰褐色粘質土
② にぶい灰黄褐色土
③ 灰褐色土
④ 暗褐色土
⑤ 黒褐色土
⑥ にぶい黄褐色土
⑦ 黒褐色土
⑧ 暗灰黄色土
⑨ 明黄褐色土（地山基盤層）
⑩ にぶい黄褐色土
⑪ 灰黄褐色土
⑫ 灰黄褐色土 } 木棺被覆土
⑬ 灰黄褐色土
⑭ 黄灰色土 } 木棺内埋土
⑮ 暗灰黄色土
⑯ 黒褐色土
⑰ 黒褐色土 } 木棺裏込め土
⑱ 黒色土
⑲ 灰黄褐色土
⑳ にぶい黄褐色土
㉑ 黒褐色土（旧表土の一部）

周溝埋土土層断面図図番号・壁方向

第10図　周溝埋土土層断面図9号墳墳丘断面図

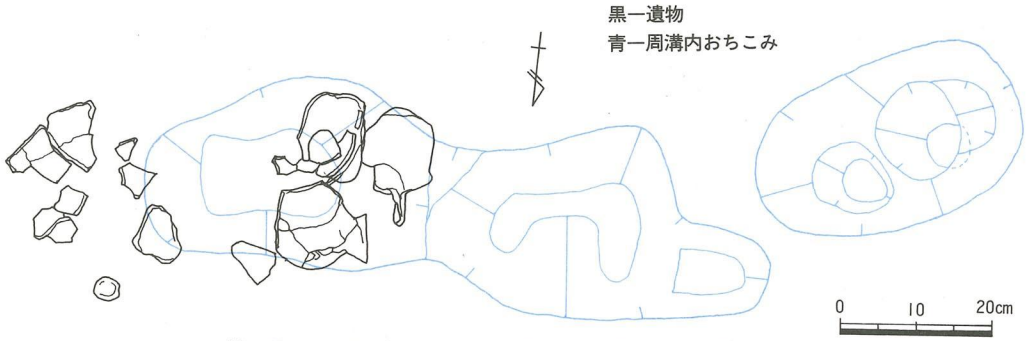
第２節　郡家澤田山古墳群の遺構と遺物

１．古　墳（第８図　郡家澤田山古墳群（調査後）平面図）

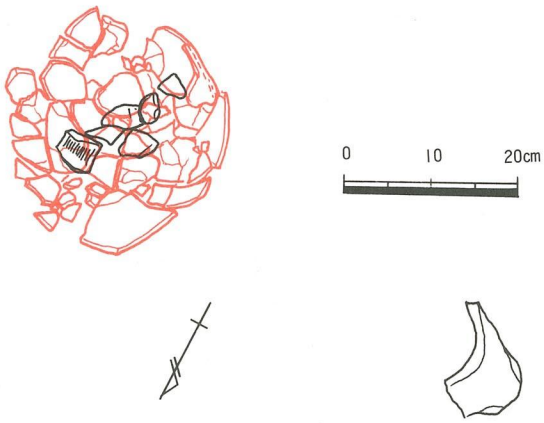
（１）５号墳

調査区の最上段と中段との境界中央部に位置しており（グリッドⅢC・D・ⅣC・D）径約18mの円墳である。主体部は失われており周溝のみによってその存在を知ることができる。周溝北西部分は中段の水田開発のため大きく削り取られ中段までの落差約1.5mである。周溝巾は1.7～3.7m、深さは0.45～0.60m、埋土は暗褐色系であった。

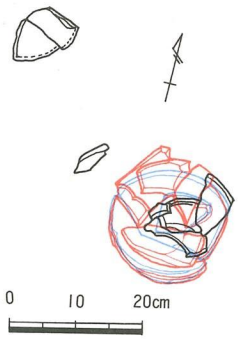
出土遺物はほとんど埋土中からであり、特に多数の埴輪片が検出されている。埴輪片は大部分が円筒埴輪片であったが中に形象埴輪と思われる沈線で格子紋をえがいた平板状の埴輪片も見られた。



第11図　５号墳周溝内出土遺物実測図（土師器の壺）



第12図　５号墳周溝内出土遺物実測図（土師器の甕）



第13図　５号墳周溝内出土遺物実測図（高台付広口の壺）

形のまとまった遺物としては、先ず須恵器の**高台付広口壺**（第38図１図版37－１）である。口径12.4cm、器高17.1cm、高台径11.2cm、高台高0.5cm、高台から外側へ斜めに立ち上がり肩部は異状に張り出し、頸部から外反して口縁に至り口唇は外反ぎみに立ち上っている。口唇の外面には凹線が見られ、ロクロ仕上げ指調整である。

土師器直口壺(第38図２図版37－２)。座りの悪い壺であるが肩部から頸部に移る所にふくらみが見られ胎土は粗であり胴部には黒く煤がかかっており、生活用具として使用したと思われる。器高16cm、胴部径7.6cm、口径4.6cmである。

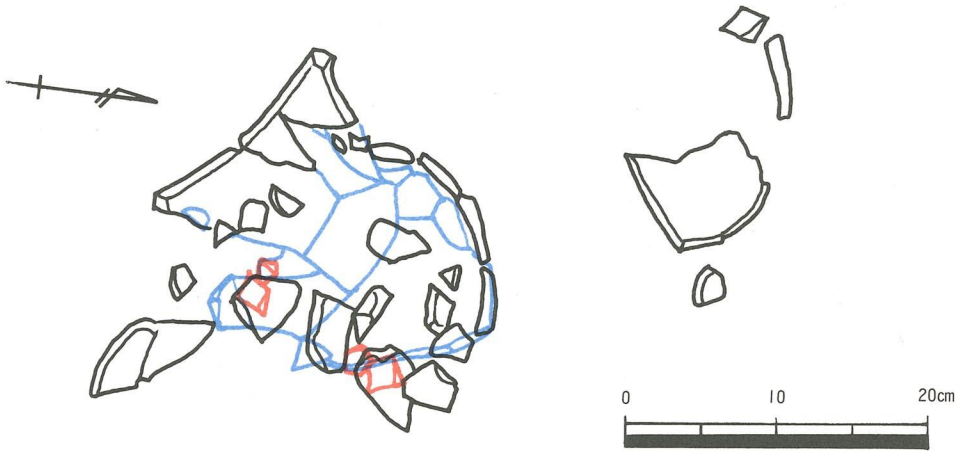
土師器の甕下半分（第38図４図版37－３)。鉄製品は**刀子**の部分（第45図60図版46－60）と推察されるものが検出されている。

（２） ６号墳

中段中央部に検出された円墳である。周溝部分は７号墳周溝と接しており（第７図　澤田山古墳群概略図）径約13m、周溝の深さ北側40cm、南側11cmと、小型の円墳であるが、削平をかなり受けており、南東側周溝は跡かたもなく削り取られている。

埋土は黒褐色・暗褐色・極暗褐色とほぼ褐色系であり、出土遺物も少なく、**須恵器高杯**（第38図７図版37－７）は、ロクロ仕上げであり脚部中央付近に２本の沈線を施し、裾先端部は上反し外側に凹線が見える。**土師質壺**（第38図８図版37－８）外面は平行叩き・内面は円弧紋叩きで調整されておりロクロで仕上げられている。

築造年代は、出土遺物から５世紀末から６世紀ごろと考えられる。



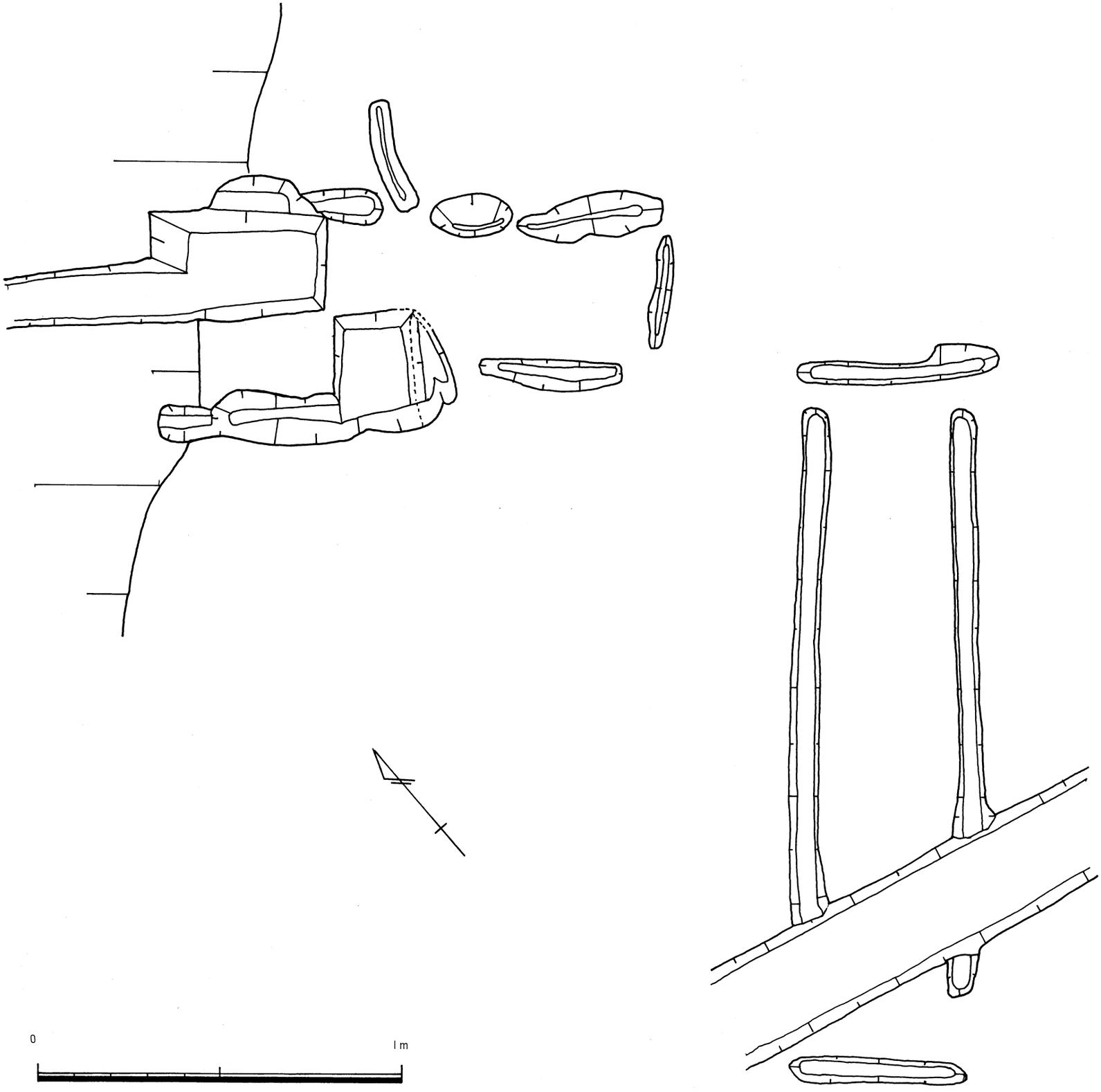
第14図　６号墳周溝内出土遺物実測図（土師質壺）

（３） ７号墳

最下段に位置し（第７図）西側部分は削りこまれ次の段までには約３ｍの落差がある。径約21m・周溝の深さは43～103cmと浅深地点は約2.4倍である。周溝巾は、３～４ｍとかなりの巾をもつ周溝である。

埋土は、上・中層は黄褐色系に近く下層は炭片を含む暗褐色土であり地山は暗黄褐色土である。

出土遺物は、内外共に赤彩の**土師器高杯**（第39図９図版37－９）・**椀**（第39図10図版37－



第15図　8号墳頂部埋葬施設平面図

10）各１個、**須恵器壺**（第39図11図版37－⑪－①38－11－②）等であった。

高杯は、口径7.5cm・器高10.1cm、底部径4.3cmを測る。脚部から口縁に至る杯部曲線には段差が２ヶ所あり、全体的に指調整か指頭で押したと思われる凹部が多く見られる。

椀は、口径12.4cm、器高6.6cmを測り、口縁は内反ぎみであり指頭で調整されたものか 凹凸の多い杯である。共に赤彩が施されており祭祀に使用されたものか。共に弥生時代後期頃の土器と推察される。

壺には頸部に波状紋が施されている土器番号№11、土器番号№31－イ・31－ロがある。№31－イは壺の上部であり№31－ロは同一個体の底部である。内面は円弧紋叩き、外面頸部には回転ハケナデ、胴部は平行叩で仕上げている。

築造年代は、弥生後期と思われる土器も出土したが他の出土遺物より、６世紀後半～７世紀初頭ごろと推察される。

（４） ８号墳

調査地上段５号墳の南西側に位置し、周溝径約13m、東側で５号墳の周溝と深く接しており、５号墳の周溝を掘り下げ８号墳の周溝を掘ったものと推察される。ちなみに、接点である５号墳周溝の深さは約55cm、８号墳の周溝は約121.0cmである。

８号墳の周溝は他に比して深く約110cm～125cm、巾約２～３m、周溝内縁から主体部と思われる上部平坦面までの高低差約45cm、平坦部は墳頂部と考えられ、木棺痕が２ヶ所(平坦面の北側１・南側１）検出されている。(第15図　８号墳墳頂部埋葬施設平面図)

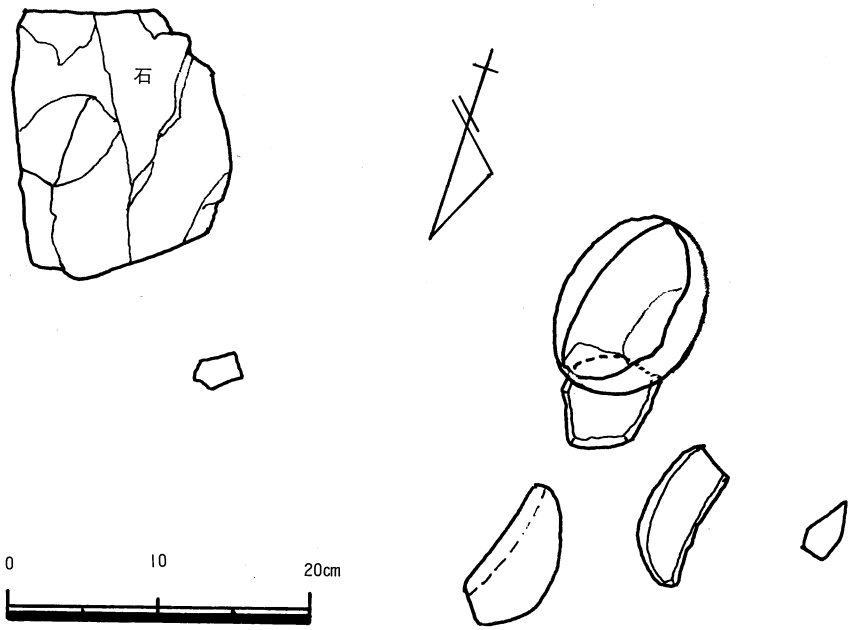
木棺の痕跡南側のもの短径約40cm、長径約190cm、深さは２～４cm。サブトレチを掘った関係で消滅した箇所があるが長方形の痕跡である。北側のものは長方形の一端がサブトレンチ・削平等で消滅しているが、短・長径共に南側のものとほぼ同じである事が伺える。以上の事からこの８号墳は、南側の木棺痕の人物が埋葬され古墳を築造しその後北側の木棺痕の人物を埋葬したものと推測される。(第15図　図版17－１・２・３・４）

周溝内の土質は褐色土（暗・黒）が主であり、遺物は多数の円筒埴輪片をはじめ、土師器の椀　２個・(第39図12・13図版38－12－①～③) 土師器の甕片１個 (第39図15　図版41－15）須恵器の甕片１個（第39図14　図版40－４）を検出している。

土師器の椀 ２個共に弥生後期の土器であり、２個共内・外に赤彩が施されており土器№12の外面$\frac{2}{3}$は煤がかかって真黒である。№12の口径13.6cm、器高5.2cm、底部径５cm、外面底部の中央あたりがやや浮き上っている。体部は角張った内反を示しながら立ち上り、口縁部は極端に内反している。№13は、口径14cm、器高5.1cm、底部は中央部も接地しており、孤を描くようになだらかに内反しながら立ち上がり、口縁部は№12と同様極端に内反している。出土地点は５号墳周溝と８号墳周溝の接点近くの最深部であった。調整は２個共指

ナデであるが、技術的に見てかなり高度な物である。

須恵器の甕片口縁部には鮮明な波状紋が施されている。

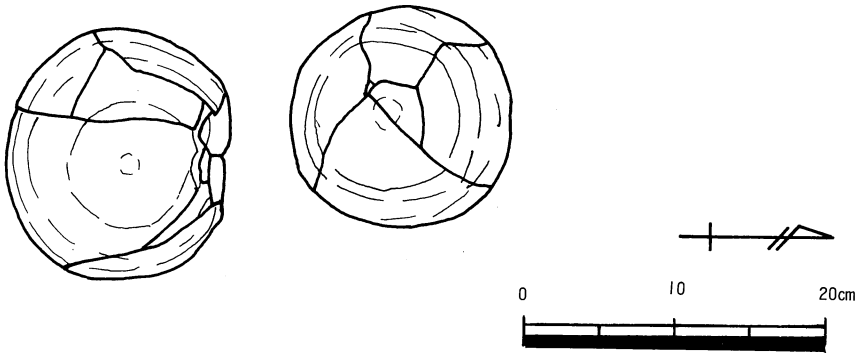


第16図　8号墳周溝内出土遺物実測図（土師器の椀）

（5）9号墳

5号墳の北東方向約20m、上・中段の境界上に位置しており、耕作土除去の時点ではまだ確認されていなかったが徐々に盛土を除去するに従って周溝・墳体を検出したものである。周溝は削平か撹乱か、かなり復雑な高低をもったものであった。周溝径約9m、小型の円墳である。墳頂部分には土坑と思われる落ちこみも見られ、北側は周溝が切れており、南・西側は高低差・巾が著しく変化し、北西側は溝底が失なわれ、墳頂部よりなだらかな傾斜で中段の地山に続いている。

出土遺物は、**蓋杯**1対（第40図18 19図版38・39－18 19）、**土師甕片**（第40図23・24図版39－23、41－24）、**須恵の高杯**（有蓋）（第40図20図版39－20）、**持ち手付き椀**（第39図16図版38－16）弥生土器と推察される**甕頸部片**（第40図22図版40－22）、**鉄製品**（第45図59－64）であった。



第17図　9号墳出土遺物実測図（須恵器の蓋杯）

蓋杯は、埋葬主体部の底面より出土したものである。杯蓋器高4.6cm、基部径15.2cmを測り、粘土の紐（大・小）をうず巻き状に巻き上げロクロ指調整で仕上げられているため凹凸の多い杯である。外面底はヘラで仕上げているが突起が残っている。杯身器高5.2cm受部径16cm、基部径13.4cm、仕上げは杯蓋と同じであり、底に糸切り痕が見え外面には煤がかかっている。

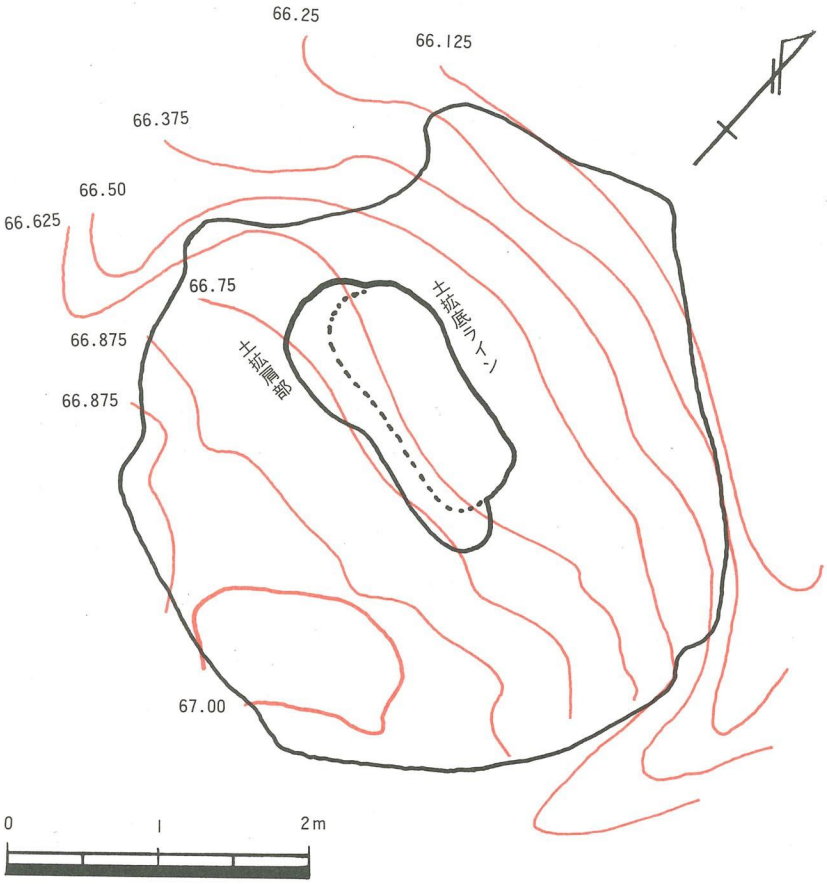
土師甕片№24は、弥生後期～古墳初期ごろの土器と推察され口縁部が薄く、阿弥大寺遺跡出土の甕と共通点があるように思われる。

須恵の高杯は、器高7.5cm、口径11.4cm，杯高3.5cm、脚高４cm、底部径10.4cm、を測り非常に低脚の杯である。かなり硬質でロクロ仕上げがなされている。

№22は弥生土器と考えられ、肩から口縁に移る部分である。頸部にはふくらみの輪があり縄文と思われる紋様がつけられている。口縁内面はハケ調整・肩内面は指調整であり、外面にはハケ目が見られる。

持ち手付き椀は、持ち手は脱落しているが持ち手がついていたと思われる痕跡が鮮明に残存している。厚手で擂鉢状の形をした器であり、口径7.8cm。器高6.3cm、指調整・胎土は非常に粗である。

鉄製品は、刀子の先端と考えられる№59(第45図59　図版46－59)、刃物と思われるが基部が湾曲し反り返っている№60(第45図60　図版46－60)、主体部底面と考えられる所から検出された釘状の製品№61（第45図61　図版46－61)、鉄鏃ではないかと考えられる№63・64（第45図63・64　図版46－63・64）である。



第18図　9号墳墳頂部平面図

（6）10号墳

調査地の最上段5・9号墳の奥部に検出された円墳である。

周溝の残存面積が少なく、5号墳の南東側におちこみが検出され最初は土坑と思われていたがその東側を検索するうちわずかの周溝痕を検出し、総合的に円墳である事を確認した。

このグリド（ⅠA・ⅡA・B）では盛土中より他に比して円筒・形象埴輪片がいちばん多く出土したところであり、5号墳南東周溝痕と思われる落ちこみからは、復元は不可能であったが赤彩の壺、碧玉製管玉が55個検出されている。(第19図)

位置的にこの10号墳がいちばん削平を多く受けていると思われるが、周溝痕から周溝径を測ると約20m内外あったと推測され、周溝の深さは、西側の落ちこみと思われていた所が約25cm、東側が約36cmである。

出土遺物は、須恵の**椀**（第40図26　図版40－26)、土師の**甕**（第40図28・29・30　図版40－

29　41－28・30)、須恵**高台付椀**(第40図27　図版41－27)、**埴輪片多数**(第41図32、34 35・37～46　図版41－32・42－34・35、42－37～41、43－42～46)、**器台脚部**(第42図36　図版42－36)、**碧玉製管玉**(第45図66・65　図版46－65)である。

須恵器の椀№26は、高台がなく器高6.5cm、口径14cm、口形は楕円状になっている。焼成時のひずみであろう。かなり肉厚のボッテリとした感じの器である。体部から口縁の境界あたりに凹線が2本描かれている。口縁は内反しながら立ち上がり、口唇はやや外反ぎみにまとまっている。

土師器の甕№28・29はほとんど同じ口縁部であり、外面に数本の凹線を施している。ただ違っいる部分は頸部の反り具合である。№28は内面が角張った反りであり、№29は外反がなめらかな曲線である。口縁は共にハケ目調整である。№30は、口縁内・外面共にハケ目調整となっている。

高台付須恵器椀№27は、器高3.9cm、高台高0.4cm、高台径10cm、口径12.2cm。体部は高台ぎわからやや内反ぎみに外に張り出しその後口唇に向かって斜め外に傾斜しながら直線状に立ち上っている。椀にしては浅く皿にしては深いものである。内外面共に回転ヘラ削り仕上げである。

埴輪片は多数出土したが、№32は、数多い破片の中から円筒埴輪の基部として復元できた遺物である。土師で胎土は精良・焼成は軟質であり洗浄によって胎土が溶けてしまうほどの軟らかさであった。基部径15.5cm、肉厚は約1.5cm、内外共にハケ目調整であり、外面は上下のハケ目、内面は左右・斜めのハケ目で調整されており、外面には赤彩が施され、煤がかかっている。基部からの立ち上がりは斜め外側に直線状に上っている。器高が1mある円筒埴輪と仮定すれば口径は約0.5m、器高の約半分という事になる。

№34・35は、円筒埴輪の基部であり35は赤彩が施されている。№41は円筒埴輪の基部であるが鍔のあるものである。34・35・41共内外はハケ目調整で仕上げられている。

№37～40は朝顔型円筒埴輪の朝顔部分である。口径が非常に大きくいずれも30cm以上である。この口径から推察できることは、相当の器高と基部の大きさをもっていたものと思われる。花部分の傾斜もさまざまで、花から体部に移るくびれの部分に鍔をもったものも見られる。いずれも口唇部はきれいな円形であり、仕上げは内外共にハケ目で調整されており、外面には赤彩が施されている。口唇部径は、№37－34cm、№38－32cm、№39－32cm、№40－34cmである。

№42は朝顔型円筒埴輪の頸部であり、内外共にハケ目整形痕が見られ鍔がついている。ハケ目整形も一定方向でなくばらばらである。土師器であるが焼成はやや軟質であり、胎土は密である。

№43は朝顔型円筒埴輪の肩部から頸部に移る部分である。内外共に櫛目調整、内に指調

整痕が見られる。(第43図43　図版43－43)

№44は形象埴輪（人物）の肩から腕にかけての一部と考えられる。橙色をしており中は空洞となっている。数多くの出土した埴輪片から人物埴輪の仲間と思われるものをつぶさに検索したが、一片も探しだす事が出来なかった。(第43図44　図版43－44①～④)

№45・46は平板に格子紋を沈線で描いたものであり前述№44と同じ橙色をしている。

45は縁が盛り上っており、切断面に線が見えることから盛り上っている部分は最初平板部分を作り後で他の粘土を押し付けた事が分る。(第43図45・46　図版43－45・46)

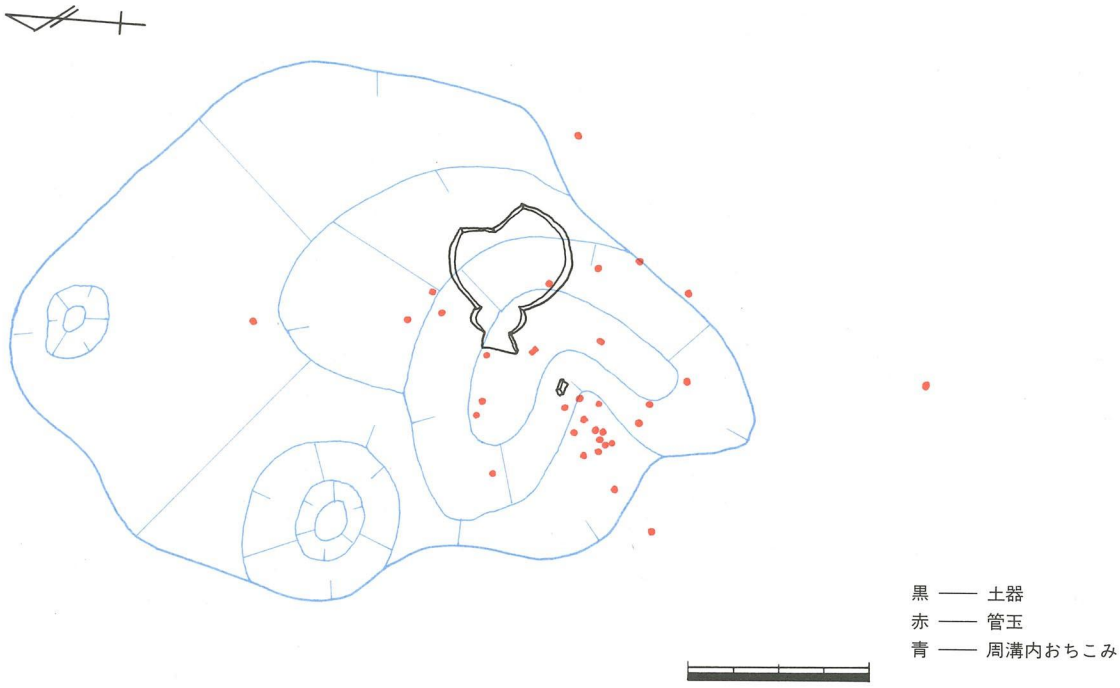
46は平板に円を刳貫き縁に盛り上がりをつけた一部分である。

№45・№46を形象埴輪片とすると、№45は、楯形埴輪の楯の部分か家形埴輪の屋根か壁部分ではないかと考えられ、№46は、家形埴輪（四注造）の壁部分（丸窓）ではないかとも考えられる。

管玉は、径4.5～4.8mm、穿かれた穴の径約２mm、長径1.1～6.2mmである。

製造過程は不明であるが、かなり高度な技術によって造られた事が分かる遺物であり、色は青灰（10ＢＧ６－１）である。

これ等出土遺物より10号墳は、古墳前期（４世紀前半）ごろの円墳と推測される。



第19図　10号墳周溝出土遺物実測図（管玉）

2．土　坑

土坑は１～５まで検出された。

１～４は調査区域外であったが、表土除去の際遺構の様想を呈していたため検索を行ない検出したものである。位置は中段最西端６号墳の周溝西約11mの地点であり地形的にいえば谷部に属するところと思える。

（１）ＳＫ01（第20図）

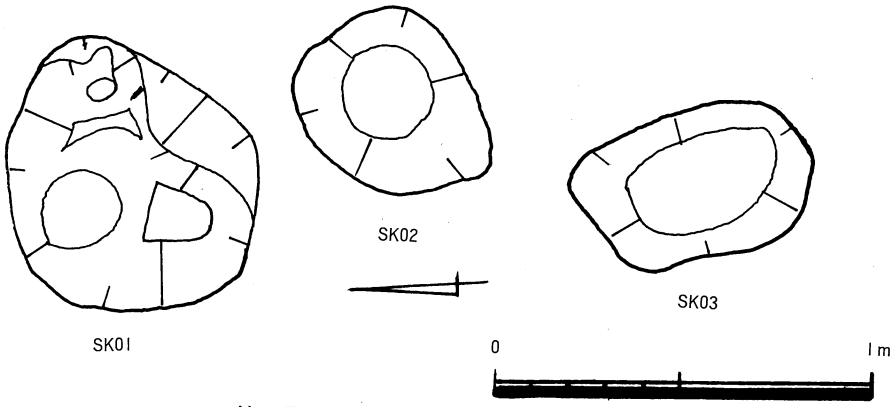
直径約70cmの円形、深さ33cmの土坑である。坑内で**鉄製品**（第45図58　図版45－58①）と**土師・須恵器片**が検出された。鉄製品は何に使用されたものか不明であるが、巾2.2cm 、長さ2.8cm、馬蹄形に曲折したものである。

（２）ＳＫ02（第20図）

直径約45cmの円形、深さ約27cm、埋土中より**土師・須恵器片**が検出されている。

（３）ＳＫ03（第20図）

楕円形であり、長径約70cm、短径約40cm、深さ約27cmを測る。埋土中より**土師器片**が検出されている。



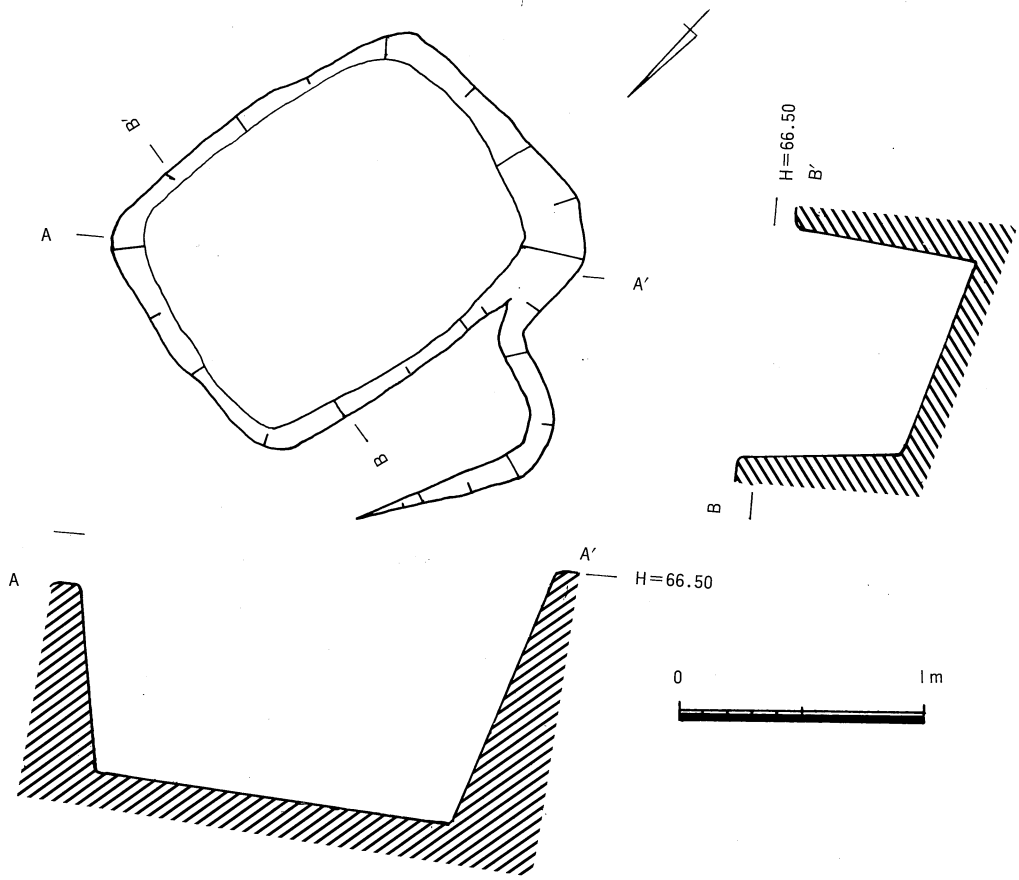
第20図　土坑SK01～SK03平面図

（４）ＳＫ04（第６図　図版27－（２））

ＳＫ04はＳＫ03の南約５ｍの地点に位置している。長径1.5m、短径1.3mの楕円形であり深さ約1.2m、底面積約0.4m²。その中央部に径15cm、深さ50cm余の穴が穿かれている。土坑上部の開口面積は小さいが、底の穴に槍状の木を埋めこみ落し穴に使用されたものと考えられる。埋土は黒褐色土が主であり遺物は検出しなかった。

（5）ＳＫ05（第35図　図版27－（３））

ＳＫ05は、グリッドⅢ－Ａの北西隅、９号墳周溝約2.5m東に位置しており、長径1.5m、短径1.2mを測る長方形状の土坑である。深さ約１m、埋土は黒色土を主体に、黒褐色 、赤黒色土であり地山は明赤褐色の粘質土であった。



第21図　土坑SK05実測図

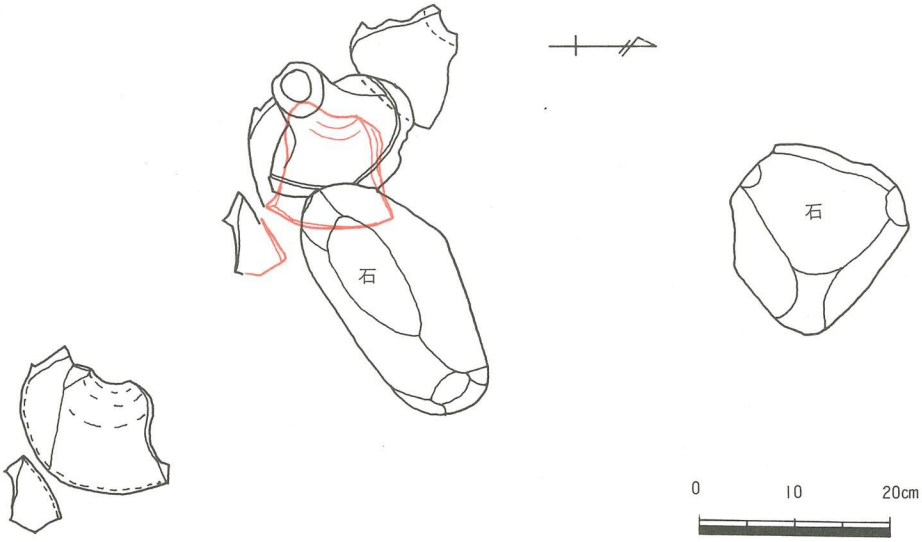
出土遺物は２基であり、いずれも弥生後期と推定される土師器である。

（第39図17　図版38－17　第40図21　図版39－21）

№17は**器台**である。底部径17cm、器高20cm、器口20.2cm、土師器の調和のとれた大型の器台である。表面は指ナデ、内面はヘラ削り調整、回転ロクロ仕上げとなっている。

器物上部の受部口縁外面には沈線が８本、底部の裾には沈線が６本描かれ、胎土は粒状の極小の砂が混じっており、手で触れるとややザラザラした感触である。生活に供したものであろう上下に煤がかかっている。

№21は**壺か甕**の底部である。一見して高台があるように見えるが底部の中心が少し浮いているにすぎない。厚手でガッチリとした作りであり外面は指ナデ調整、内面は棒の先で叩いて調整された痕跡が見られる。



第22図　土坑SK05出土遺物実測図（器台）

3．石器・石材

研磨された面をもつ石製品－３点（№48･51･56）、敲台と考えられる石材－１点（№50）、剝片と思われる石－１点(№49)、用途は不明であるが何等かに使用されたと思われる石材－３点（№52・53・54）、他多数の石が出土している。

№51（第44図51　図版45－51）はグリッドVI－Ｃの盛土中より検出されたものであり、研磨面をもつ小片である。たぶん砥石の破片ではないかと考えられる。色は黄褐色である。

№48・56（第44・45図　図版44－48　45－56）は、ＳＫ05の埋土中より検出したものである。

№48は破砕された一部分であり、一面が研磨されているが研磨面の裏側は中が窪んでいるので、**石皿**の破片とも考えられる。色は、にぶい黄褐色を呈している。

№56は剝離した粘板岩を加工したものか、加工されたものから剝離したものか不明であるが、角を丸く削り研磨した現代のタイルによく似た石材である。色は緑黒色である。

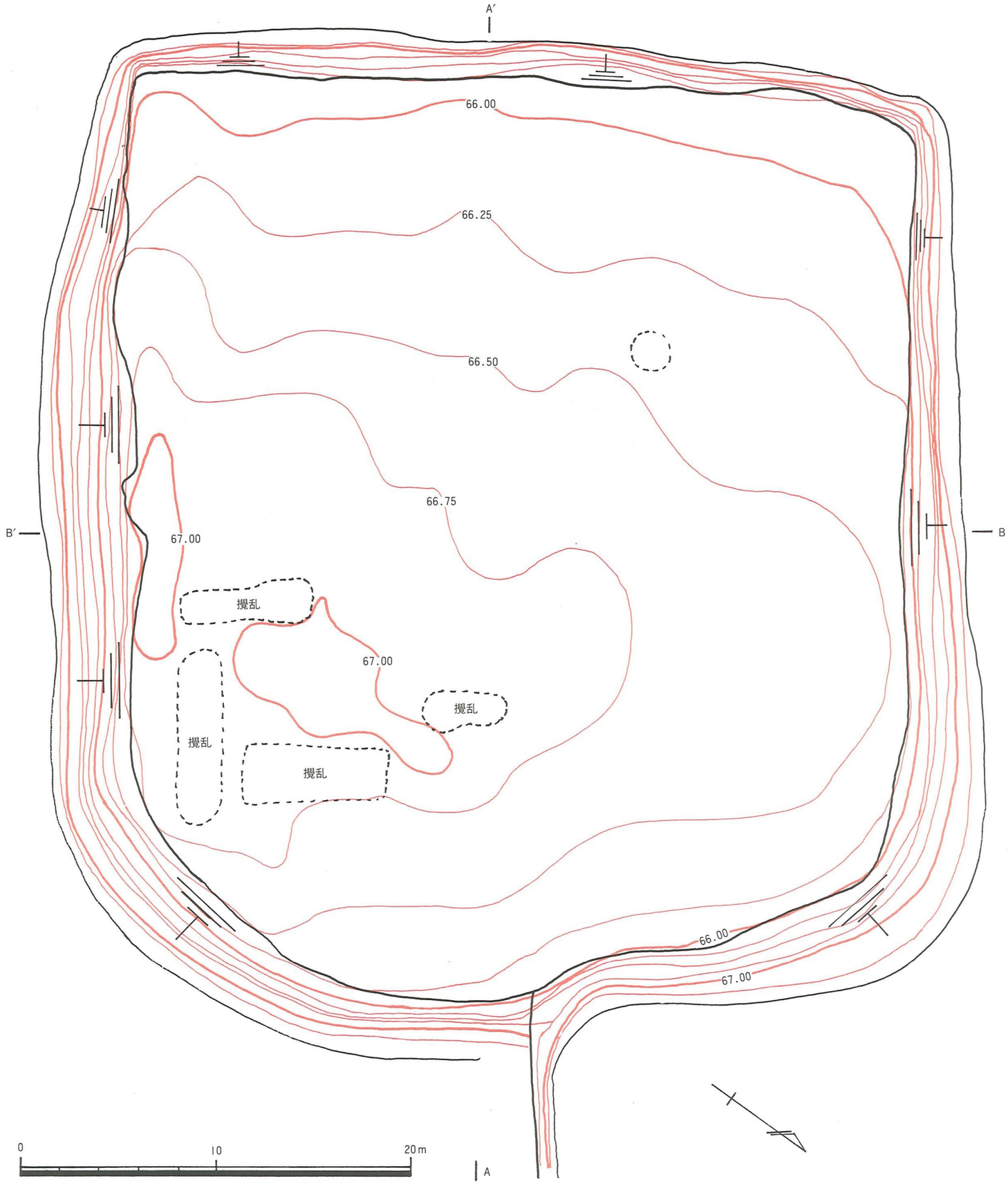
№50（第44図50　図版44・45－50）はグリッドII－Ａ盛土中より検出したものである。全体に丸味を帯び、色はにぶい赤褐色である。平坦面は中央部が窪んでいる事から敲台ではないかと考えられる。

№49（第44図49　図版44－49①②）は器名は不明であるが、何かの石器の剝片であると推定される。色は灰白色である。

№52（第44図52　図版45－52）は、５号墳周溝埋土中より検出された直径３cm内外の球形の石である。色は暗灰色（N310）であるが使途は不明である。

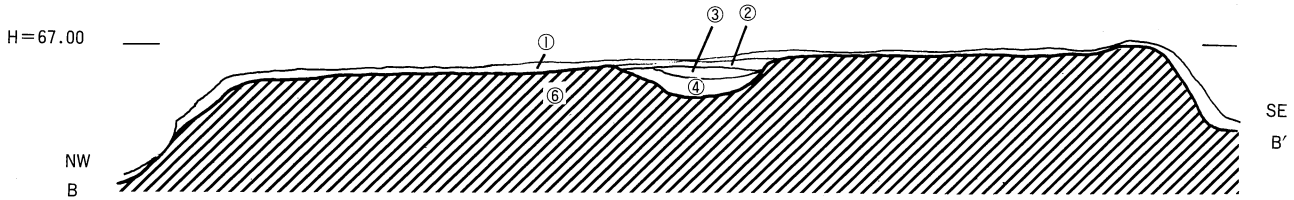
№53（第44図53　図版45－53）は、７号墳周溝埋土中より検出された角のないやや扁平な丸味のある石である。色は緑灰色（10GY 6/1）、中に長石の層が見える。10号墳で検出された碧玉製の管玉の色によく似ており、使途は装飾品の原材料の可能性が考えられる。

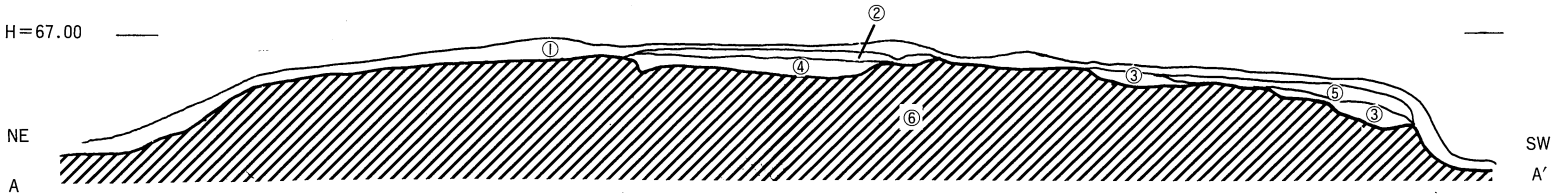
№54（第44図54　図版45－54）ＳＫ05埋土最下層より出土した石材である。原型は不明であるが敲石の一部分ではないかと推察される。色は黄褐色を呈している。

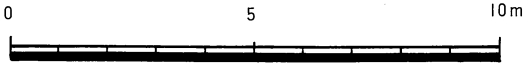


第23図　御建山27・31号墳（調査前）墳丘平面図

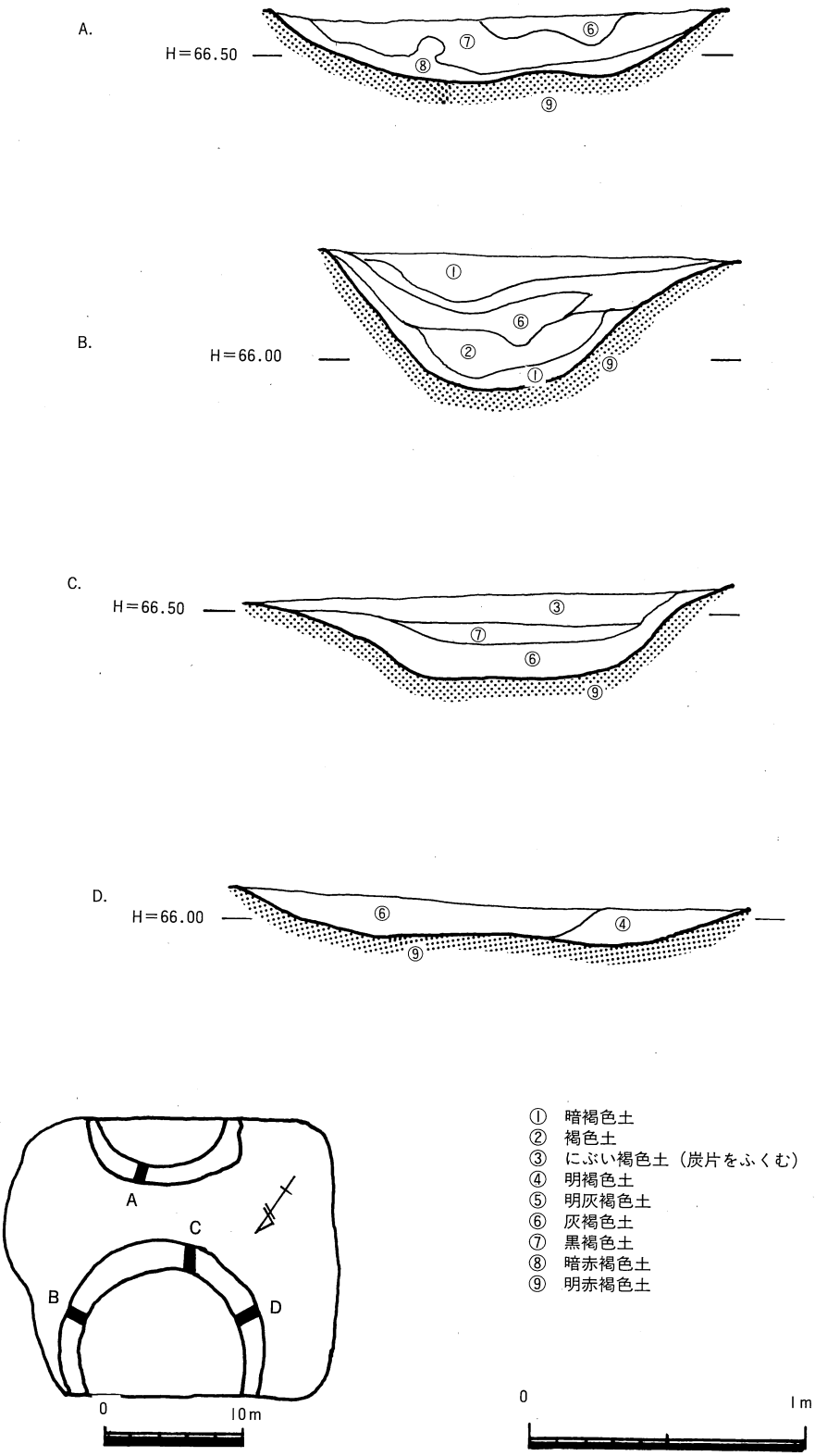
① 暗褐色土（表土）
② 鈍い褐色土（炭片を含む）
③ 黒褐色土（炭片を含む）
④ 灰褐色土（炭片を含む）
⑤ 明褐色土（旧表土）
⑥ 明赤褐色土（地山）



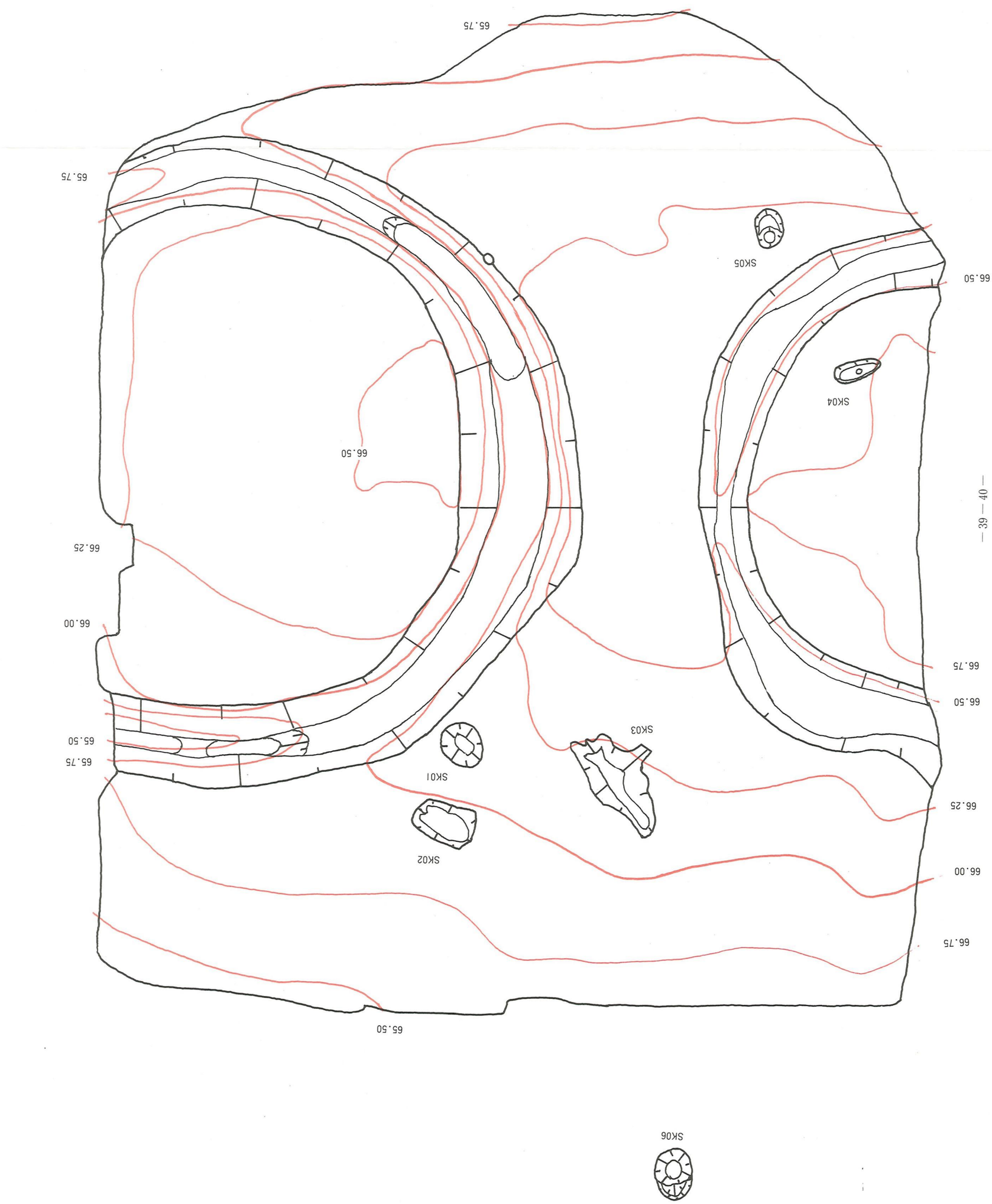




第24図　御建山27・31号墳（調査前）墳丘断面図



第25図　御建山27・31号墳周溝ベルト土層図



第26図　御建山27・31号墳（調査後）墳丘平面図

第４章　久能寺御建山27・31号墳の調査

第１節　久能寺御建山27・31号墳の概要

調査地、久能寺字御建山は郡家西小学校裏山（128.6m）から北西に伸びる尾根の裾部に当たり、300mあまり下れば平地に至る地点である。平地からの高低差約17m、その裾部を削平し段々の水田が開発されているが、その水田中にポツンと残された丘陵(20×20×２)これが久能寺御建山27・31号墳である。

先に調査した郡家澤田山古墳群からは、南西約150mに位置している。

何故水田の中心にこの様な丘陵を残したか。水田耕作上から考えると非常に邪魔な存在であったと思われる丘陵である。然し古くから「古墳である」と云い伝えられていた為、削平も受けないで残されたものであろう。

郡家町文化財協会刊行『郡家町の地名』（平成５年10月）によると、〝御建とは鳥取藩直轄林の敬称で藩主の狩猟場でもあった。麓地帯に古墳が円錐小丘状に遠望されたので俗称小山とも呼んだ。かつて盗掘された古墳であったが、昭和32年の本格的な調査で、県内最初に発見されたはにわ列古墳であった。・・・・・・〟と記されている。

調査地は水田面Ｈ＝64.5m、丘陵の最高位置Ｈ＝67.13m、北東部分法敷肩Ｈ＝約66m、南西部分法敷肩Ｈ＝約65.5m、南東部分法敷肩Ｈ＝約67m、北西部分法敷肩Ｈ＝約66m、北東から南東は約0.5mの傾斜、南東から北西へは約１mの傾斜（第24図　御建山27･31号墳墳丘断面図)をもち、水田面と約２mの高低差をもち一辺約20m面積約400m²の平坦な方形であり、地目は畑であるが数年前より耕作がなされていないため雑草・樹木の繁った、一見、小山状の丘陵である。(図版29図（１))

調査は先ず人力により暗褐色土層である表土を除去した。表土はいちばん厚い所で40cm内外、薄い所で10cm内外を測り、中には５cmほどで明赤褐色土層（地山）に達する所もあったが、雑草の根・樹木の根等がビッシリ張っており作業は少々困難をきたした。

法敷面の表土は樹木根が多いためと、丘陵四方10mの水田耕作土を除去するため調査員立会いのもとに重機を導入した。(重機稼働1.5日)

以上の結果、丘陵上面に周溝２本（27号墳周溝$\frac{1}{2}$・31号墳周溝$\frac{1}{2}$）・土坑－５・水田面に土坑－２を検出した。

調査前は27号墳として１基の独立した方墳の出現を期待していたのであるが、残存していた丘陵は２基の円墳の中間点であった事が確認されたものである。

27号墳・31号墳共に周溝の半分しか現存してなく、共に主体部は失われておりその痕跡

をも確認するに至らなかった。

27号墳の周溝は丘陵の$\frac{1}{4}$以上を有し、丘陵の中心部から北寄りに径約16mを測る半円を描いている。最深部は丘陵の中央部あたり約0.7mを測る。最浅部は周溝西寄りの約0.2mである。周溝巾は、丘陵中央部付近が一番広く約2.8mを測る。

31号墳は丘陵の南東寄りに径約12mのうち5m程度を残している周溝である。27号墳周溝より約0.25m高位置にあり、周溝の深さも27号墳に比して浅く、最深部で約0.25m、最浅部で約0.05mである。

埋土は27・31号墳共に、灰・黒褐色土層が主であった。北寄りは灰褐色土、中央部分は灰黒褐色土、西寄り部分は灰褐色土である。

出土遺物は、27号墳では丘陵中央部付近の周溝最底部で高杯の杯部分・脚部分が検出されている。いずれも赤彩が施された土師器であり、中には口径23cm・杯高8.8cmを測る大型の高杯の一部も検出している。

31号墳の出土遺物は少なく、須恵器の杯蓋の一部のみであった。

周溝外で検出した遺物は、ＳＫ02から蓋杯の杯身部が出土している。

土坑は１～７まで検出された。ＳＫ01～ＳＫ05は丘陵上であり、ＳＫ06は丘陵南西側の水田中で、ＳＫ07は丘陵北側水田の中からである。（第25図）

第２節　久能寺御建山27・31号墳の遺構と遺物

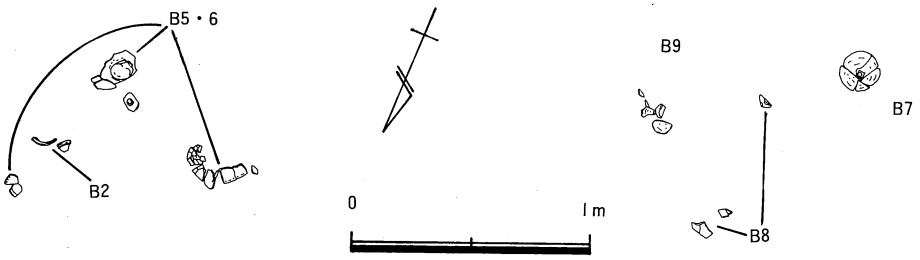
１．古　墳

（１）27号墳

丘陵の北西部分に検出された周溝である。周溝の中心部は丘陵上にあるが、主体部の存在・痕跡は皆無であった。

周溝の底部高は、丘陵中央部付近Ｈ＝66.00cm、東側の端部Ｈ＝65.8cm、西側の端部Ｈ＝65.4cmである。周溝巾は2.8m～1.8mとなっている。

埋土層も東側が複雑であり西側は単純である（第25図）。



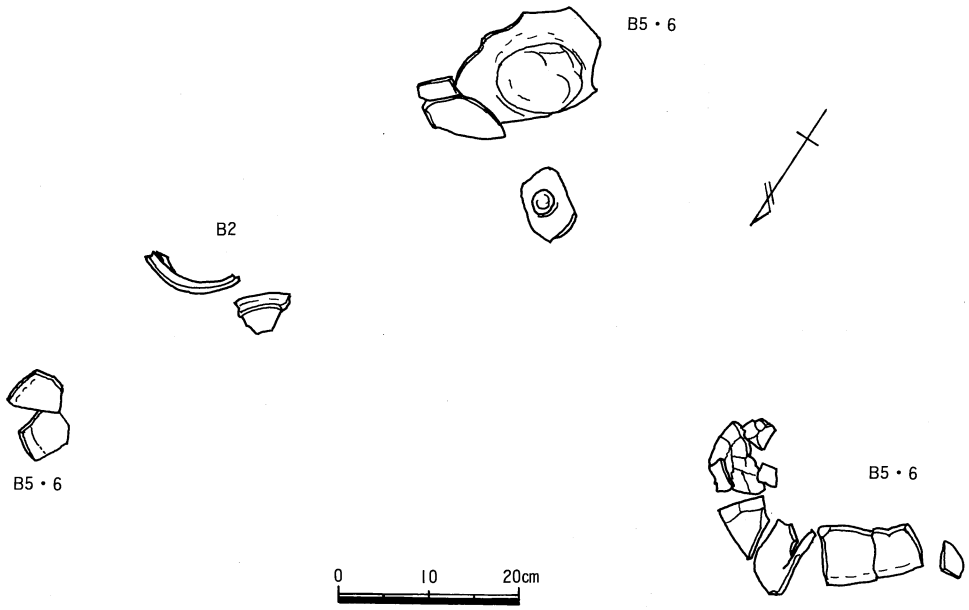
第27図　御建山27号墳遺物出土状況図

出土遺物は、周溝中のいちばん広い、いちばん深い丘陵中央部付近に集中していた。いずれも土師器であり、**壺の口縁部片**（第46図 B4　図版47－B4）以外は総て赤彩が施されている。赤彩の施されている出土遺物は高杯が５点であった。内訳は、**杯部**１点（第46図 B6 図版47－B6）、**脚裾部**１点（第46図 B5　図版47－B5）、杯・脚の一部失われているもの３点（第46図 B7・B8・B9　図版46－B7・B8・B9）である。

壺の口縁部は口径15cmを測り、頸部が極端に括（くび）れ、内外共にロクロナデ仕上げである。残存器高が3.5cmであるため確実な資料を得るに至らなかった。

No.B6は、口径23cm、杯高8.8cmを測り、杯部分の$\frac{1}{3}$は失われているが全体に厚手であり砂粒を含まず精良な胎土が使用されている。杯形も、同調査区で検出された高杯の杯部と異なり（他の高杯の杯部は杯底部より内反しながら丸味を帯びて立ち上っている）、杯底部からの立ち上がりは角があり、やや外反しながら口縁部に至り、口唇部は一段と外反している。内外共に赤彩が施されており他の高杯に比してかなり大型である。容量を比較すると約４～５倍は入ると考えられる。

脚裾部（B5）はかなりの厚みがあり、内外共に赤彩が施されておりロクロナデ仕上げである。復元作業の過程でB6の脚部ではないかと考えられ、B6の脚部として復元した。



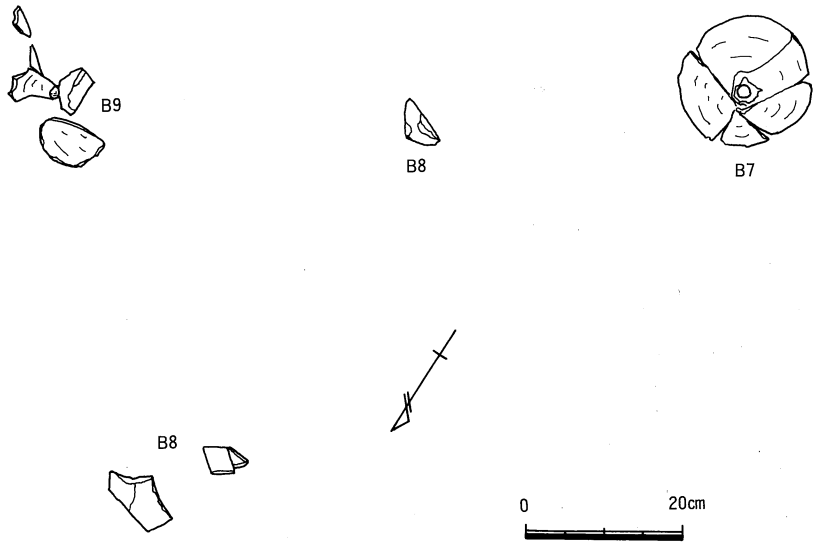
第28図　27号墳遺物B2・B5・6 出土実測図

杯・脚の一部失われたもの３点はほぼ同型である。

No.B7は、口径14.2cm、杯高６cmを測り、杯底部から内湾しながら口縁部に達し、口唇はやや外反を示している。

№B8は、口径13.8cm、杯高6cm、B7と同じく杯底部から内湾しながら口縁部に達している。口唇は内外反を示さず丸味を帯びた仕上げとなっている。

№B9は、口径14.0cm、杯高が6.5cm、前記2体と同じく杯底部より内湾しながら口縁部に達している。口唇は前記B8と同様に仕上げている。



第29図　27号墳遺物B7・8　・9 出土実測図

3点（B7・B8・B9）共に頸部直下に膨らみをもたせ、外反しながら裾部に達している。いずれも土師器のせいか杯脚部共に厚みがあり、かなりの重量のものに仕上げられており、3点とも内外に赤彩が施されロクロナデ仕上げである。

№B10（第46図B10　図版47－B10）は、丘陵中央部より約6m北東寄り周溝肩部で検出された土師器の壺である。非常に薄いため数百片に破砕された遺物であり、復元は不可能であった。壺の色は内外共に黄橙色、ロクロナデ仕上げである。

築造年代は出土遺物より、5世紀後半～6世紀初頭ごろと推測される。

（2）　31号墳

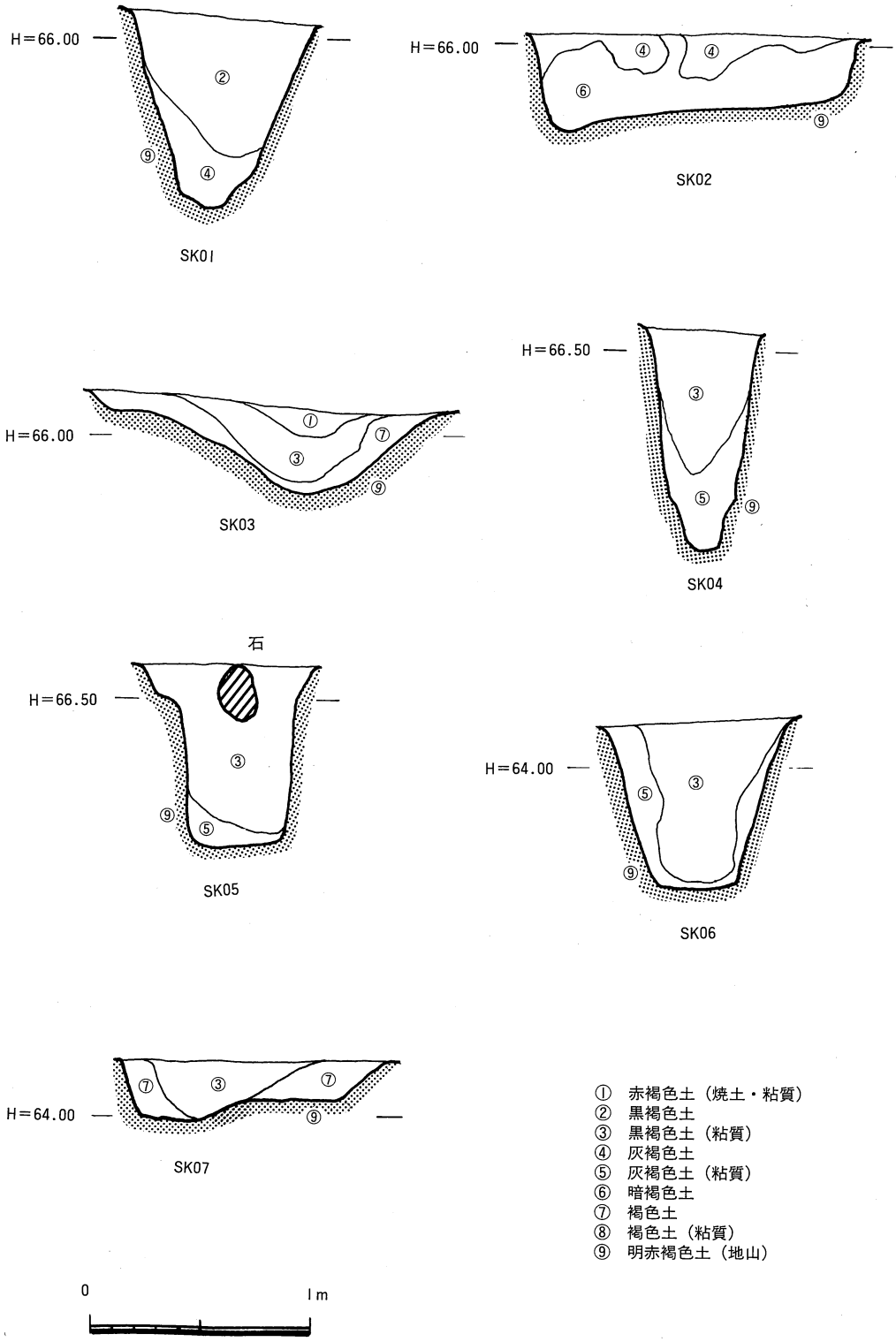
丘陵の南東部に検出された円墳である。

径12mはあったと想像されるが、主体部はすでに失われており残存している周溝も半分弱である。削平によって消滅寸前の円墳であった。

出土遺物は、周溝最深部（0.25m部分）より須恵器の**杯蓋**を検出している。（第46図B1図版47－B1）

B1は$\frac{2}{3}$程度残存していたが、口径14.0cm、器高3.0cm。内面口縁部はロクロナデ、天井部は平坦であり肩部より口縁部にかけてやや外反している。

築造年代は出土遺物より、5世紀後半～6世紀初頭ごろと思われる。



第30図　御建山27・31号墳土坑土層断面図

2．土　坑

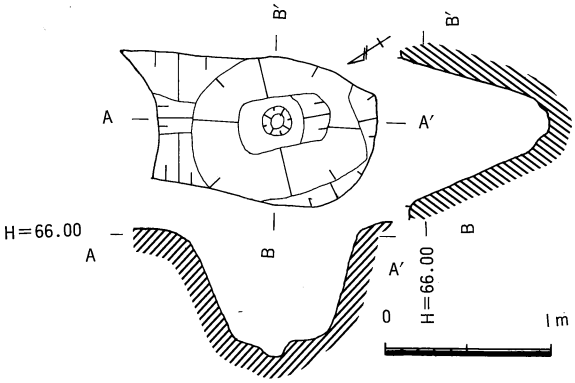
土坑は、01～07まで７基検出されている。01～03の３基は丘陵の南西側で、04・05は東側、06は丘陵南水田中で、07は丘陵北側で検出されたものである。

（1）ＳＫ01　（第31図　図版32－（４））

長径約1.1m、短径約0.9m、深さ約0.8m、最底部に径約0.15mの穴がある。

位置は27号墳周溝のそばであるが使途については不明である。

遺物の検出はなかった。



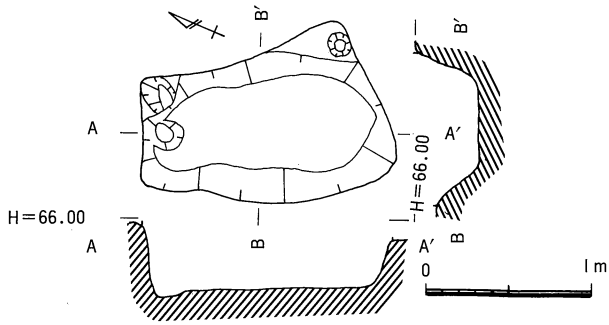
第31図　27・31号墳SK01遺構図

（2）ＳＫ02　（第32図　図版33－（１））

長方形の土坑である。長径約1.5m、短径約0.9m、深さ約0.4m。土坑埋土の中位層より須恵器の**杯身**（第46図 B2　図版47－Ｂ２）が検出されている。

B2は須恵器の杯身である。

基部径11.4cm、受部径14.0cm、器高3.9cm、全体がロクロナデ調整、外面底部はヘラで切断されており、未調整である。この遺物から土坑墓の可能性も考えられるが他に遺物もみられず、確認を得るに至らなかった。



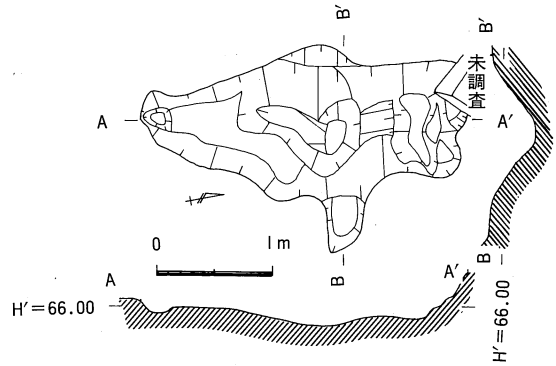
第32図　27・31号墳SK02遺構図

（3）ＳＫ03　（第33図）

７基の内で面積が一番広い土坑である

長径約2.7m、短径約1.4m、最深部約0.4mを測る。埋土の最上部は赤褐色土、粘質性をもった焼土であった。焼土は草を焼いた跡ではないかと推察される。

遺物の検出はなかった。



第33図　27・31号墳SK03遺構図

（4）ＳＫ04　（第34図　図版33－（2）・（3））

長径約1.2m、短径約0.5mの楕円形であり、深さ約0.8m、底面の中央あたり（図版33－（3））に径約0.2m、深さ約0.2mの円形の穴が穿かれている。

落し穴の可能性も考えられるが、開口面積が落し穴にしては狭いように思われる。

遺物の検出はなかった。

（5）ＳＫ05　（第35図　図版33－（4））

長径約0.95m、短径約0.75m、深さ約0.8m、卵形の土坑である。埋土は黒褐色土が主であったが、上層部で石（角の取れた丸い石）を検出した。

種々、検討を加えたが結論を得るに至らなかった。

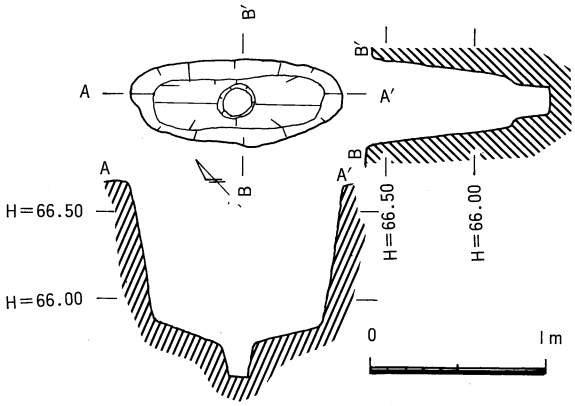
遺物の検出はなかった。

（6）ＳＫ06　（第36図　図版34－（1））

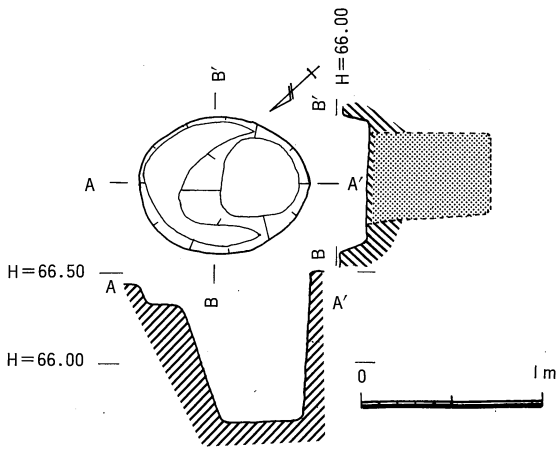
水田の耕作土除去後地山に変色が見られたので（黒褐色）、遺構検出作業を行なった。

その結果、長径約1.2m、短径約0.8m、深さ約0.8mを測る土坑を検出した。

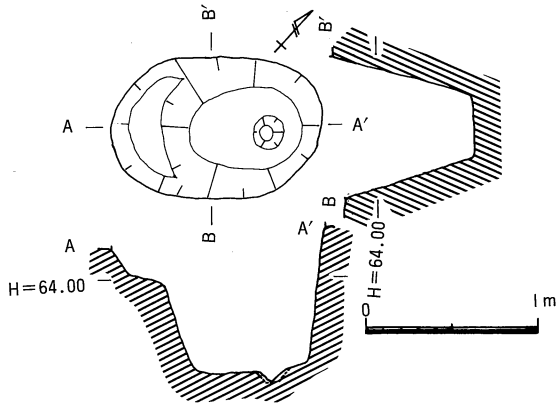
遺物の検出はなく、使途は不明である。



第34図　27・31号墳SK04遺構図



第35図　27・31号墳SK05遺構図



第36図　27・31号墳SK06遺構図

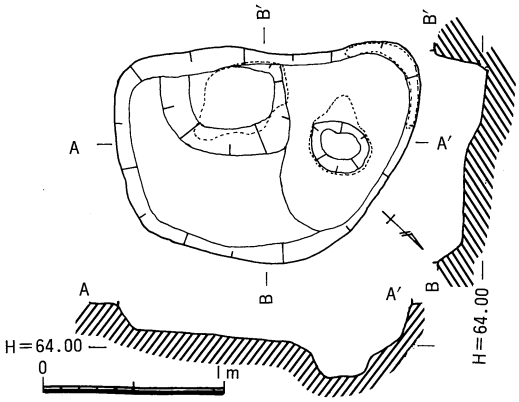
（7）ＳＫ07　（第37図　図版34－（４））

ＳＫ06と同様にして検出された土坑である。

長径約1.6m、短径約1.2m、最深部分約0.3mの土坑である。

これといった特徴もなく、用途・使途は不明である。

遺物の検出はなかった。



第37図　27・31号墳SK07遺構図

３．他の遺物

試掘トレンチ－１の丘陵中央寄りから、№B3（第46図 B3　図版47－B3）、須恵器の**杯身**が検出された。

B3は須恵器の杯身である。基部径11.4cm、受部径14.0cm、器高3.9cm、胎土には細砂を含み、焼成は堅、内面は黄灰・外面は褐灰色である。内外面共にロクロナデ調整、底部は未調整、内湾しながら肩部に至り、口縁部は外反し口唇は内反ぎみに立ち上っている。

第5章　考　　察

第1節　郡家澤田山古墳群

住宅造成工事に伴う郡家澤田山古墳群の発掘調査によって澤田山5号墳・6号墳・7号墳・8号墳・9号墳・10号墳と6基の円形古墳が存在していた事が明らかになった。

所在地は郡家西小学校裏山（128.6m）から郡家部落の方向に伸びる尾根の裾部から平地に至る地点を削平し埋立て段々状に開発され、水田として利用されていた所である。

最初開発されてからその後、水田の面積を広げるための削平が頻繁に行なわれた事が、試掘トレンチ（26トレンチ断面図、1995・3刊、郡家町文化財報告書　17　P15）の断面図により約8回内外程度埋立てが行なわれた事が分かる。1823年：安藤井手が完成しこの地区に通水が始まってから173年。その間の耕作地を拡大するための努力は当然成されたと思われる。

千数百年前、尾根上に、谷間（あ）いに、埴輪に取囲まれた古墳も含めて数基の古墳が築造されていたと推測されるが、三段の水田に開発された澤田山古墳群の中で最上段の水田のみおびただしい数の埴輪片が検出された。埴輪片は角（割れ口）が摩滅したものが多く、ほとんどが小片であった。よく破壊したものである。

埴輪は大王か豪族・有力な首長の墓に立て巡らせるというのが現代の定説になっているが、調査地で埴輪片が出土した事から、検出された6基の古墳の中にこの地方の首長級の埋葬施設があったと考えられる。

中でも、残存周溝で碧玉製の管玉が検出されたこと、ＩＡ・ＩＢ・ⅡＡ・ⅡＢのグリッドで最も多く埴輪片が出土したこと、6基確認された古墳の中で周溝径がいちばん大であること、出土遺物から3世紀後半～4世紀前半の築造と考えられること等々から、10号墳がその可能性があるではないかと推察される。

調査地最上段の土坑（ＳＫ05）から検出された**器台**、8号墳周溝の最深部から検出された**椀**（2ヶ）、最下段7号墳から検出された赤彩の土師器**高杯・椀**は、弥生時代後期ごろの土器と推測され、弥生時代後期の住居跡との複合遺跡ではなかろうかと考えながら調査を進めたが、確認するまでの資料を得るに至らなかった。

本調査地では数回による削平によって遺構はほとんど失われ、遺物も逸散・破壊されており、近隣にある**御建山古墳群**・未調査の**澤田山古墳群の上部にある古墳**・私都川北岸にある**池田古墳群・福本古墳群**等々との関連を解明するに至らなかった事は、惜しまれることである。

第２節　御建山27号墳・31号墳

澤田山古墳群についでやはり住宅造成工事に伴う澤田山古墳群南西150m、水田中に残された高さ約２m・東西・南北共に約20mの方形、面積約400m²の丘陵状の27号墳を調査 した。

水田中に残された丘陵であり、航空写真とか、東・西・南・北どの方向から望めても、『**古墳**』としてうなずける丘陵である。また、近くの久能寺部落・郡家部落の住人が以前から古墳であるといい伝えており、水田耕作上ではかなりの障害物であると推察されるが削平しないで残されていたという事もうなずけることである。

現状は畑であるが近年は耕作をしていなくて雑木・雑草の生い繁った丘であった。

試掘調査報書によると、丘陵中央付近が主体部と思われ赤彩を施した土師器高杯を検出している。

本調査も、削平・撹乱により墳頂部・主体部はある程度失われているではないかという推測の基に、主体部と考えられる丘陵中央部に視点をあて調査を開始した。

最初は独立した古墳と考えていたが、調査を進めるに従って丘陵の全貌が明らかになって来た。即ち、２基の古墳の周溝を約$\frac{1}{2}$ずつ取り込んだ、南北に位置していたと考えられる古墳（31号墳）と古墳（27号墳）の中間点であることが判明した。以後、北側の大きな周溝規模をもつ古墳を**27号墳**、南側の小さな古墳を**31号墳**と呼ぶ事にした。

試掘調査で主体部と考えられていた地点は、北側27号墳の周溝と南側31号墳の周溝との接点近くであり、27号墳の周溝の一部分であった。

27号墳周溝は径約16m、その$\frac{1}{2}$が丘陵上に残存しており周溝巾も広く、深さも0.7mとかなり深いものである。試掘で主体部と考えられていた地点は、周溝南側のいちばん深い所であり、周溝よりの出土遺物はほとんどこの地点に集中していたといえる。

出土遺物はいずれも赤彩が施されている大小の高杯であった。中に、杯部口径23.3cmにも及ぶ大口径をもった高杯が含まれている。この杯は、杯部が$\frac{1}{3}$・脚部が一部失われていたが復元する事に成功した。他の高杯も、杯部・脚部がバラバラに出土したが、いずれも復元までこぎつけた。結果として、大１体、小３体の高杯が完成した。４体とも赤彩が鮮やかに残っており、祭祈用に使用したものか宗教的な雰囲気をかもし出す遺物である。他に、周溝東寄りで土師の壺片・須恵の杯身が検出されている。

31号墳の規模を周溝（径約12m）から推察すると、小規模の古墳であった事が伺える。周溝も浅く（削平が大であった事を物語っている）５cmほどで地山に達する所もあり、墳頂部は皆無であった。

出土遺物も少なく、須恵器の杯蓋の一部と判別のつかない土師器片が数片であった。

土坑は丘陵上で5基検出された。(SK01～SK05)SK02では須恵器の杯身が出土しているが、他の土坑では遺物の検出はなかった。丘陵外で検出された2基の土坑（SK06・07）も同じである。

土坑の使途も、貯蔵庫とか落し穴といった明確な用途の資料を得ることはできなかった。

単体の古墳として期待をもって調査に当ったが、周溝が半分ずつ残存している2基の古墳であった。いつの頃からか、古墳であるという事で残されて来た丘陵。水田と丘陵上の周溝との高低差が約2mある事からこのあたりは、3～5m程度の削平が行なわれたと考えられる。

2基の古墳築造年代は、澤田山6・7号墳と同時代の5世紀末から6世紀にかけてと推察される。

第3節　ま　と　め

足掛け2年に渡る、郡家澤田山古墳群、御建山27・31号墳の調査が終了した。

町誌によると郡家のあたりを、〝中世頃は「高下」「河下」「高家」と書き「コオゲ」と読んでいたといわれており、「高下」は元来水の便の悪い高台の地を示す言葉で、地形上の名称らしい〟と書かれている。

また、「郡家町の地名」の中に〝御建とは鳥取藩直轄林の敬称で・・・・麓地帯でありそこには円錐小丘状の古墳が遠望され・・・・県内最初に発見されたはにわ列古墳・・・・〟とある。

本調査を実施した所在地・郡家澤田山から久能寺御建山にかけては前述の通り、西は河原城が、東は堀越部落・扇ノ山のなだらかな尾根が、目前には群衙跡・土師百井廃寺跡が一望できる高台である。

調査の結果、澤田山古墳群では古墳6基（5～10号墳）土坑5基。御建山27・31号墳では、古墳2基（27・31号墳）土坑7基が確認された。然しこの地は永年に亘って掘削・削平・撹乱が繰り返されており、遺構の保存状態は良好ではなかった。

澤田山古墳群では検出した順に従って古墳番号を付して行ったので番号順と築造年代は一致しないが、5号墳は周溝埋土中より多数の円筒埴輪片の検出と遺物から3世紀末から4世紀初頭、6号墳は出土遺物から古墳時代後期、7号墳は古墳時代終末期、8号墳は周溝埋土中より多数出土した円筒埴輪片、赤彩の施された弥生後期の椀等から3世紀末から

4世紀初頭、9号墳は出土遺物から7世紀初頭、10号墳は円筒埴輪片・碧玉製管玉、他の遺物から4世紀初頭、SK05は弥生時代後期のものと思われる器台等から3世紀末から4世紀初頭と、築造年代を推定したものである。

特に澤田山5・8・9・10号墳の所在する最上段水田の埋土中より、多数の埴輪片が検出された事はここ澤田山にこのあたりの有力者が埋葬され、埴輪を並べた大規模な古墳が存在していた事を裏付けるものである。また、煤が付着した器台、椀等が検出されたという事は弥生時代いやそれ以前の時代から我々の祖先がこの地で生活を営んでいた証しでもある。

検出した円筒埴輪片は厚手のものが多くほとんど小片に破壊されたものであった。朝顔型円筒埴輪は朝顔の花部分のみによって判断したものである。形象埴輪ではないかと思われる格子紋が描かれた平板も数点出土している。数千点検出された埴輪片の中でただ1点人物埴輪（人物の肩から腕にかけての一部片）片が出土し他の部分を検索したが不可能であった。

10号墳より検出した碧玉製の管玉は、道具が完備していない当時、手作業であのように精細な穴を穿ける技術をもっていた事はおどろきである。

御建山27・31号墳は水田（約4000m²）の中に残された縦・横共に約20m²、高低差約2mの丘陵であった。外見状は非常に保存状態の良い古墳と見えたのであるが、やはり開発のため主体部は削平を受け周溝のみであった。それに、残存していた約400m²の丘は古墳と古墳の中間点であり、両古墳の周溝が半分ずつ残っている土地であった。

遺物の検出も少なく、土師器で赤彩の高杯4点、須恵器の杯蓋1点・杯身2点であり、世代は検討の結果、5世紀末から6世紀初頭ごろ築造されたものと推測された。

周溝の大きな方を「御建山27号墳」、小さな方を「御建山31号墳」の記番とした。

昭和32年県内最初に発見調査された「はにわ列古墳」の遺物、資料等は現在郡家町には保管されていないと聞く。また昭和10～20年代このあたりを発掘調査されたという話を聞くが、その結末はつまびらかでない。

両地区とも住宅造成のため消滅してしまう遺跡である。いずれも保存状態は良好ではなかったが澤田山古墳群・御建山27・31号墳について、所期の目的は充分達成されたものと思われる。

調査に際し、発掘調査から報告書作成にいたるまで多くの方々の御協力を得た。記して謝意を表わしたいと思う。

郡家澤田山遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm)		形態、手法等の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口径	器高					
01	高台付広口壺	12.4	17.1	高台から外反しながら立ち上り、胴部から肩部の境界に凹線内湾しながら頸部にいたる 口縁は極端に外反、口唇は極端に内反を示す ロクロナデ調整	精良	やや軟質	内外面 灰	073～076
02	直口壺	4.3	16.1	座りが不安定・底部から内湾を示しながら頸部へ頸部にふくらみを作り外反しながら口唇に至る ロクロ使用　外面　指ナデ、内面　ヘラ削り調整	細砂を含む	軟質	内外面 にぶい褐	079～082
03	皿	12.6	3.9	高台より内反しながら立ち上り、口縁上端になるに従ってやや外反 底部ヘラ削り、内外共にナデ調整	精良	やや軟	内外面 灰白	085 088
04	甕	—	—	外面、ハケ目、内面ヘラ削り（左→右）調整 底部に煤がかかっている	精緻	堅緻	内外面 にぶい赤褐	090～108
05	壺	16.4	—	頸部にふくらみをもたせ口唇は外反している ハケ横ナデ調整であるが、頸部にはヘラ縦目あり	精緻	堅緻	内外面 にぶい赤褐	047 048
06	壺	12	—	内部指ナデ、外部ハケ目調整 厚手の土器である	精緻	やや軟質	内外面 灰黄	052
07	高杯	—	10.6	脚の中央部に２本沈線有り、脚端部は平坦で裾部は上部を向いている 杯は欠損、底部のみ残存 内外面　ロクロナデ	細砂を含む	堅緻	内外面 黄灰	044 083
08	壺	17.0	—	丸みのある肩部・口頸部は斜め上方に立ち上がる、端部は段をもつ 内面は円弧紋タタキ、外面　櫛目とタタキ 口頸部　ロクロナデ	細砂を含む	やや軟質	内外面 灰白	002 077
09	高杯	15.0	10.1	脚部は短かく「ハ」の字状に広がり杯部は内湾 口縁端部丸くおさめる 内外面　ロクロナデ 脚台部のうら凹凸多く、指頭部で調整	精良	やや軟質	内外面 （赤彩）赤	012 079
10	椀	12.6	6.6	底部より内湾気味に立ち上がり口縁部へ続く 口縁端部、内湾し丸くおさめる 内外面　ロクロナデ	精良	やや軟質	内外面 （赤彩）赤	012 095
11	壺	13.2	—	口縁部斜めに立ち上がる、端部外側に面をもつ 内面指押えが見られる　外面　タタキ、カキメ 口頸部　櫛描波状文	細砂を含む	堅緻	内外面 緑灰	004 011 013 015 079 094
12	椀	13.6	5.2	平坦な底部より内湾しながら口縁端部へ口縁部は丸くおさめている 内外面　ロクロナデ 外面にススがかかっている	精緻	やや軟質	内外面 赤	086
13	椀	14.0	5.1	底部より内湾気味に立ち上がり口縁部へ続く 口縁端部　丸くおさめる 内外面　ロクロナデ	精緻	やや軟質	内外面 赤	086
14	甕	—	—	口縁部のみ残存 端部は肥厚させ段をなす 内面　ロクロナデ 外面　カキメ後櫛描波状文	細砂を含む	堅緻	内外面 暗灰黄	028 034
15	甕	—	—	口縁部のみ残存 端部は肥厚させ段をなす 内外面　ロクロナデ 外面にススがかかっている	細砂を含む	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	028
16	持ち手付き椀	14.8	6.2	やや平坦な底部より斜め上に立ち上がる 口縁端部は角ばり気味 内外面　ロクロナデ 片方の外面に持ち手の痕跡あり	細砂を含む	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	140
17	器台	20.2	20.2	脚はやや太く空洞で上下がつながっている 裾部は「ハ」の字状に広がり、端部は肥厚させ凹線５本有り 杯部（上部）は斜めに広く立ち上がる。端部は外反している。凹線５本有り 脚台部　内側ヘラケズリ調整	砂粒を含む	やや軟質	内外面 にぶい橙	152 159 160 161
18	杯身	基部 13.6	5.2	内湾しながら口縁部へのびる 受部は短かく丸味をおびている 立ち上がりは端部で直立気味 内外面　ロクロナデ　底部ヘラ痕あり	砂粒を含む	やや軟質	内外面 灰黄	170

挿図番号	器種	法量(cm)		形態、手法等の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口径	器高					
19	杯蓋	14.8	4.6	天井部から内湾しながら、口縁部へのび、端部は丸味を帯びている 天井部内面　しぼり痕有り 内外面　ロクロナデ	細砂を含む	堅緻	内外面 緑灰	171
20	高杯	11.6	7.5	脚部短かく杯底部より「ハ」の字に広がる 杯底部は平坦で受部は短かく立ち上がる 内外面　ロクロナデ調整	細砂を含む	堅緻	内外面 黒	038
21	壺	—	—	底部のみ残存　底部平坦で斜め上向きにのびる 厚味がある 外面　ロクロナデ　内面　凹凸あり	砂粒を含む	やや軟質	内外面 明赤褐	151
22	甕	—	—	口縁部斜め上方に立ち上がる 頸部直立気味に開く　全体に厚味がある 頸部　櫛目と帯部に縄模様 口縁部　内面ヘラケズリ 頸部　内面凹凸あり	細砂を含む	やや軟質	内外面 にぶい橙	030
23	甕	28.0	—	口縁部短かく「く」の字で直立気味で丸くおさめる。 内面　ロクロナデ 外側に面を持ち３本の凹線 頸部　ハケメ	砂粒を含む	やや軟質	内外面 浅黄橙	029
24	甕	15.0	—	口縁部短かく「く」の字で直立気味で頸部短かい 内面　ロクロナデ 外面　口縁部、面をもち　カキメ 肩部　刺突文	砂粒を含む	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	030
25	甕	12.0	—	口頸部短かく外反しながら立ち上がり口縁端部は外方に肥厚し角ばる 内外面　ロクロナデ	精緻	やや軟質	内外面 にぶい橙	176
26	椀	14.8	6.5	やや平坦な底部より内湾し、口縁部は直立気味　端部やや平坦 外面　ロクロナデ　２条の沈線 内面　ロクロナデ　底面　不整ナデ	砂粒を含む	やや軟質	内外面 灰白	071
27	高台付椀	12.6	3.9	底部平坦で縁部との屈曲部に高台を貼り付ける 口縁部斜めに立ち上がり　端部細く丸い 内外面　ロクロナデ	細砂を含む	堅緻	内面一灰 外面一灰黄	029
28	甕	15.8	—	口縁部短かく斜めに立ち上がり口縁の端部丸味があり 外側に面を持ち６本の凹線 内面　ハケメ	砂粒を含む	やや軟質	内外面 浅黄橙	029
29	甕	17.0	—	口縁部短かく斜めに立ち上がり口縁端部丸味があり外側に面を持ち６本の凹線 内面　ロクロナデ	精緻	やや軟質	内外面 にぶい橙	170
30	甕	14.6	—	口縁部斜めに立ち上がり、端部丸味があり外側に面を持ちカキメあり 内面　ロクロナデ	精緻	やや軟質	内外面 浅黄橙	176
31	壺	22.0	—	口縁部斜めに立ち上がり端部丸味があり外側に面を持つ 肩部張り気味 内面弧文タタキ　外面タタキ	細砂を含む	堅緻	内外面 暗灰	011 013 079
32	円筒埴輪	直径 15.3	—	斜め上に広がる円筒 内面　ハケメ（上下） 外面　ハケメ（横・斜） 全体に肥厚	精良	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	176
33	高杯	—	—	脚部重厚で「ハ」の字状に開く　透孔が２ヶ所にある 内外面　ロクロナデ	砂礫を含む	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	—
34	円筒埴輪	直径 16.0	—	斜め上に広がる 全体に肥厚 内面　不整ナデ 外面　ハケメ	精良	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	176
35	円筒埴輪	直径 16.0	—	斜め上に広がる 全体に肥厚 内外面　ハケメ	精良	やや軟質	内外面 にぶい黄橙 （赤彩）	176
36	器台	22.0	—	杯部は斜め上に広がる 口縁部は丸味があり、外側に面を持ち、外方に肥厚し角ばる　４本の凹線 口縁部　内面ゆるやかに屈曲 内面　ロクロナデ 外面　ハケメ	細砂を含む	やや軟質	内外面 にぶい黄橙 （赤彩）	007

挿図番号	器種	法量(cm)		形態、手法等の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口径	器高					
37	朝顔型円筒埴輪	34.0	—	斜め上に大きく広がる 口縁端部は角ばる 内外面　ハケメ	精良	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	176
38、40	朝顔型円筒埴輪	34.0	—	斜め上に大きく広がる 口縁端部は面をもち角ばり気味 中央部に角ばった帯がある 内面端部　ロクロナデ　ハケメ 外面　ロクロナデ後ハケメ	精良	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	176
39	朝顔型円筒埴輪	32.0	—	斜め上に大きく広がる 口縁端部は面をもち角ばり気味 外面に角ばった帯がある 内外面　ハケメ	精緻	やや軟質	内外面 にぶい黄橙 (赤彩)	176
41	円筒埴輪	18.4	—	直立気味の円筒 外面に角ばった帯をもつ 内外面　ハケメ	精緻	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	176
42	朝顔型円筒埴輪	—	—	頸部「く」の字に屈曲し、外側中央はとがった帯状 端部は面があり角ばる 内面　ハケメ 外面　ロクロナデ後ハケメ	精緻	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	176
43	朝顔型円筒埴輪	10.0	—	端部は面をもち頸部より「ハ」の字状に開く 内面　櫛目　指ナデ 外面　ロクロナデ	精緻	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	176
44	形象埴輪 (人物)	—	—	肩腕の一部「く」の字に曲がり穴があいている 外面　指ナデ	精緻	やや軟質	内外面 橙	176
45、46	形象埴輪	—	—	端側肥厚で面があり角ばり一部丸味がある 平坦な面に斜めに沈線 内面　ナデ	砂礫を含む	やや軟質	内外面 橙	176
47	形象埴輪	—	—	平坦な面に斜めに沈線 全体に肥厚	砂礫を含む	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	016
48	石の遺物	—	—	長さ11.0cm　巾5.4cm　厚さ2.5cm 一部研磨面	—	—	黄褐	030
49	石の遺物	—	—	長さ9.2cm　巾3.7cm　厚さ1.5cm 底面中央少しへこみ上面とがっている	—	—	灰白	176
50	石の遺物	—	—	長さ9.3cm　巾7.5cm　厚さ4.3cm 底面おちこむ上面丸味をおびる	—	—	にぶい赤褐	003
51	石の遺物	—	—	長さ9.5cm　巾4.5cm　厚さ2.3cm 片面が研磨面	—	—	黄褐	010
52	石の遺物	—	—	長径3.5cm　短径2.8cm　高径2.8cm 球体	—	—	暗灰	078
53	石の遺物	—	—	長径5.5cm　短径4.6cm　高径2.8cm 片面平坦上面丸味をおびる	—	—	緑灰	041
54	石の遺物	—	—	長さ11.3cm　巾5.0cm　厚さ4.2cm	—	—	黄褐	153
55	瓦	—	—	—	—	—	—	
56	石の遺物	—	—	長さ6.0cm　巾4.3cm　厚さ0.9cm 角が丸く研磨されている	—	—	表面—黒灰 裏面—灰褐	030
57	刀子	—	—	—	—	—	—	050
58	不明	—	—	—	—	—	—	110
59	刀子	—	—	—	—	—	—	156
60	鎌	—	—	—	—	—	—	165
61	不明	—	—	—	—	—	—	166
62	不明	—	—	—	—	—	—	167
63	鉄鏃	—	—	—	—	—	—	168
64	鉄鏃	—	—	—	—	—	—	172
65	管玉	—	—	長さ0.62cm　径0.476cm　穴径0.2cm	—	—	緑灰	131
66	管玉	—	—	長さ0.132cm　径0.462cm　穴径0.2cm	—	—	緑灰	069

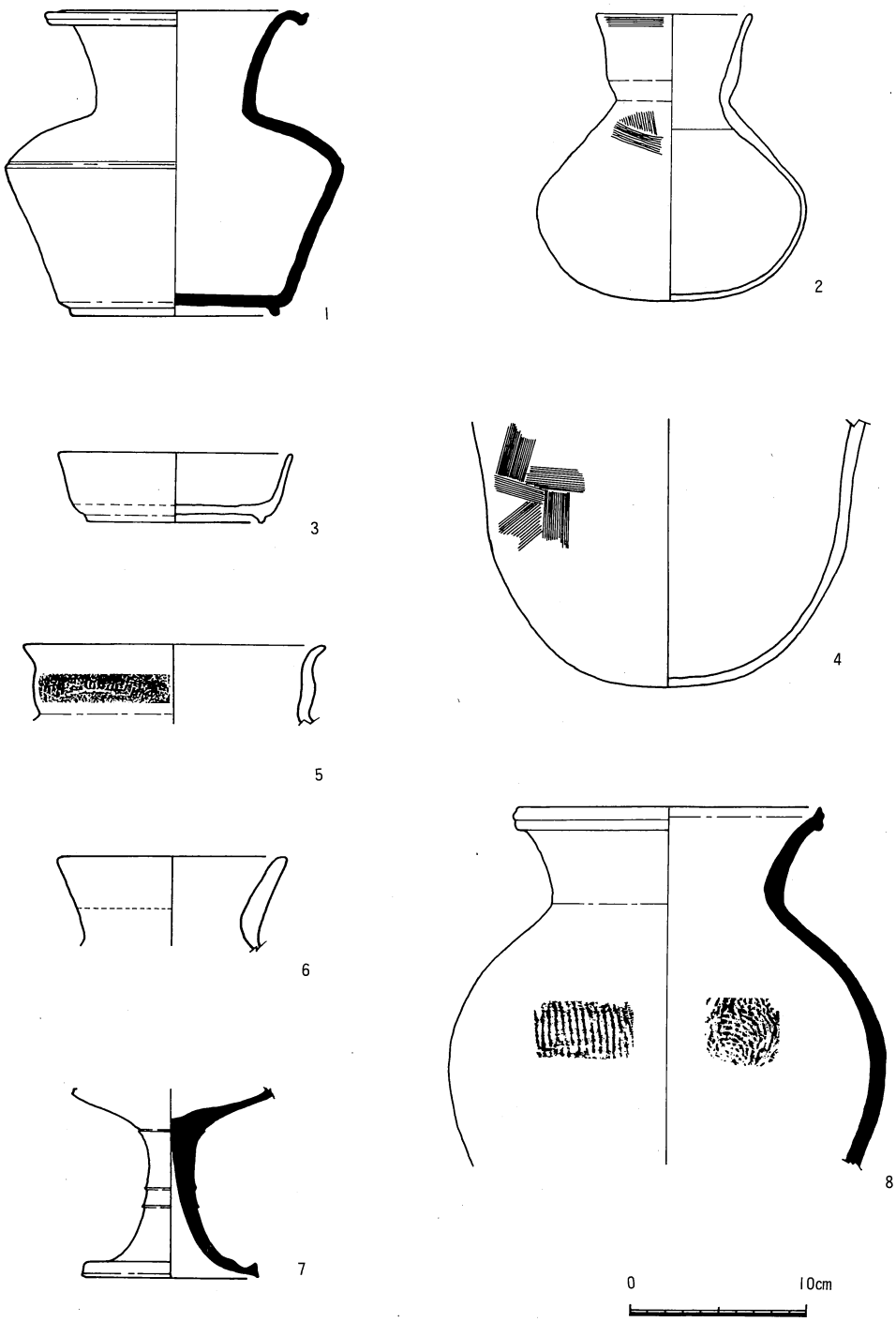
御建山27・31号墳遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm)		形態、手法等の特徴	胎土	焼成	色調	遺物番号
		口径	器高					
B01	杯蓋	14.0	3.0	天井部は平坦で肩部より口縁部にかけやや外を向く 口縁部　内外面　ロクロナデ 上部はカキメ	砂礫を含む	堅緻	内外面 灰	18
B02	杯身	基部 11.4	4.1	内湾しながら口縁部へのびる 先端部の受部は短く厚い たちあがりは端部で直立気味 内外面　ロクロナデ 底部　未調整	砂礫を含む	堅緻	内面一灰 外面一灰黄	24 117 120〉試
B03	杯身	基部 11.4	3.9	内湾しながら肩部、口縁部へのびる 受部は上を向き、立ちあがりは短かく直立気味 内外面　ロクロナデ 底部　未調整	細砂を含む	堅緻	内面一黄灰 外面一褐灰	19
B04	壺	15.0	3.5	口縁部「S」字形で端部は丸味をおびる 内外面　ロクロナデ	細砂を含む	やや軟質	内面一にぶい黄橙 外面一暗灰 にぶい黄橙	14
B05	高杯	—	4.3	脚部は厚みがあり、裾部は「ハ」の字状に広がる 内外面　ロクロナデ	精良	やや軟質	内外面 にぶい橙 (赤彩)	35
B06	B05と同一個体	23.3	9.9	口縁部は外傾し、端部は平坦な面を持つ 内外面　ロクロナデ				20.22. 23.25
B07	高杯	14.2	10.2	内湾しながら肩から口縁部に達する 端部はやや平坦 内外面　ロクロナデ	細砂を含む	やや軟質	内面一赤 外面一明赤褐	14 30
B08	高杯	13.8	9.4	内湾しながら肩から口縁部に達する 端部はやや平坦 脚部は短い 内外面　ロクロナデ	砂粒を含む	やや軟質	内面一赤褐 外面一橙 (赤彩)	31 32 35 115試
B09	高杯	14.0	11.6	脚部は短かく「ハ」の字状に広がる 杯部は厚くやや内湾している 内外面　ロクロナデ 杯底部は指でおさえたような跡がある	砂礫を含む	やや軟質	内外面一赤 (赤彩)	29.33
B10	壺	—	7.3	肩部は「ハ」の字状に広がる 頸部は直立気味 肩部、頸部の端は欠損	砂粒を含む	やや軟質	内外面 にぶい黄橙	03.27

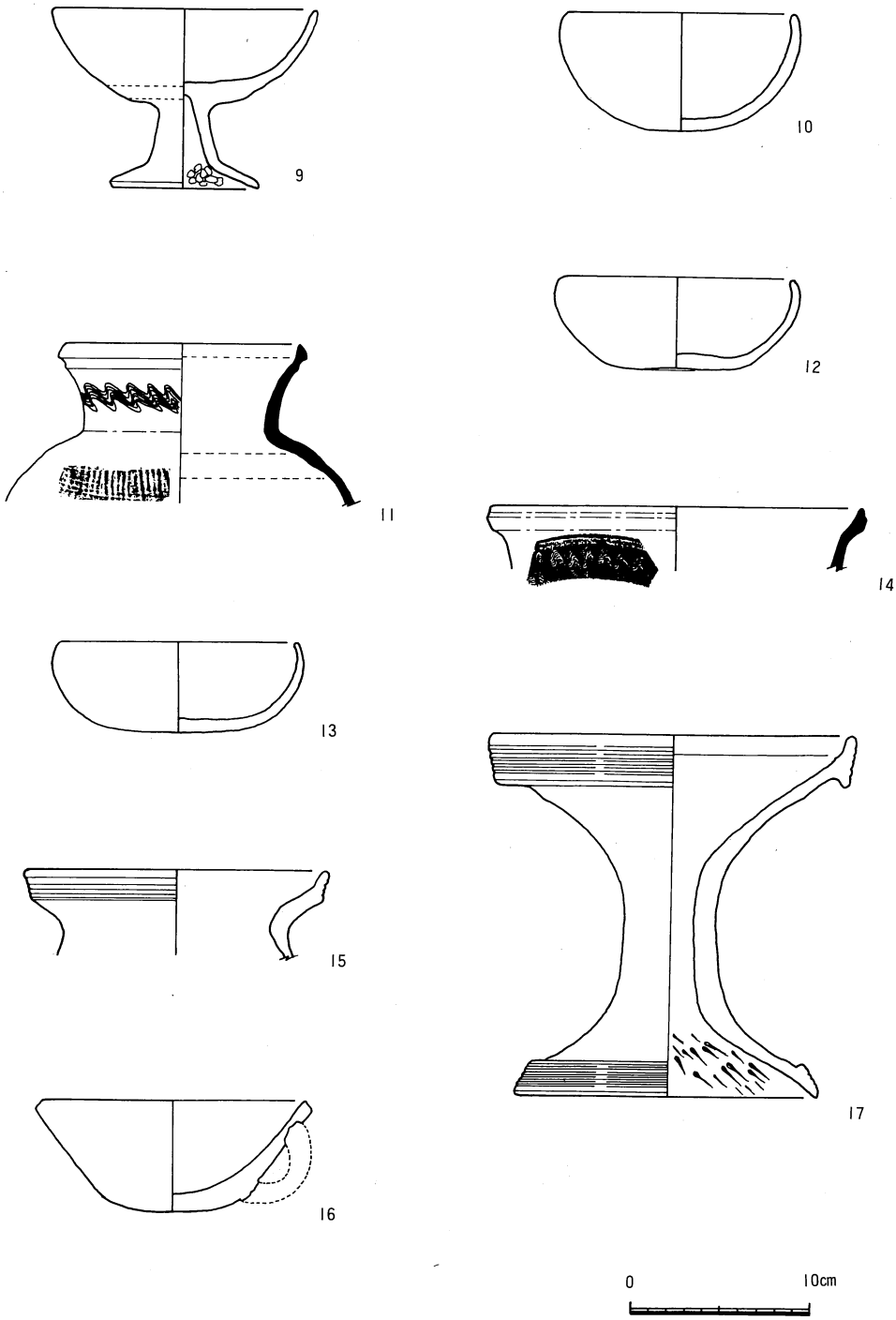
遺物実測図

挿図38～45図　郡家澤田山古墳群

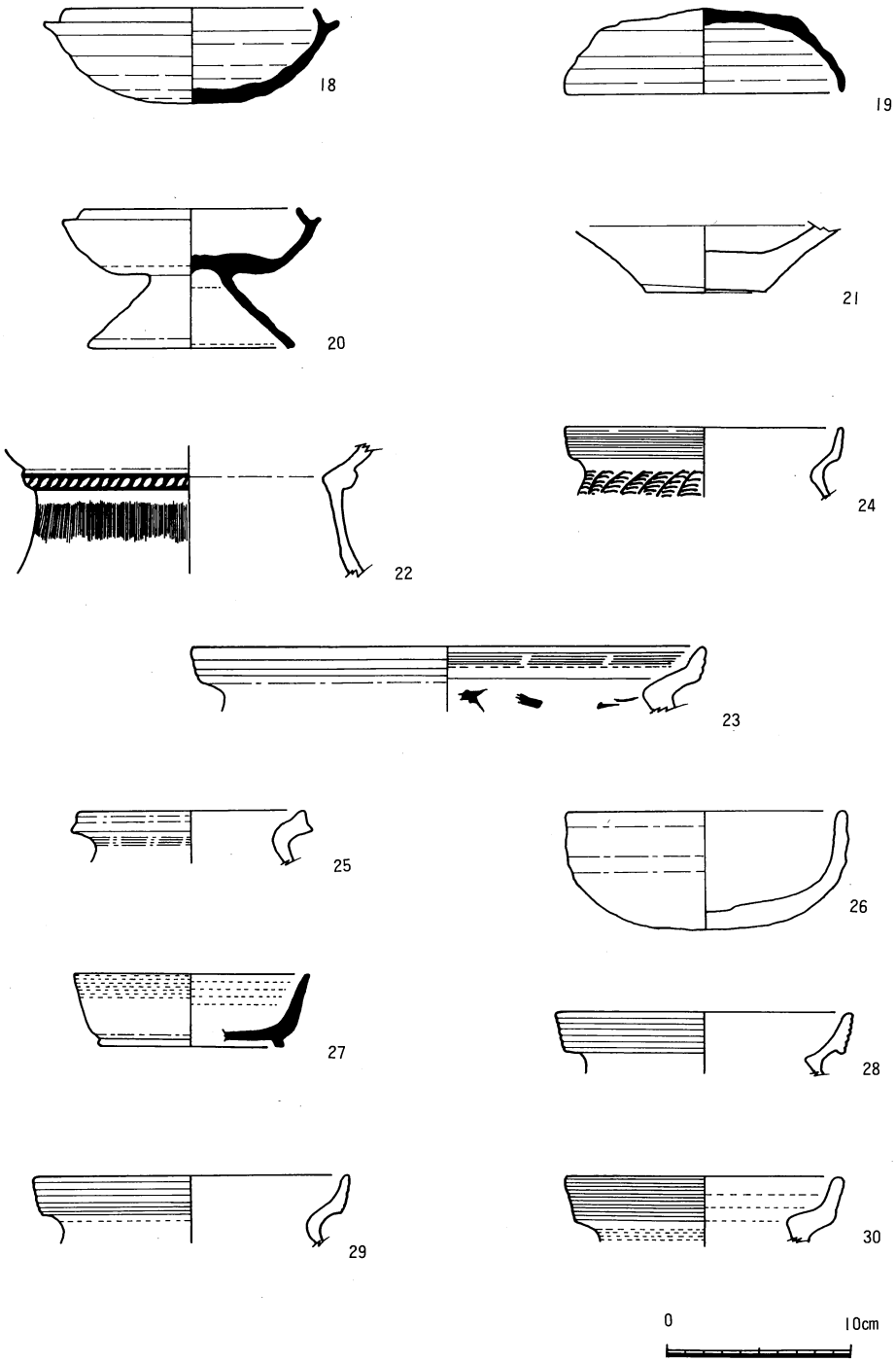
挿図46図　久能寺御建山27・31号墳



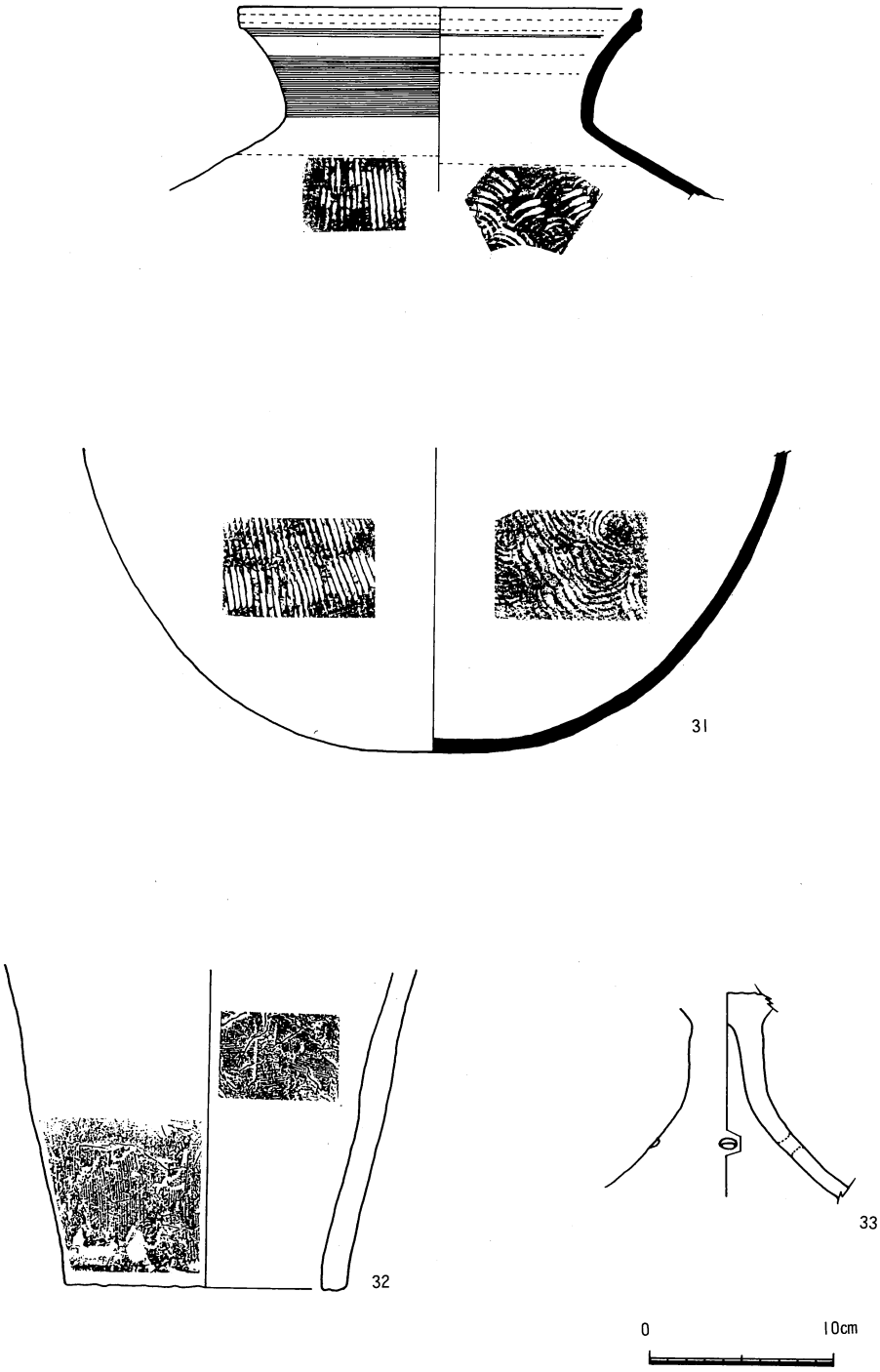
第38図　郡家沢田山古墳群 出土遺物①



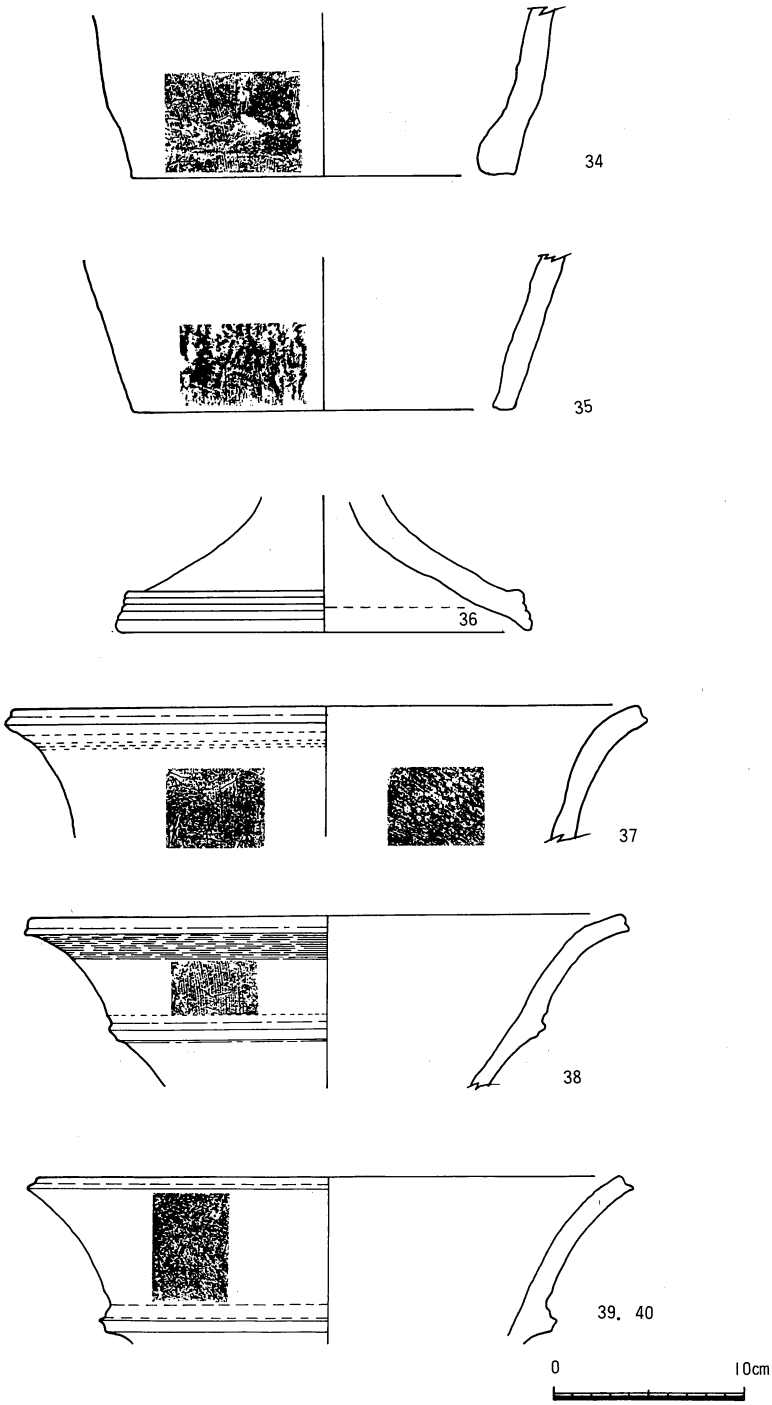
第39図　郡家沢田山古墳群 出土遺物②



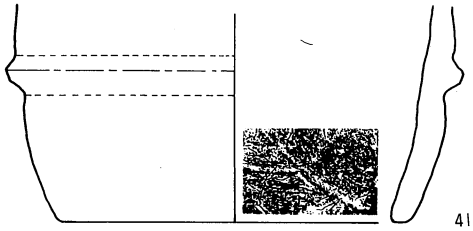
第40図　郡家沢田山古墳群 出土遺物③



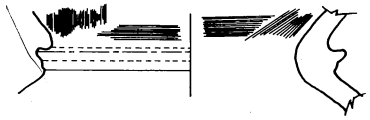
第41図　郡家沢田山古墳群 出土遺物④



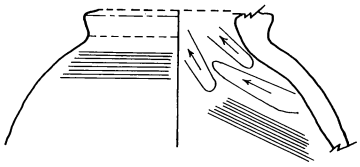
第42図　郡家沢田山古墳群 出土遺物⑤



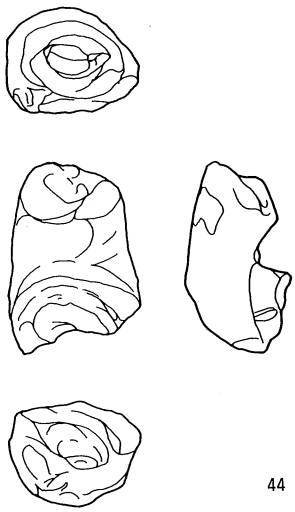
41



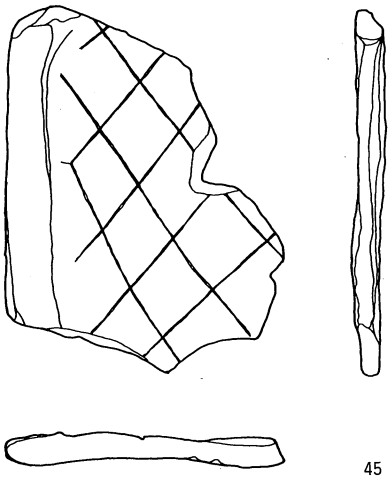
42



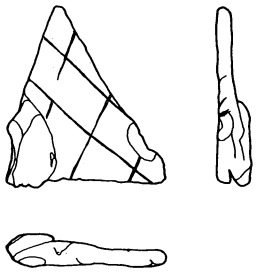
43



44



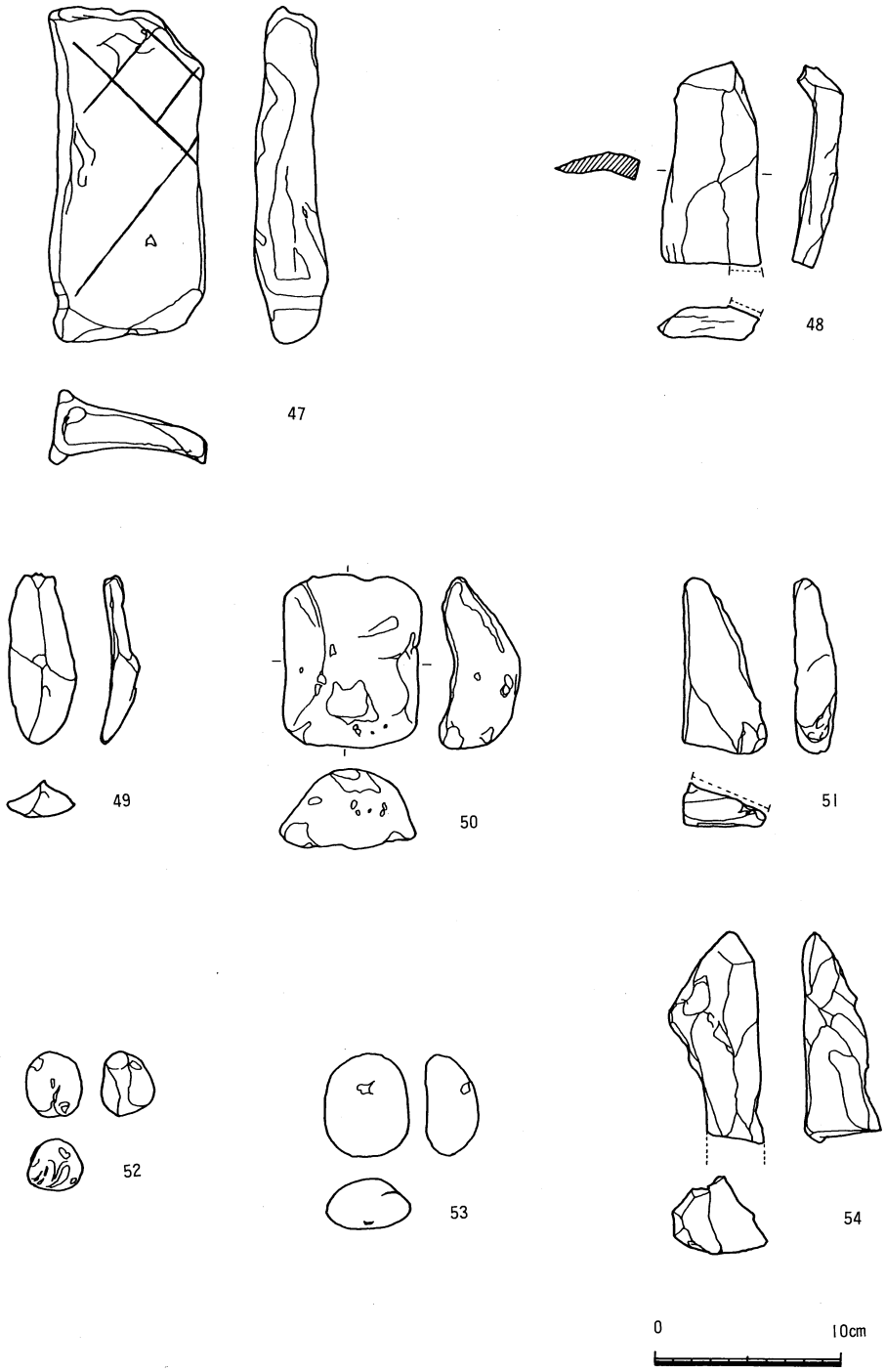
45



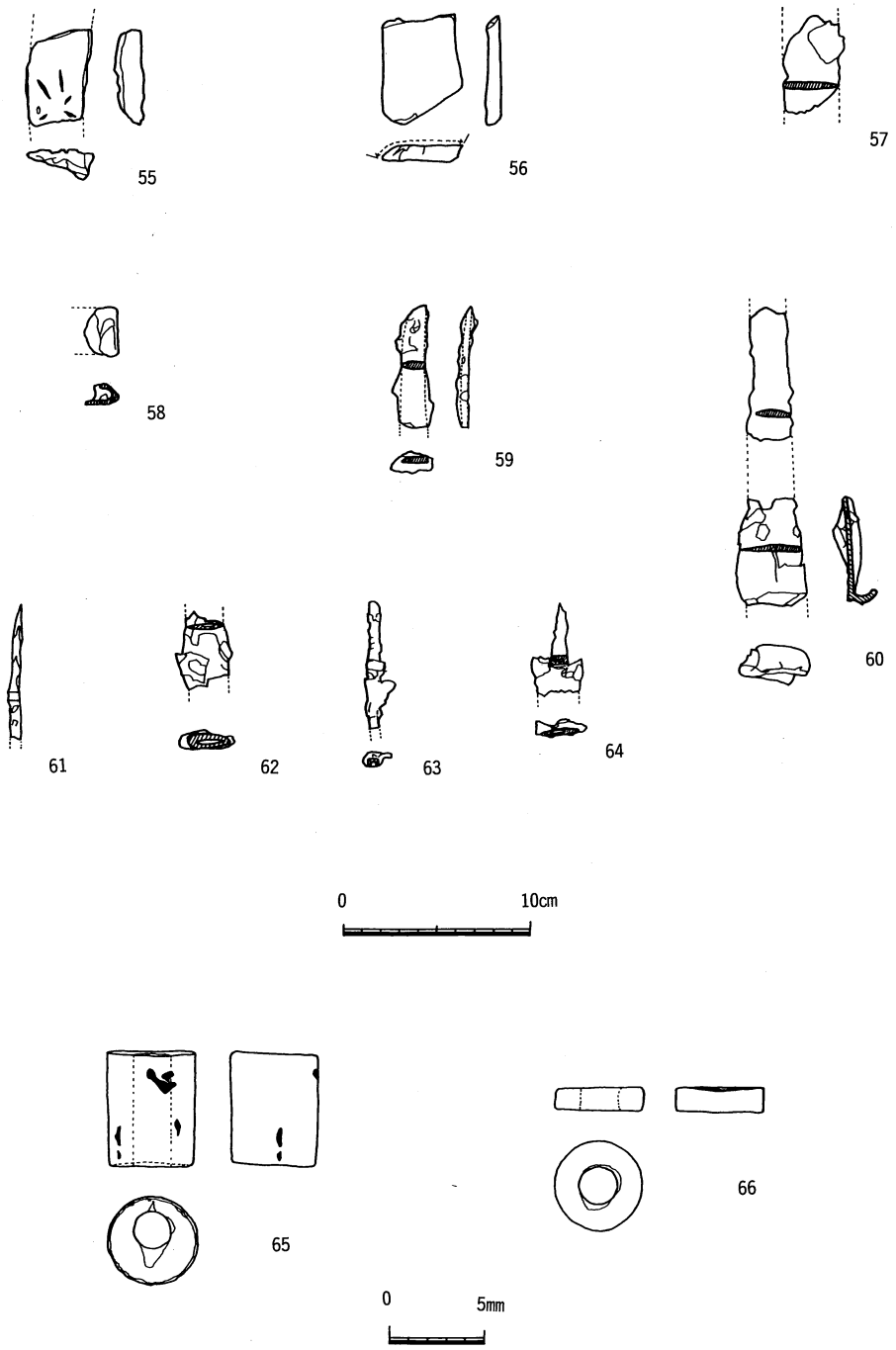
46

0 10cm

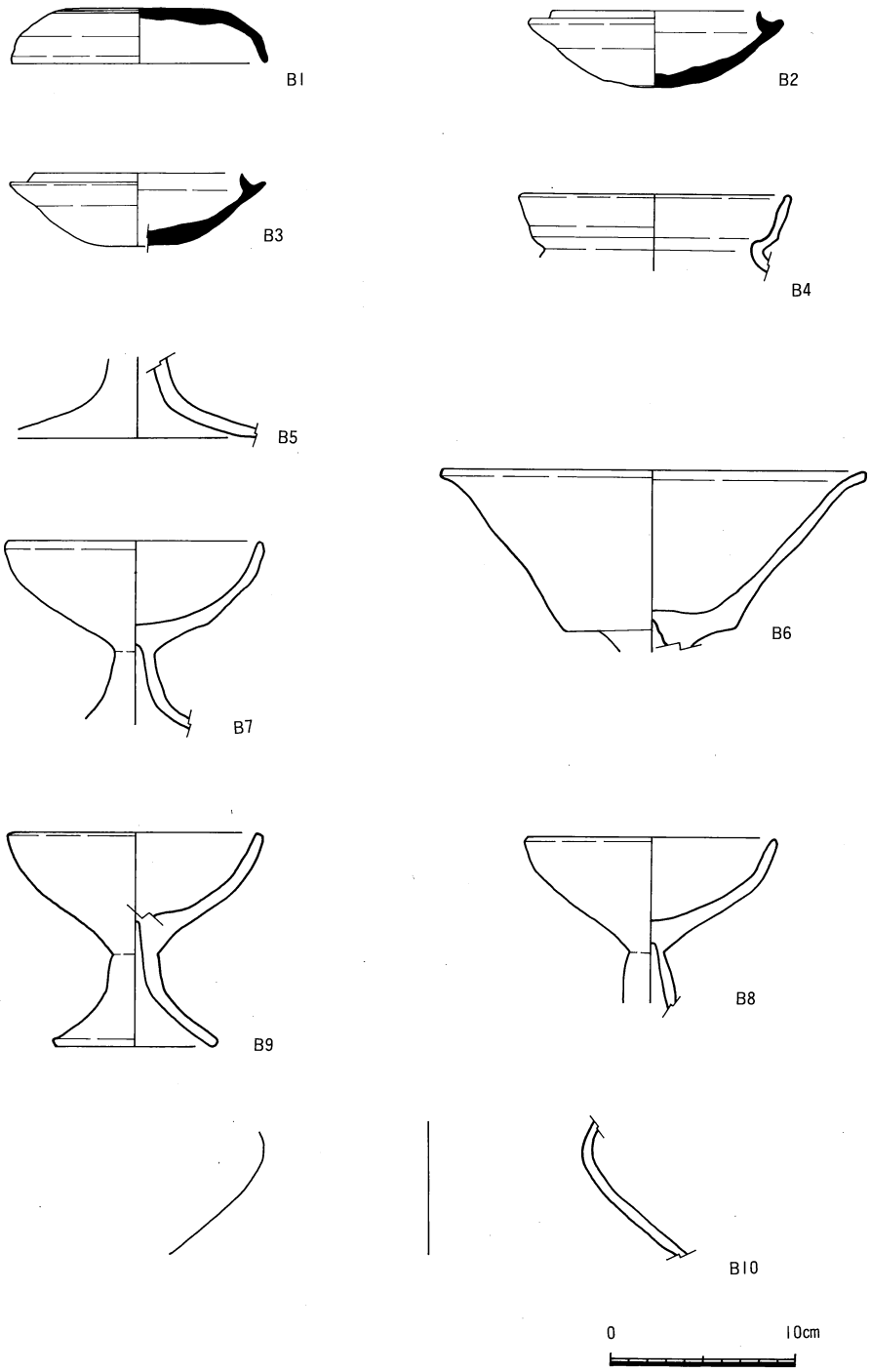
第43図　郡家沢田山古墳群 出土遺物⑥



第44図　郡家沢田山古墳群 出土遺物⑦



第45図　郡家沢田山古墳群 出土遺物⑧



第46図　久能寺御建山27・31号墳 出土遺物

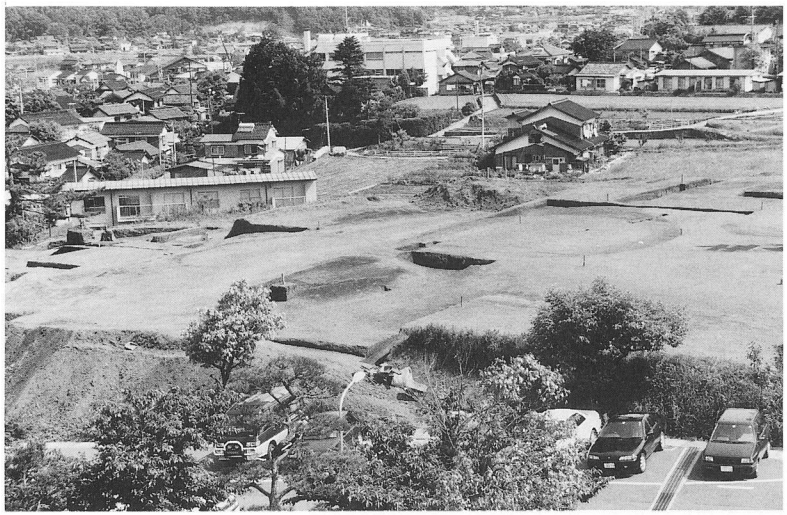
図　　版

1～28　郡家澤田山古墳群
29～36　久能寺御建山27・31号墳
37～46　郡家澤田山古墳群出土遺物
47　久能寺御建山27・31号墳出土遺物

郡家澤田山古墳群・久能寺御建山27・31号墳調査前俯瞰写真（西）

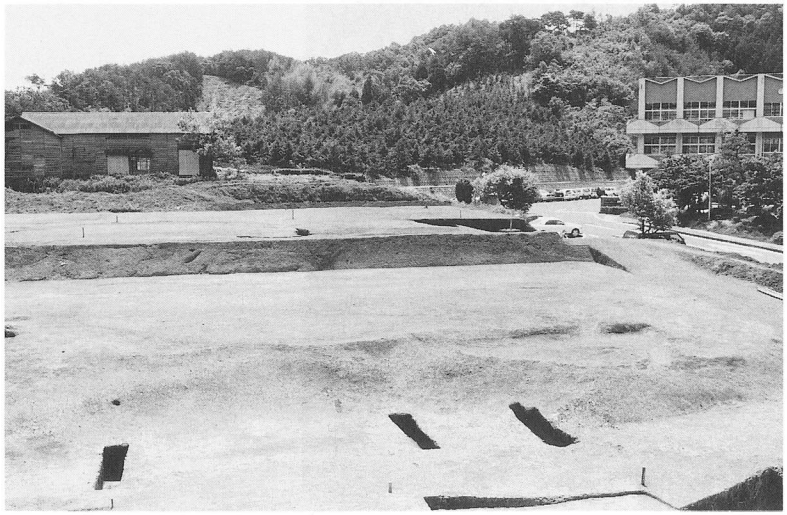
・左上逆二等辺三角形（三段）　澤田山古墳群
・中央部方形高台　御建山27・31号墳

図版 1



(1) 澤田山古墳群全景（西小屋上）

(2) 6 ・5 ・8M調査前全景（北）

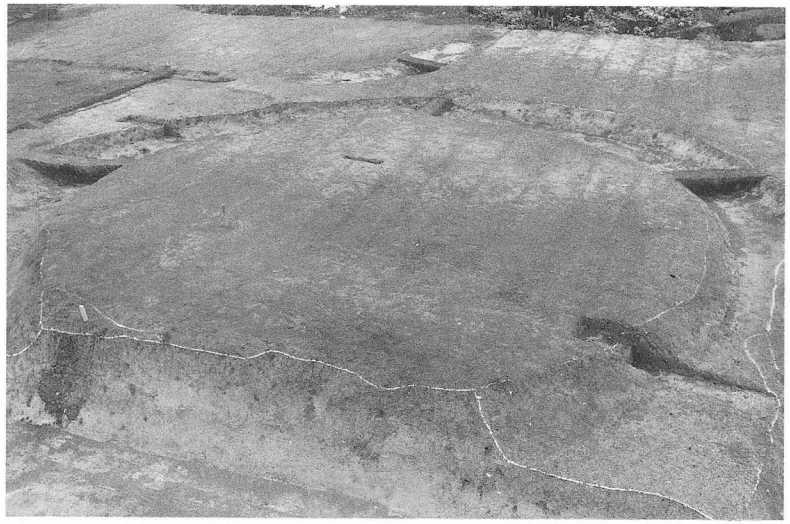


(3) 7 ・6 ・5 ・8M調査前全景（北）

(4) 6 ・5 ・9 ・10M 調査前全景（北西）

図版 2

(1) 5M調査後全景（北）



(2) 5M調査後全景（西）

(3) 5M北東側周溝（西）

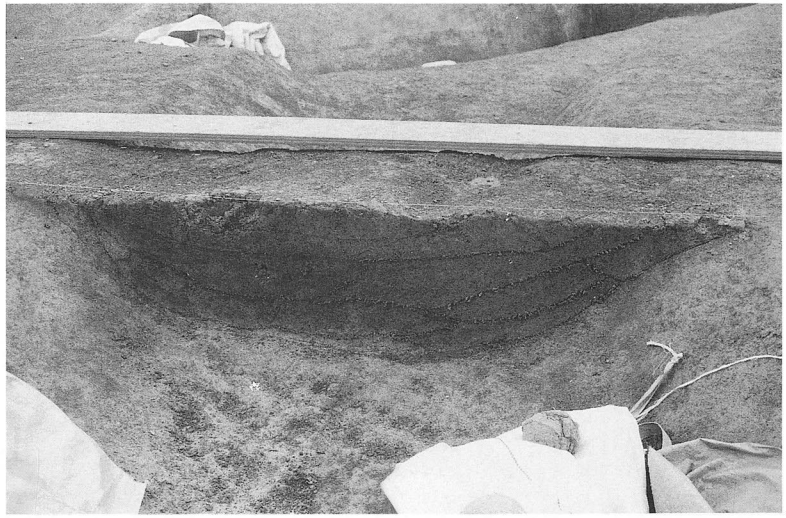
(4) 手前5M・左9M・上10M　（西）

図版 3

(1) 5 ・8M周溝の接点完掘（北西）

(2) 5M西半分・8M（北）

(3) 5M周溝南側土層断面（西）

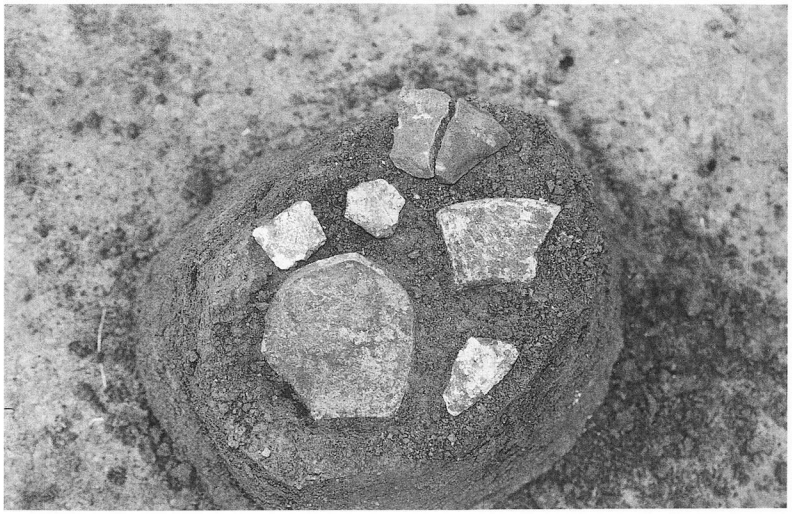


(4) 5M周溝西側土層断面（東）

図版 4

(1) 5M周溝西側出土遺物（西）

(2) 5M周溝南西側出土遺物（東）



(3) 5M周溝南側出土遺物（南）

(4) 5M周溝南東側出土遺物（南東）

図版 5

図版 6

(1) 5M周溝東側出土遺物（北）

(2) 5M周溝東側出土遺物（北）

(3) 5M周溝東側出土遺物（南）

(4) 5M周溝東側出土遺物（北）

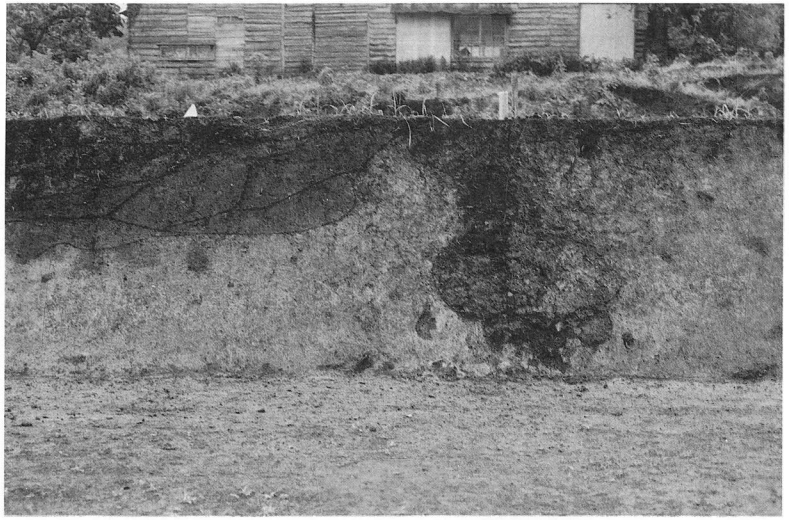
(1) 5M周溝東側出土遺物（北）

(2) 5M周溝北側出土遺物（南）

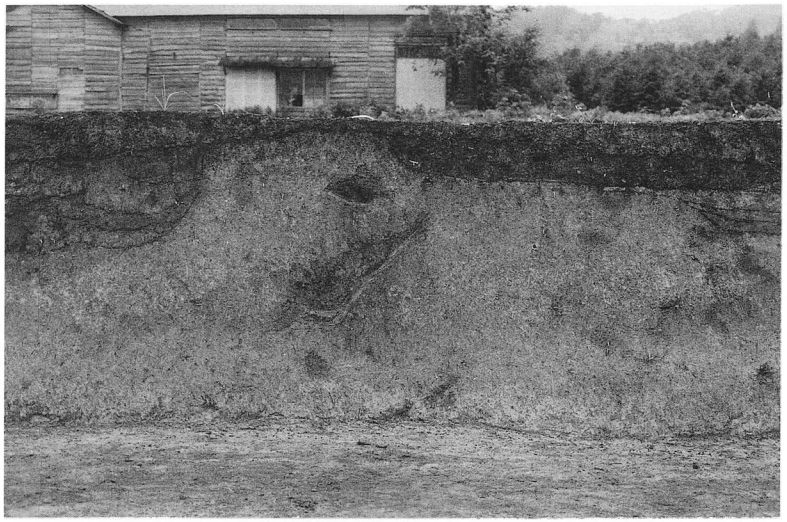
(3) 上・中段境界断面（東→西①）

(4) 上・中段境界断面（東→西②）

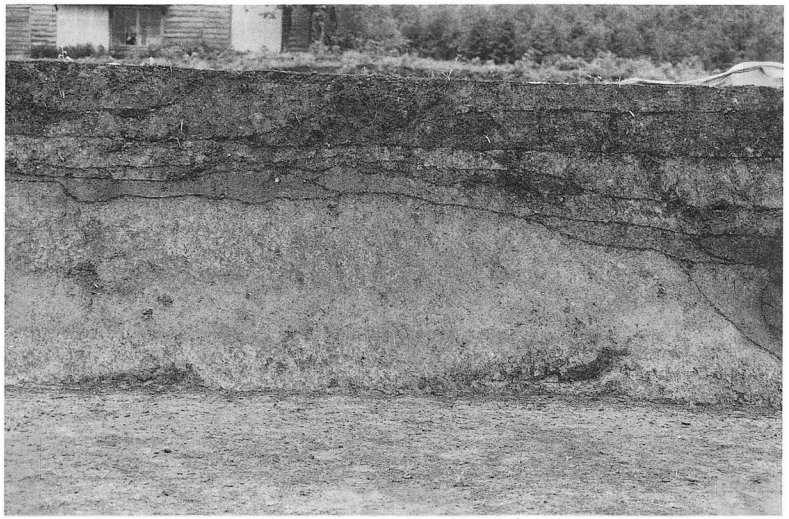
図版 7



(1) 上・中段境界断面（東→西③）



(2) 上・中段境界断面（東→西④）

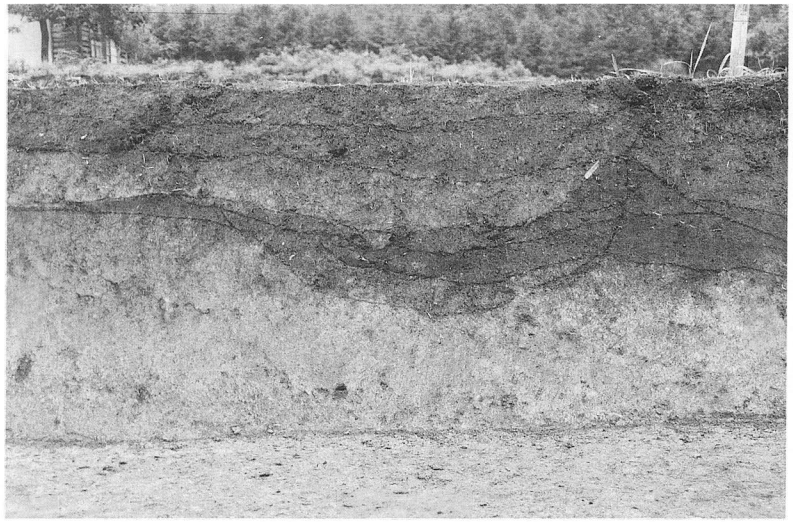


(3) 上・中段境界断面（東→西⑤）

(4) 上・中段境界断面（東→西⑥）

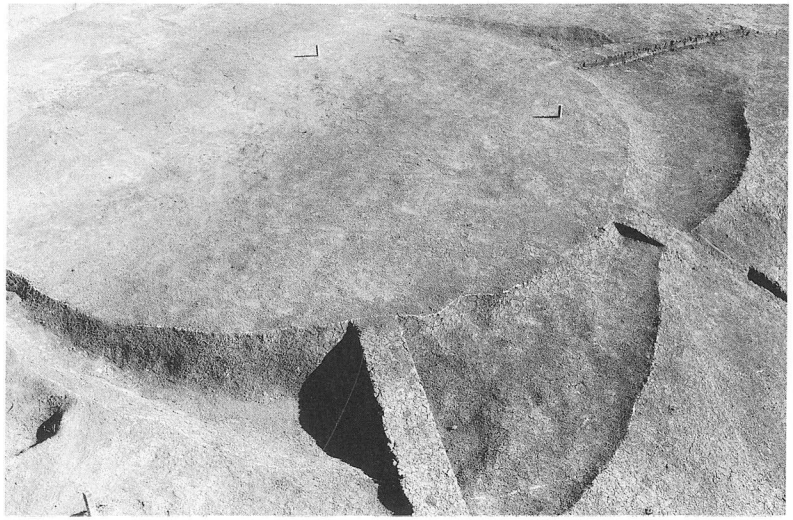
図版 8

(1) 上・中段境界断面（東→西⑦）



(2) 上・中段境界断面（東→西⑧）

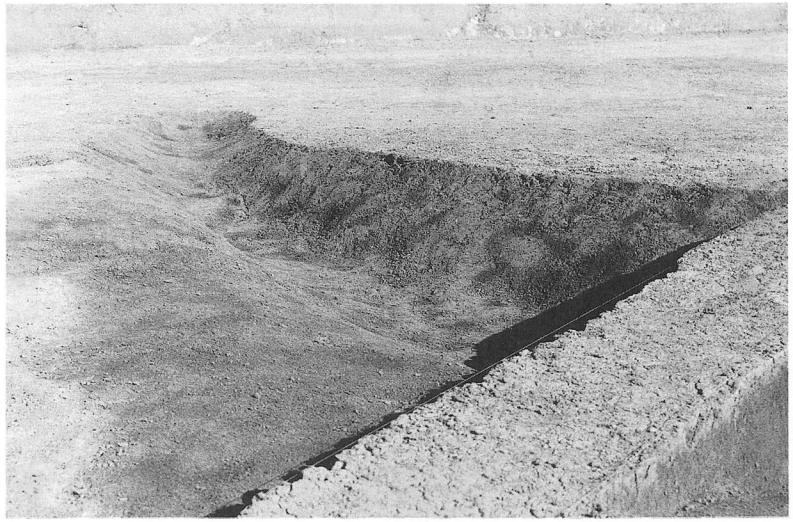
(3) 6M表上除去後（東）



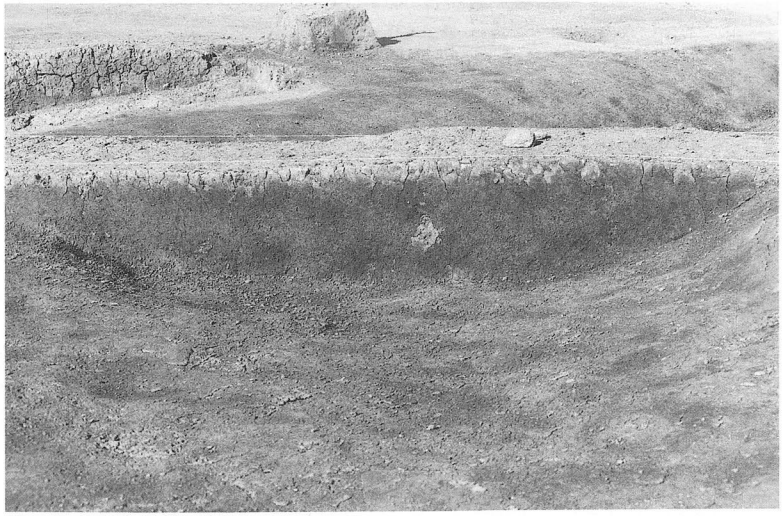
(4) 6M周溝北側（北）

図版 9

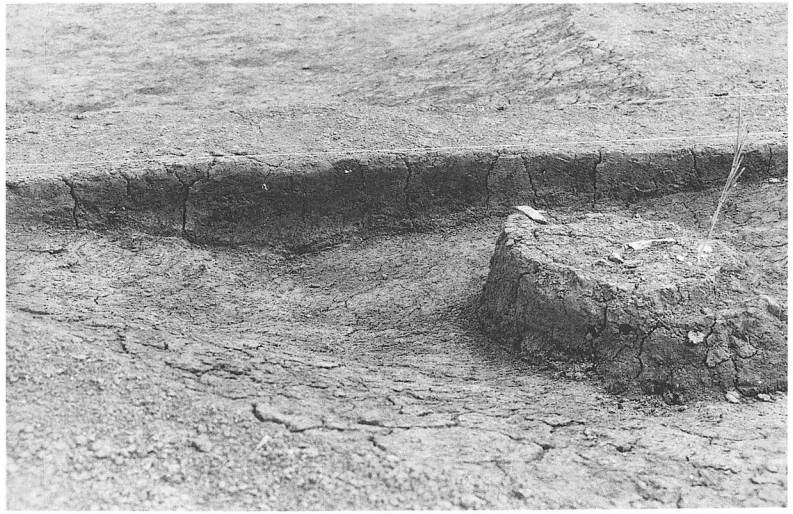
(1) 6M周溝西側（西）



(2) 6M周溝東側（北）



(3) 6M周溝東側ベルト土層断面（西）



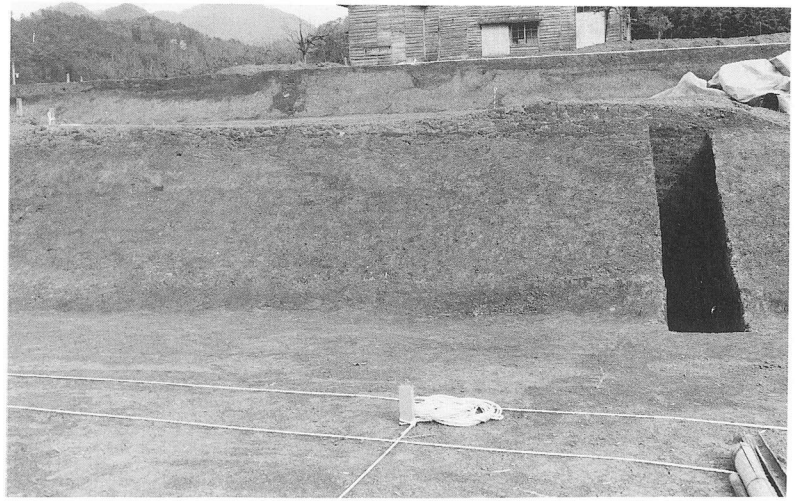
(4) 6M周溝西側ベルト土層断面（南）

図版10

(1) 6M周溝西側出土遺物（南西）

(2) 中・下段境界断面（南）

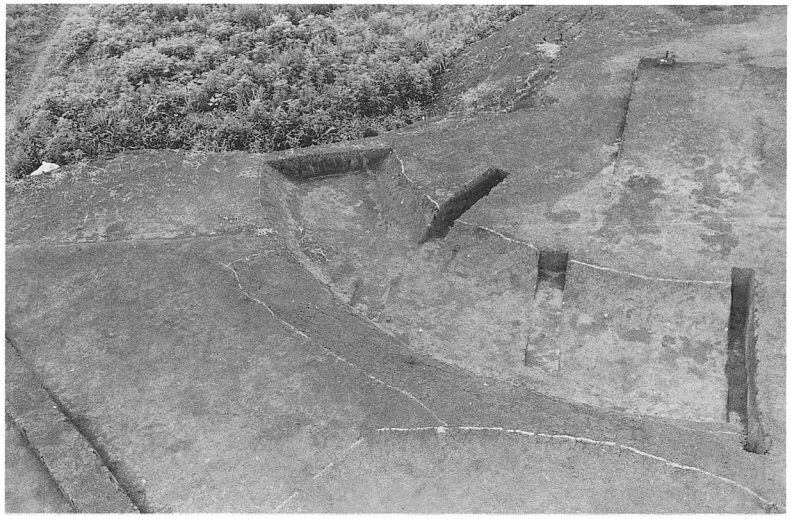
(3) 中・下段境界断面（北東）



(4) 中・下段境界断面（北西）

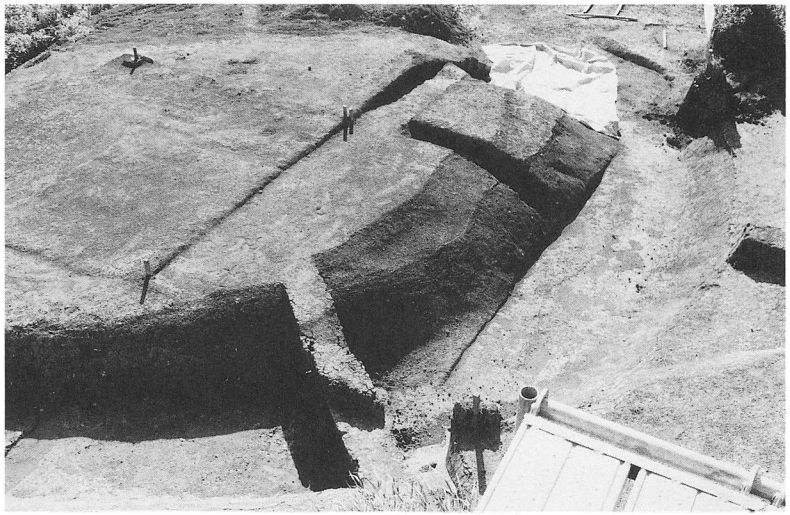
図版11

(1) 7M表土除去後全景（南）



(2) 7M周溝西側（西）

(3) 7M周溝南東側（南）

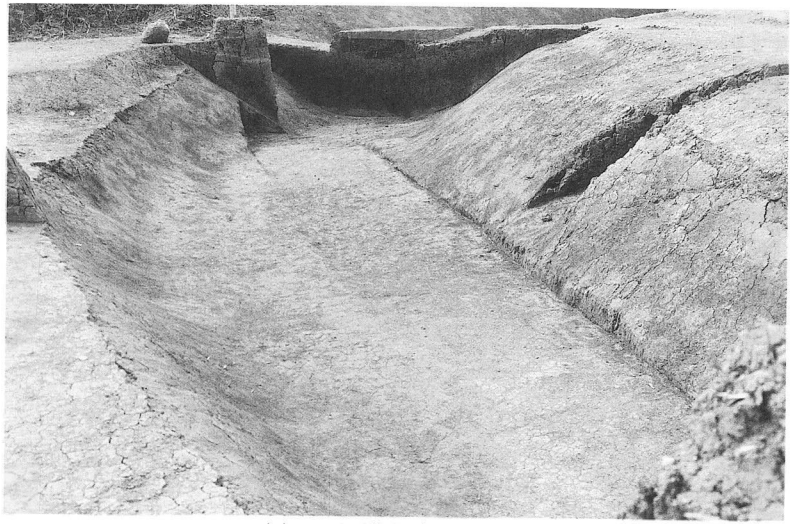


(4) 7M周溝東側（南東）

図版12

(1) 7M周溝南側（東）

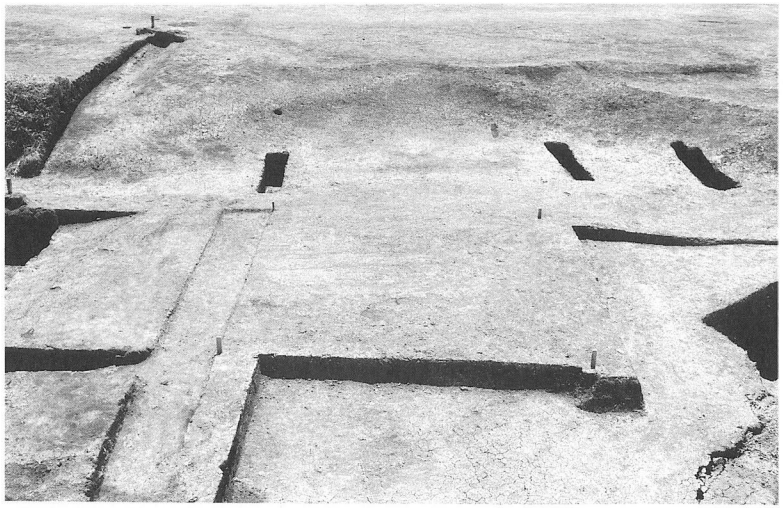
(2) 7M周溝西側（東）



(3) 7M周溝北東側（北）

(4) 7M北西側（東）

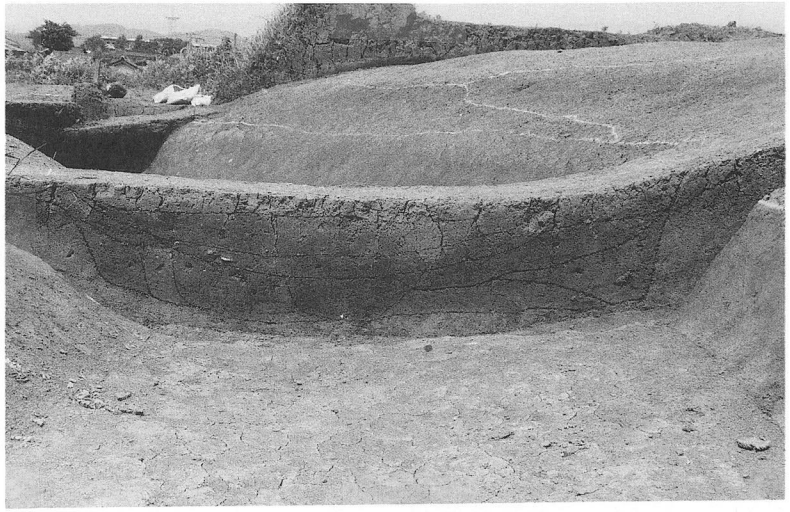
図版13



(1) 7 ・6M境界（北）

(2) 7M全景（南）

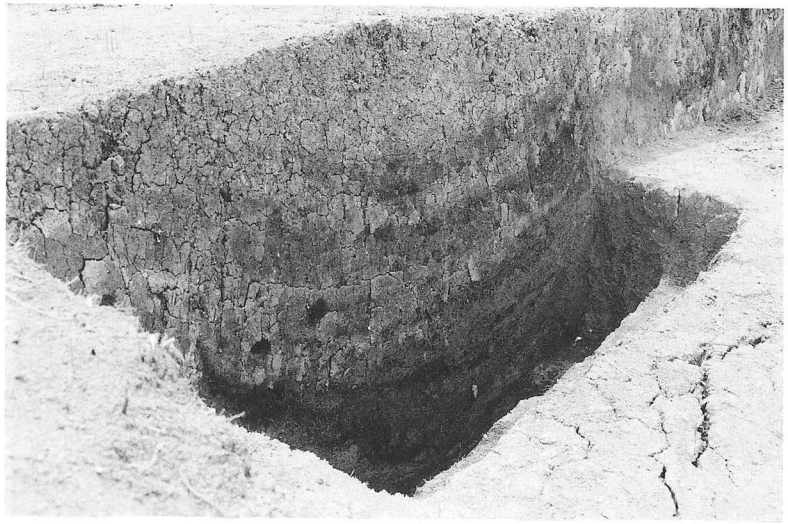
(3) 7M周溝東側ベルト土層断面（南）



(4) 7M周溝南側ベルト土層断面（西）

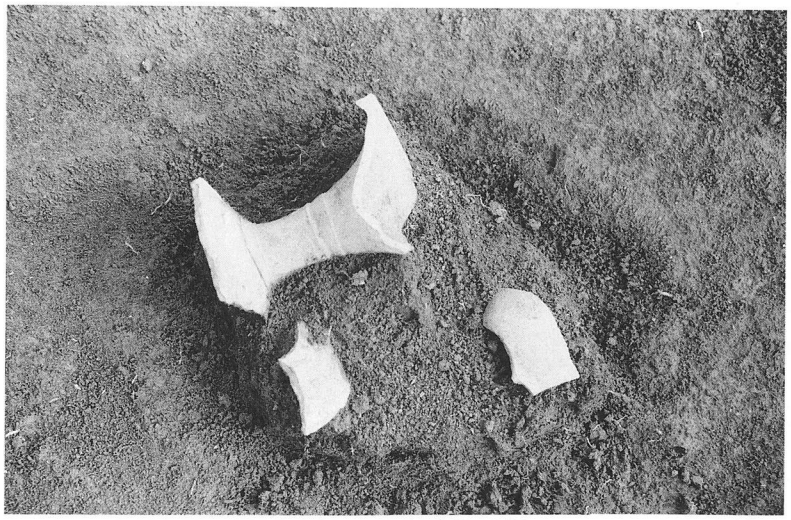
図版14

(1) 7M周溝東側ベルト土層断面（南）



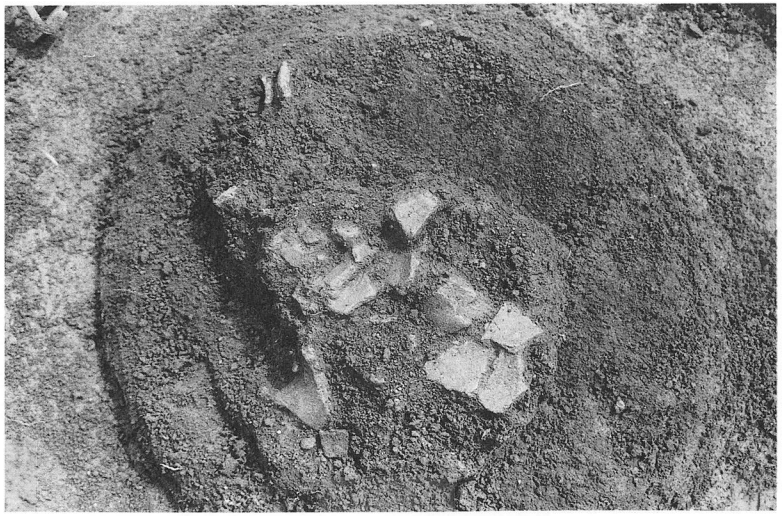
(2) 7M北西側土層断面（北）

(3) 7M北西側土層断面（北）



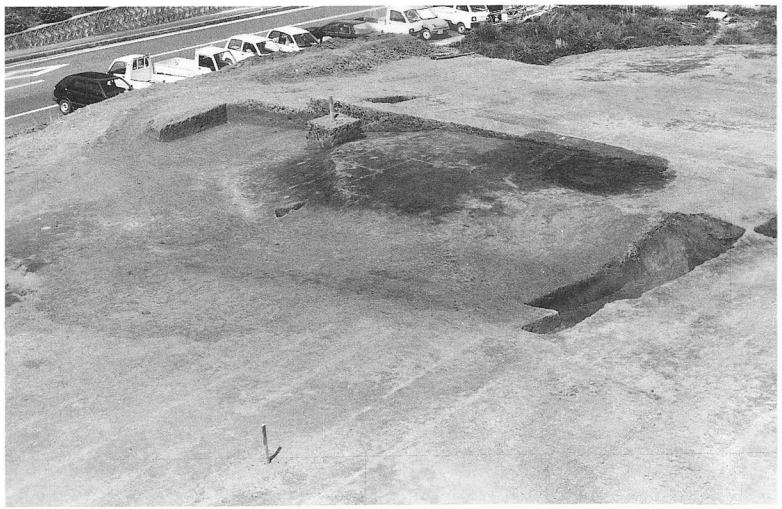
(4) VA出土遺物（南）

図版15



(1) 7M周溝南側・出土遺物（南西）

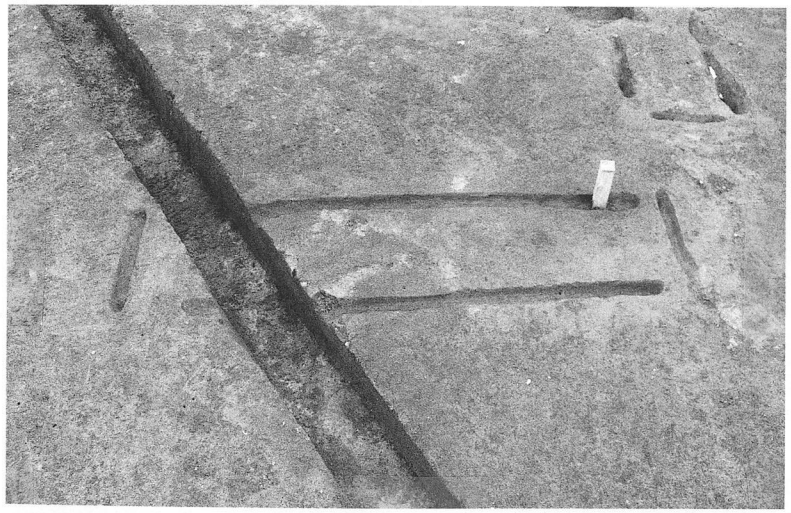
(2) 8M完掘全景（北）



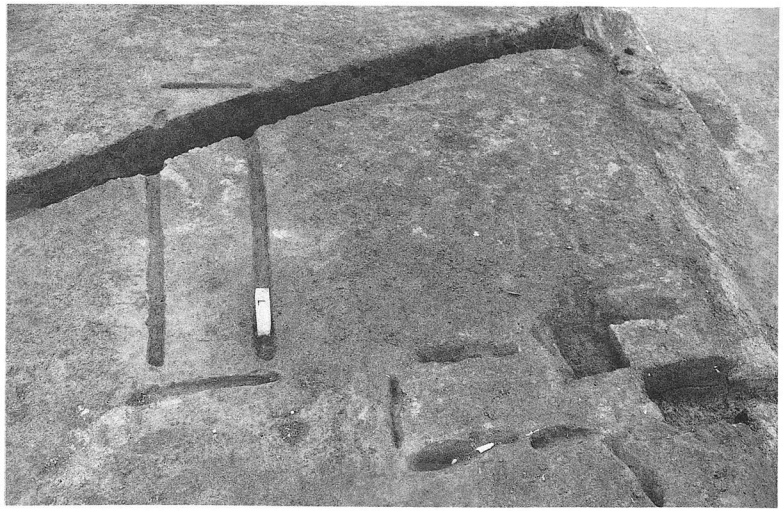
(3) 8M表土除去後（南東）

(4) 5 ・8M周溝境界付近（北）

図版16



(1) 8M遺構木棺痕①（南東）



(2) 8M遺構木棺痕②（北東）

(3) 8M遺構木棺痕③（北東）

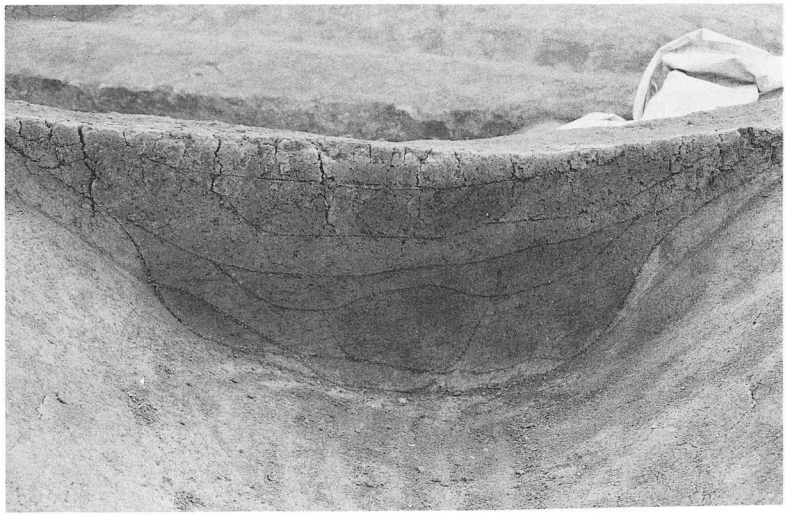
(4) 8M遺構木棺痕④（南東）

図版17

(1) 8M周溝南側（南東）

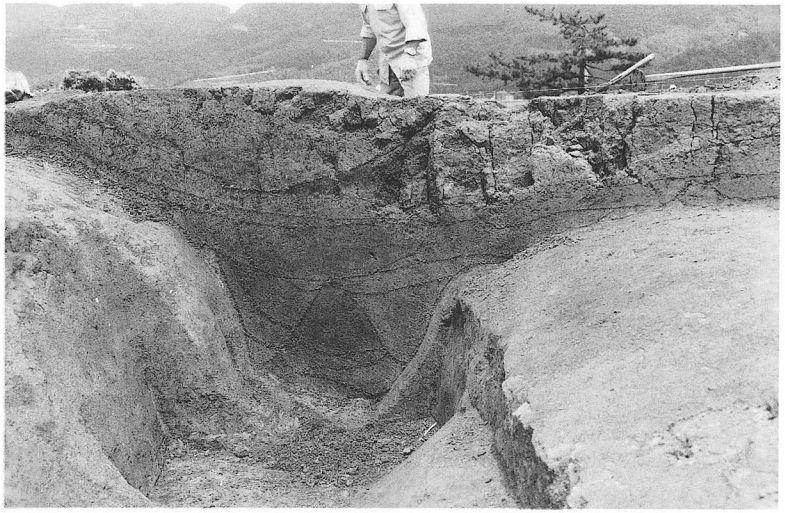
(2) 8M周溝南西側（南）

(3) 8M周溝南西側ベルト土層断面（東）

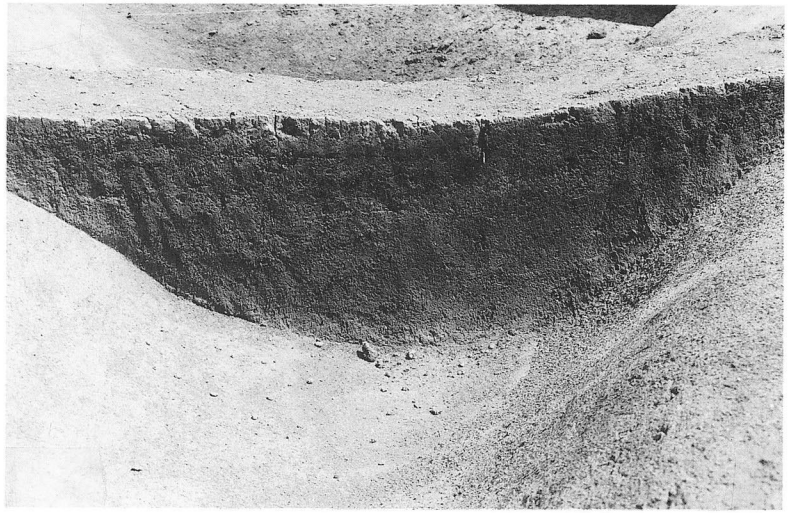


(4) 8M周溝南東側ベルト土層断面（南）

図版18



(1) 8M周溝東側ベルト土層断面（南）



(2) 8M周溝南東側ベルト土層断面（北）

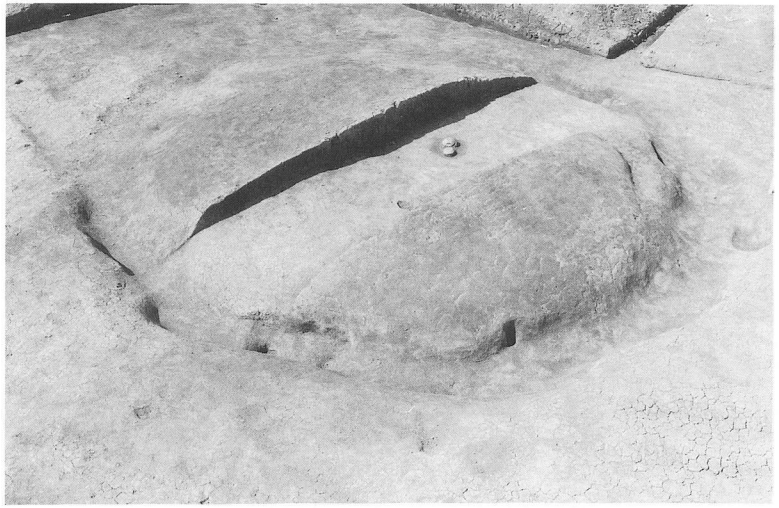
(3) 8M周溝出土遺物（東）

(4) 9M発掘前全景（西）

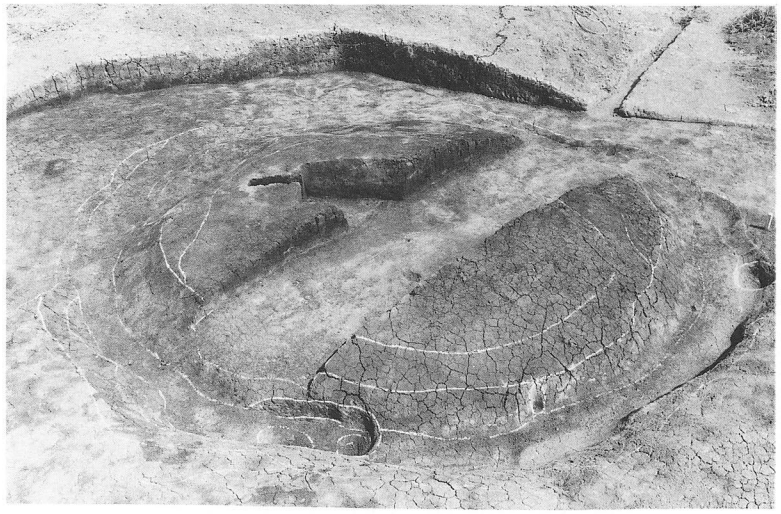
図版19

(1) 9M発掘中（南）

(2) 9M発掘中（南西）



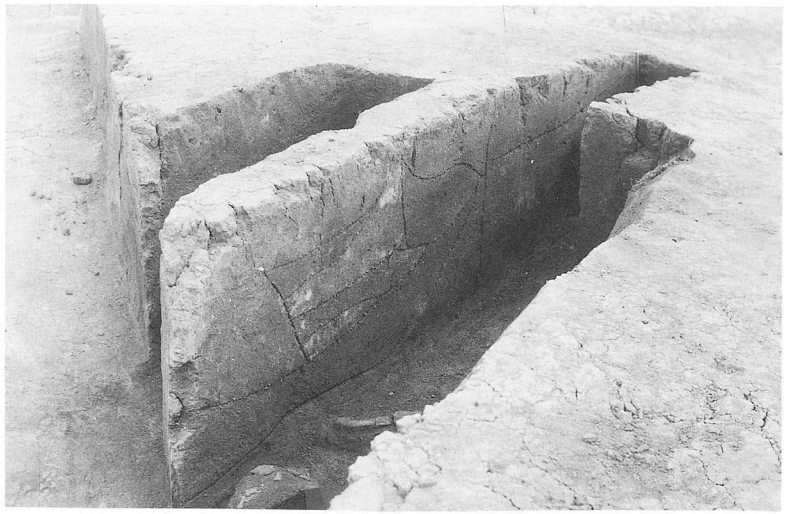
(3) 9M発掘中（南西）



(4) 9M完掘（南西）

図版20

(1) 9M周溝西側ピット（北）



(2) 9M主体部発掘中

(3) 9M主体部発掘中

(4) 9M主体部発掘中

図版21

(1) 9M主体部出土遺物〈鉄器〉

(2) 9M主体部出土遺物〈鉄器〉

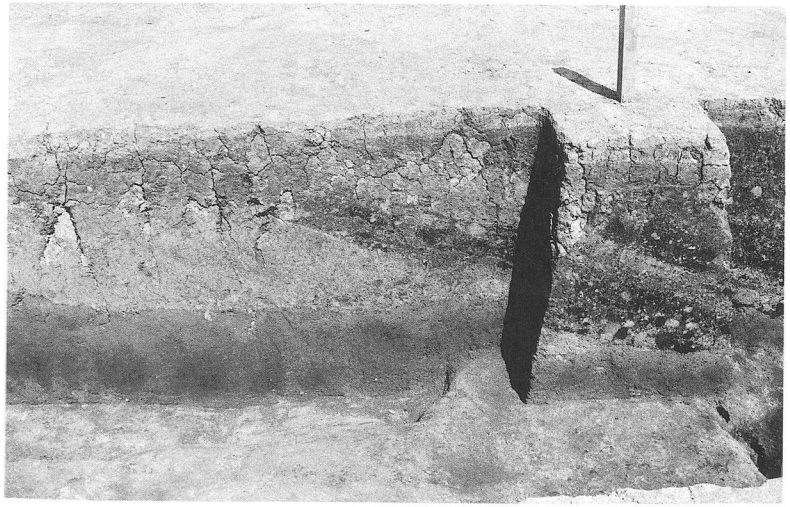
(3) 9M主体部出土遺物〈蓋杯〉

(4) 9M主体部出土遺物〈蓋杯〉

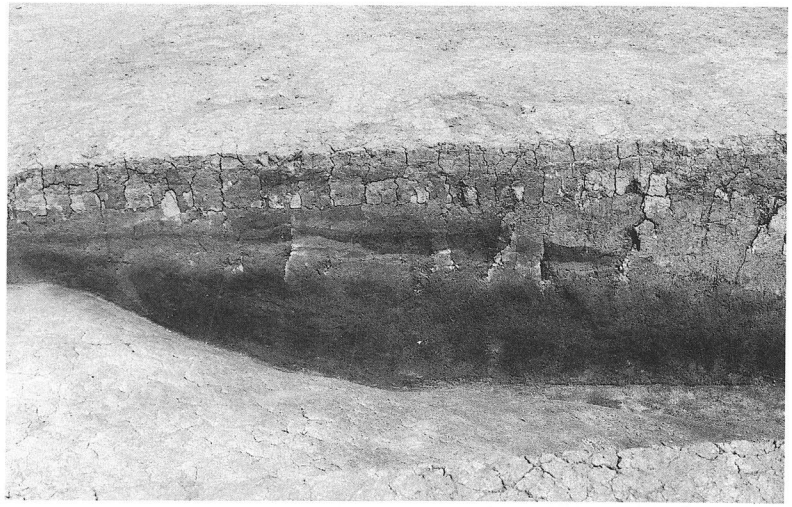
図版22

(1) 9M主体部出土遺物〈杯蓋〉

(2) 9M主体部出土遺物〈杯身〉

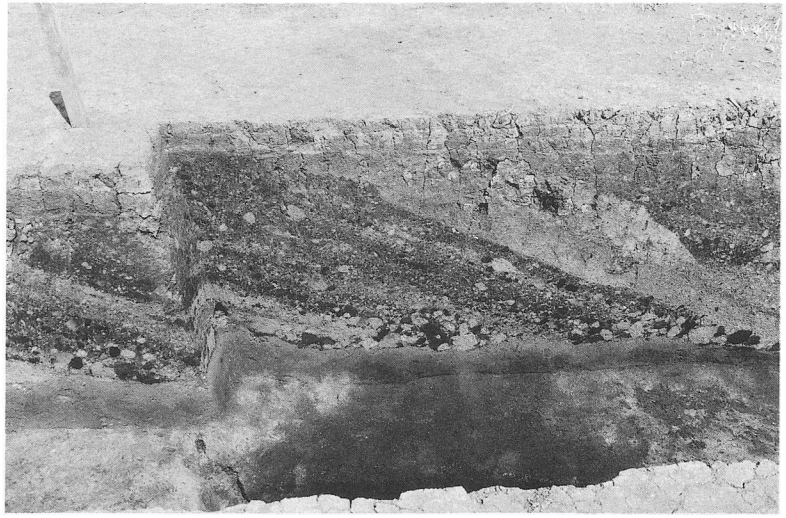


(3) 9M発掘中北壁土層断面①（南）



(4) 9M発掘中北壁土層断面②（南）

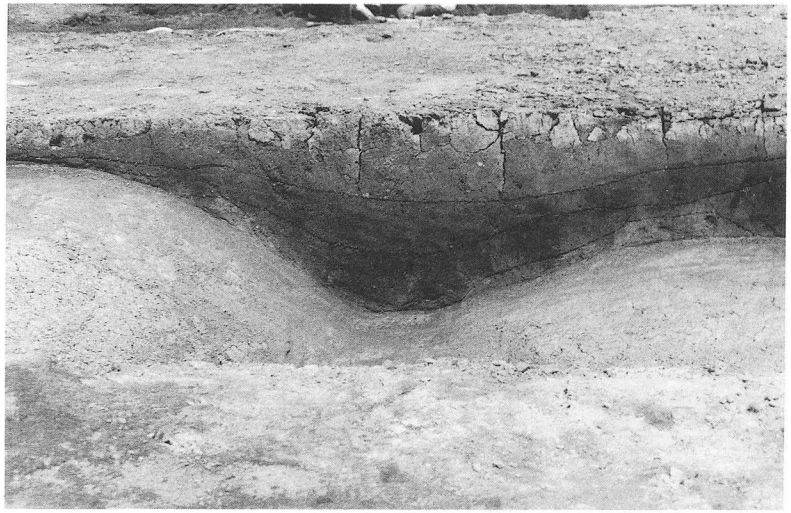
図版23



(1) 9M発掘中北壁土層断面③（南）

(2) 9M発掘中北壁土層断面④（南）

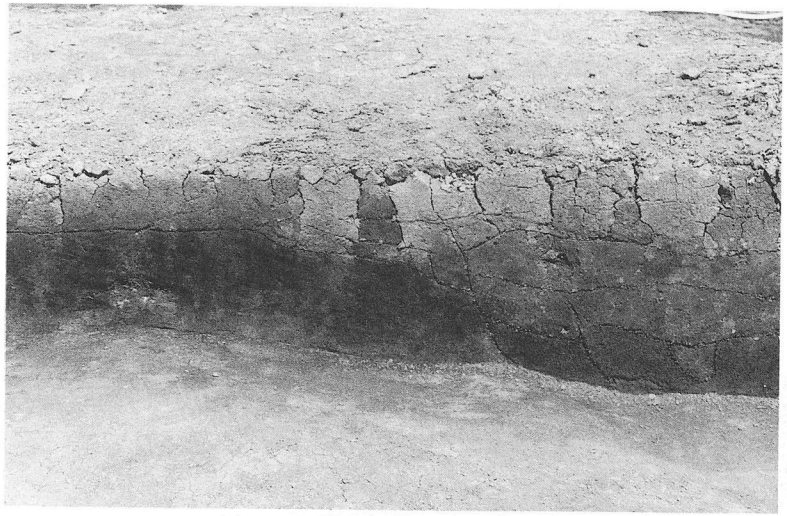
(3) 9M発掘中北壁土層断面全（南）



(4) 9M周溝北側落ちこみ①（南）

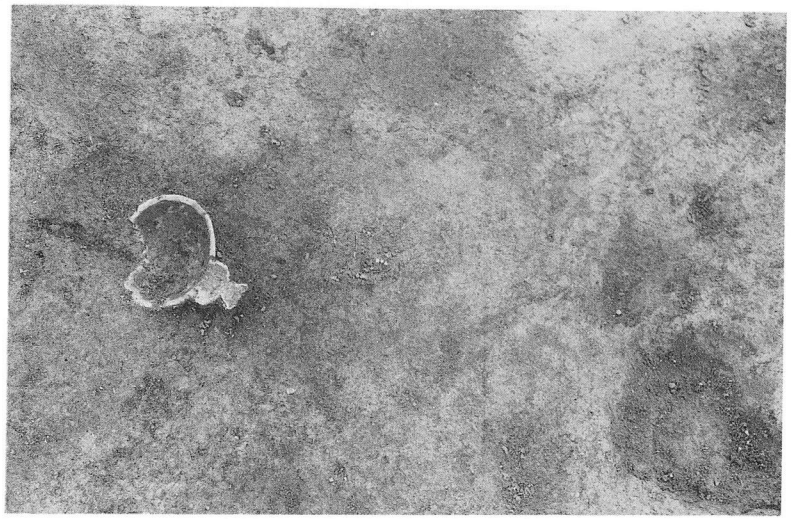
図版24

(1) 9M周溝北側落ちこみ②（南）



(2) 9M周溝北側落ちこみ③（南）

(3) 10M 周溝西側土層断面（北）



(4) 10M 周溝西側出土遺物（北）

図版25

(1) 10M 周溝西側出土遺物（北）

(2) 10M 周溝東側出土遺物（西）

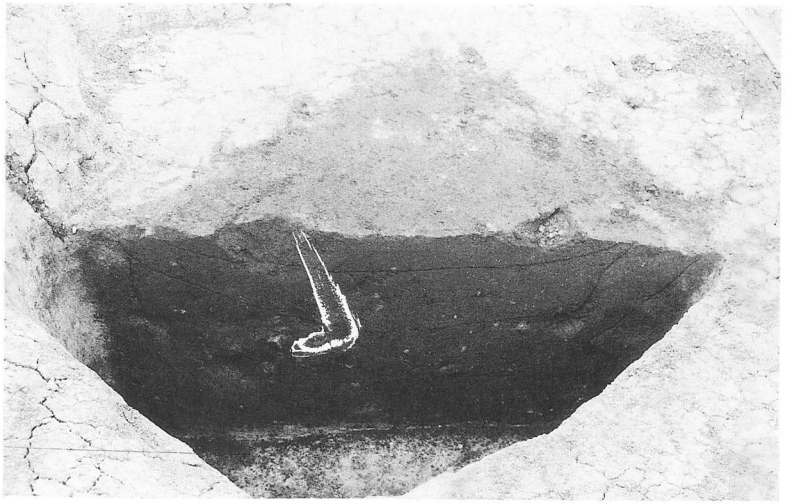
(3) SK03出土遺物（北西）

(4) SK04土層断面（南）

図版26

(1) SK04発掘中（東）

(2) SK04完掘（南）



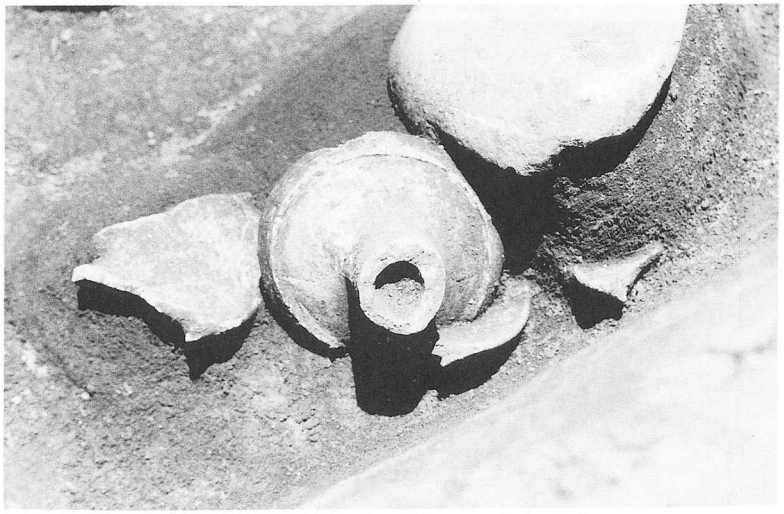
(3) SK05土層断面（南）

(4) 9M南側とSK05（西）

図版27

(1) SK05遺物出土状態（南）

(2) SK05遺物出土状態（南）



(3) SK05出土遺物〈弥生器台〉（東）

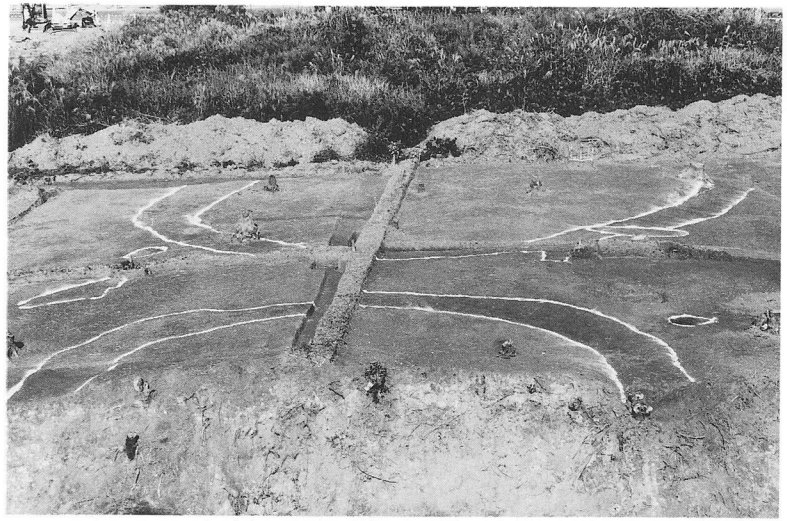
(4) 澤田山古墳群6M・7M発掘風景（南）

図版28

(1) 御建山27・31号墳発掘前全景（北東）

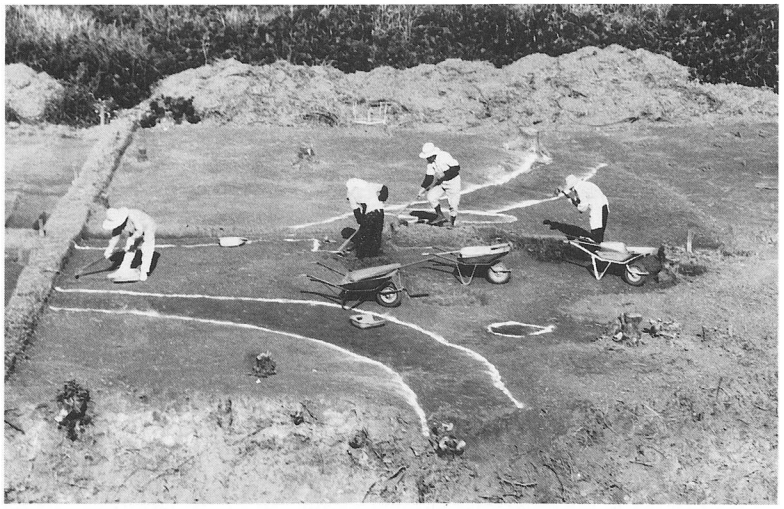
(2) 27・31号墳発掘前全景〈掃除後〉（南東）

(3) 27・31周溝発掘前（南東）



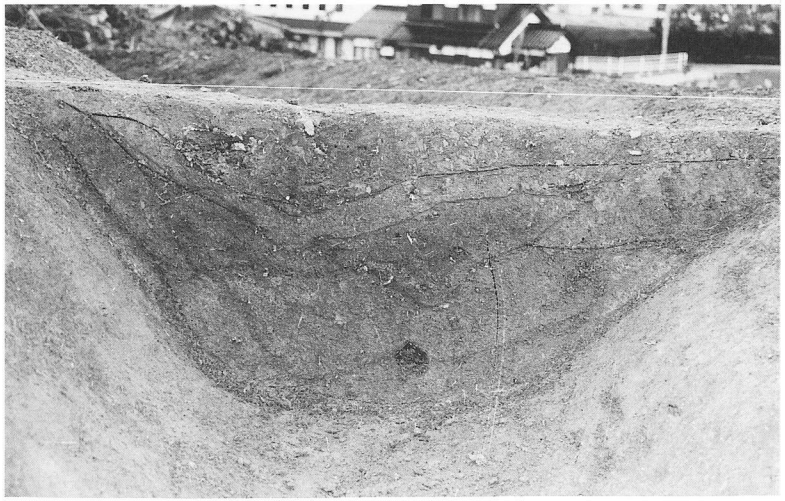
(4) 27・31周溝発掘前（南東）

図版29



(1) 27・31M周溝発掘中

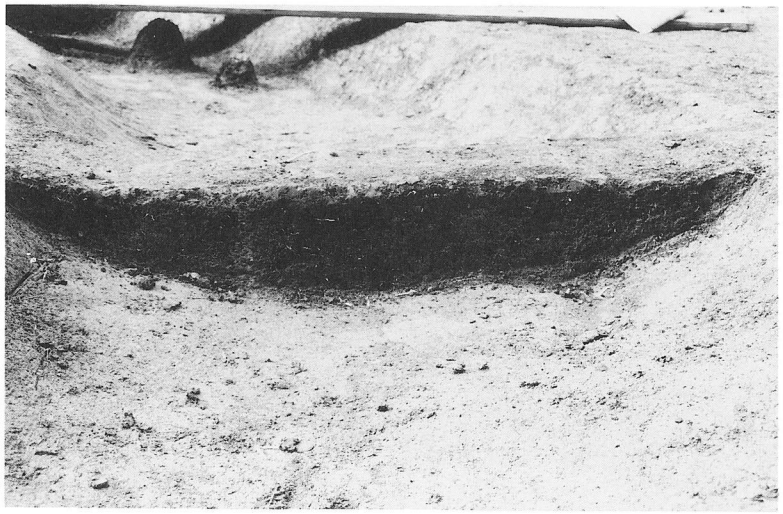
(2) 27M 周溝東側土層断面（北）



(3) 27M 周溝中央部土層断面

(4) 27M 周溝西側土層断面（北西）

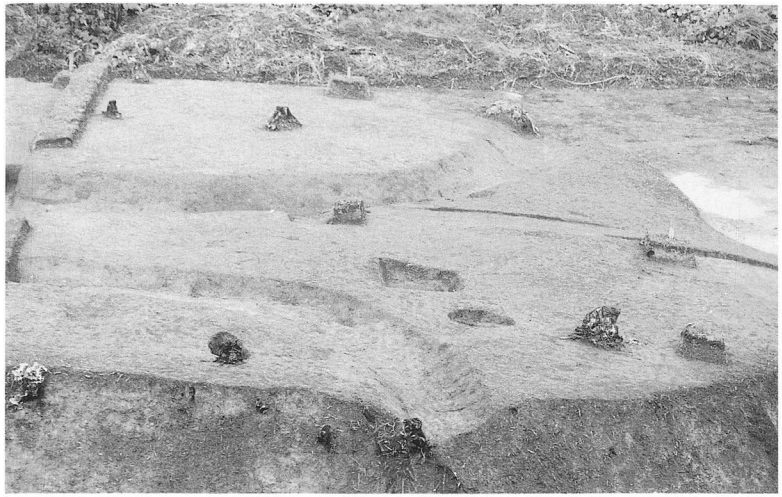
図版30



(1) 31M 周溝北側土層断面（東）

(2) 27・31M周溝完掘（南東）

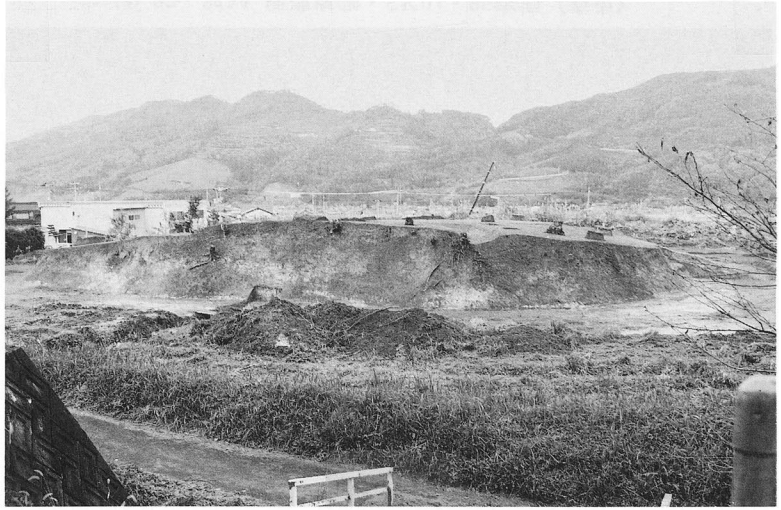
(3) 27・31M周溝完掘



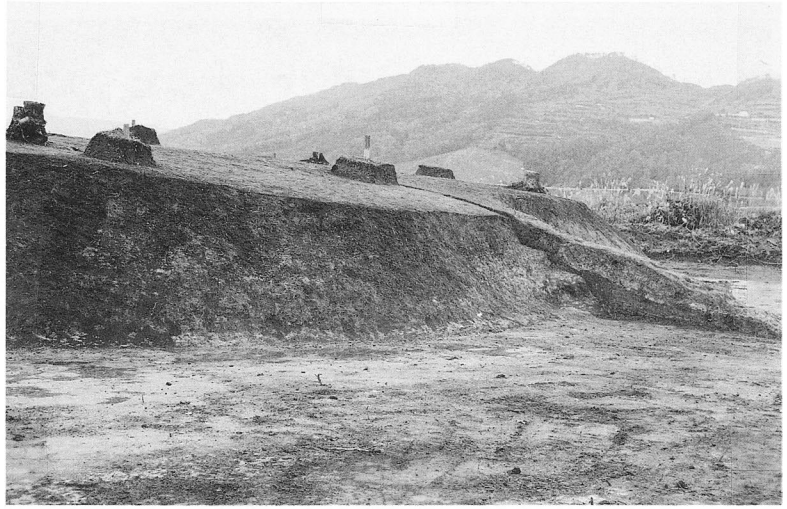
(4) 27・31M 周溝東側・SK04・05完掘（南東）

図版31

(1) 27・31M 周溝・SK01・02・03完掘（南東）



(2) 31M 完掘南側側面（南）

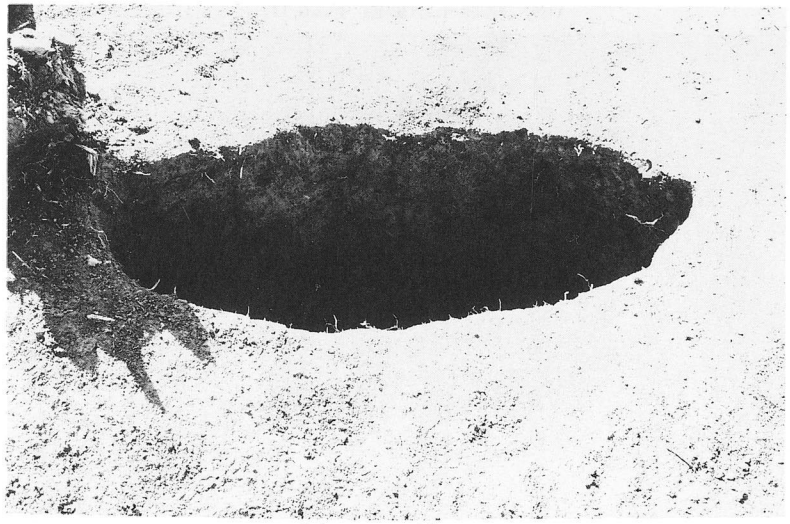


(3) 完掘側面南東側（南東）

(4) SK01土層断面（西）

図版32

(1) SK02出土遺物



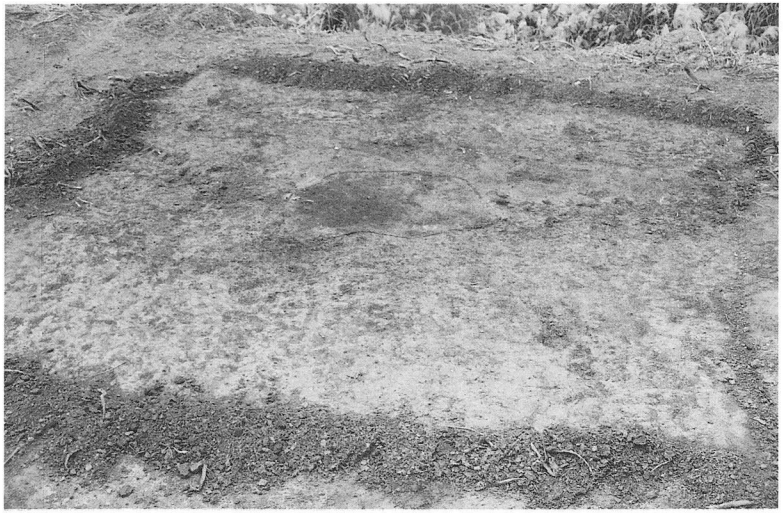
(2) SK04（北）

(3) SK04底に穿かれたピット（北）

(4) SK05発掘後（北）

図版33

(1) SK06土層断面（北西）



(2) SK07発掘前

(3) 27M 周溝中央寄り出土遺物

(4) 27M 周溝出土遺物（東）

図版34

(1) 27M 周溝中央寄り出土遺物（北）

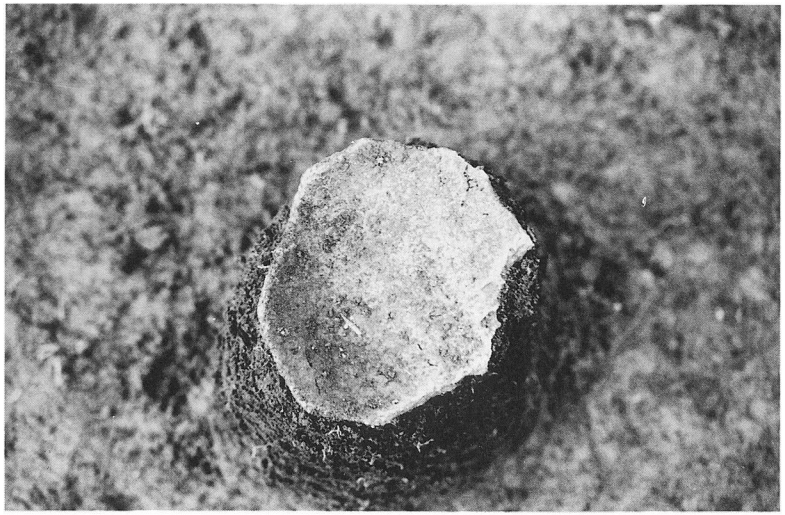
(2) 27M 周溝東寄り肩出土遺物（南）

(3) 27M 周溝中央部出土遺物（南）

(4) 27M 周溝中央部出土遺物（西）

図版35

(1) 31M 周溝内出土遺物

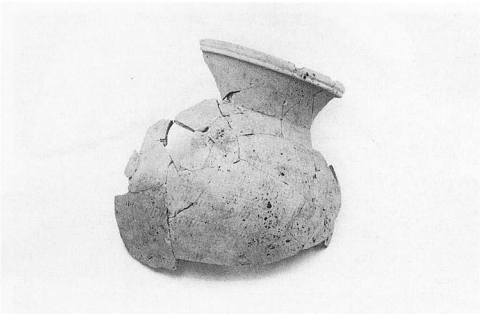


(2) 31M 周溝内出土遺物

(3) 澤田山古墳群・御建山27・31号墳調査協力者

図版36

1



8

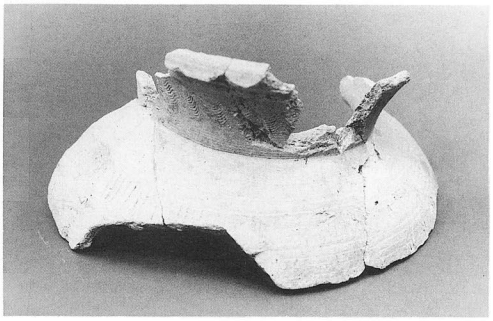
2

9

4

10

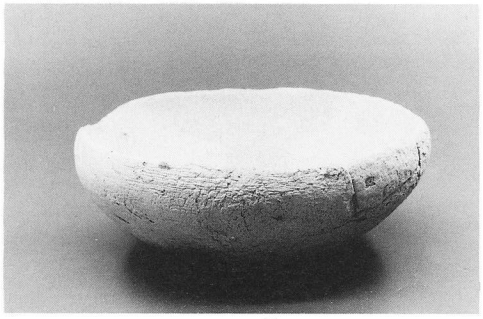
7



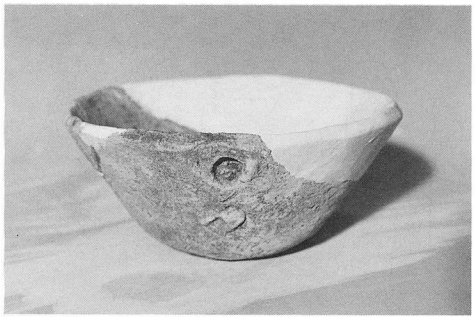
11- I

11- ②

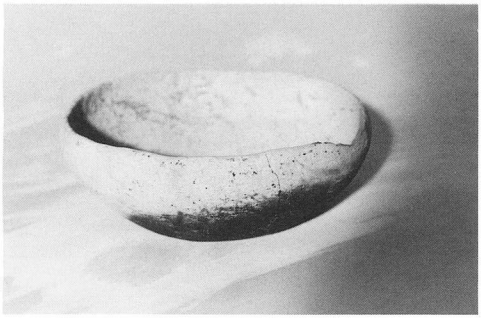
13



12- ①

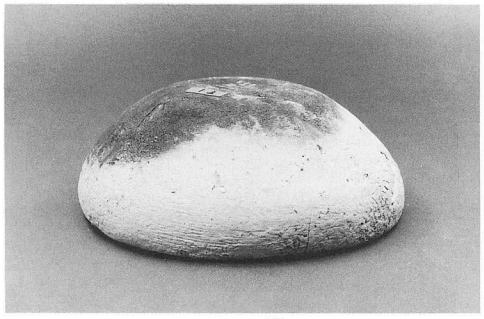


16



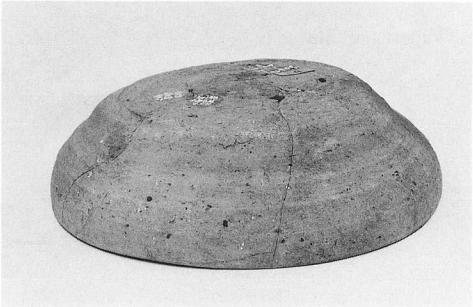
12- ②

17

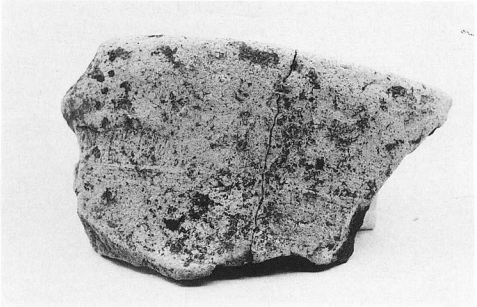


12- ③

18

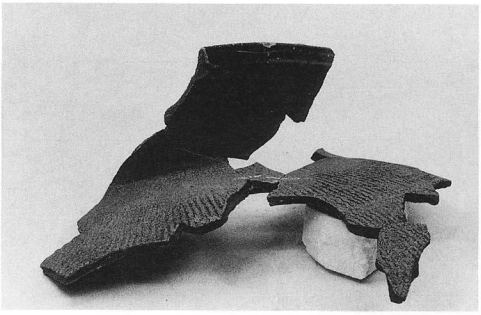


19



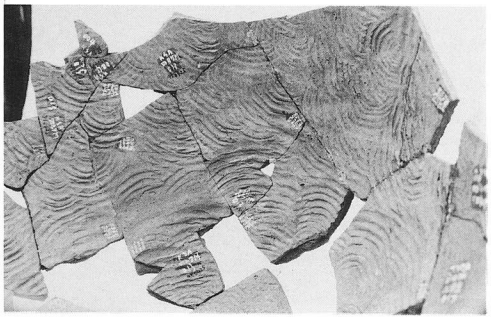
6

20



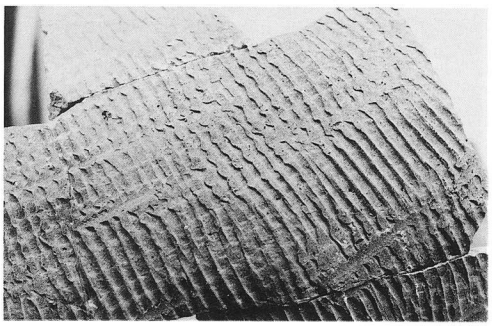
31- ①

21



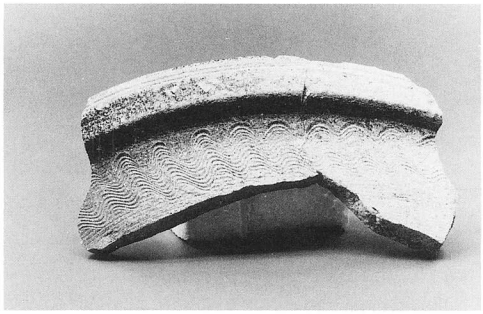
31- ②

23

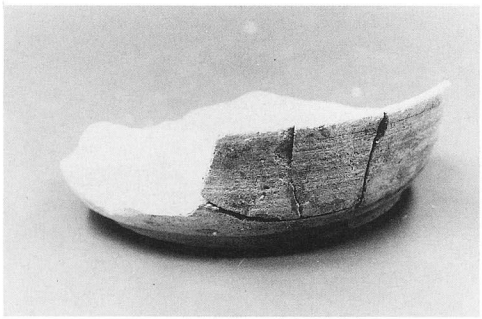


31- ③

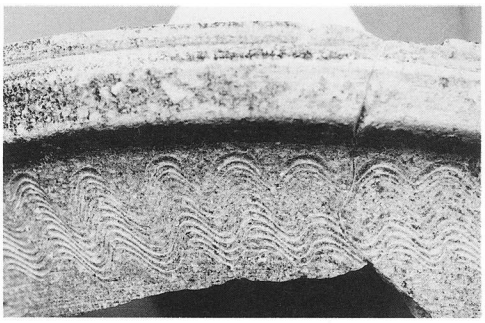
26



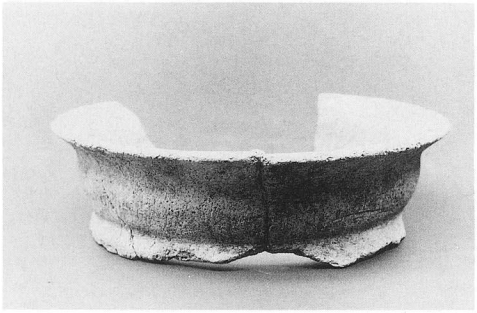
14- ①



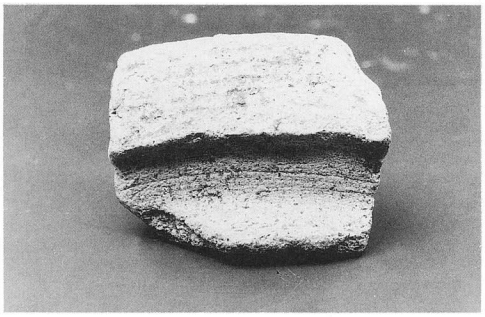
3



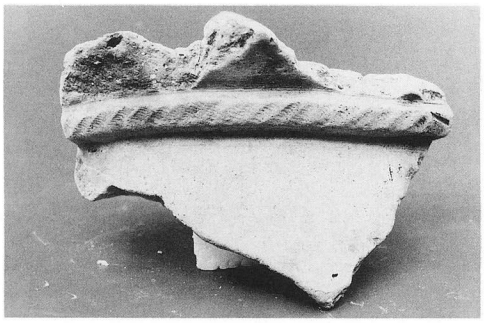
14- ②



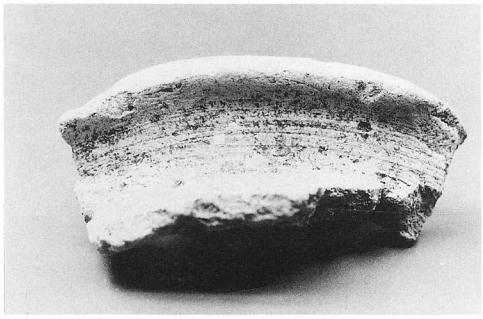
5



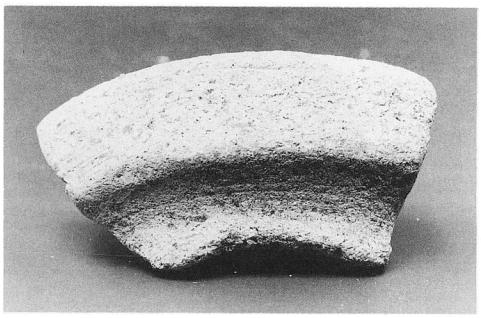
29



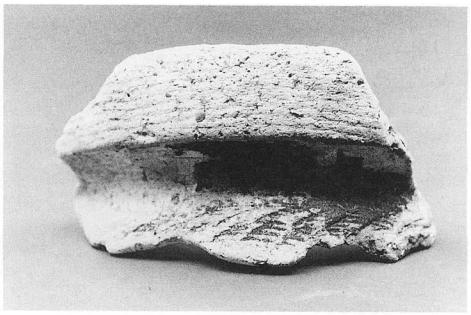
22



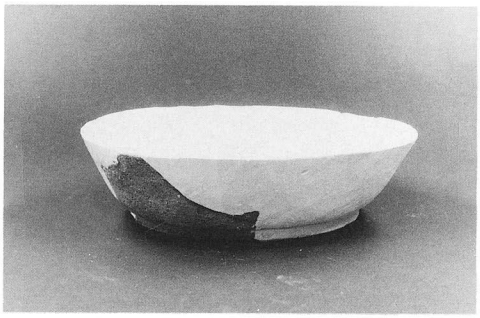
25



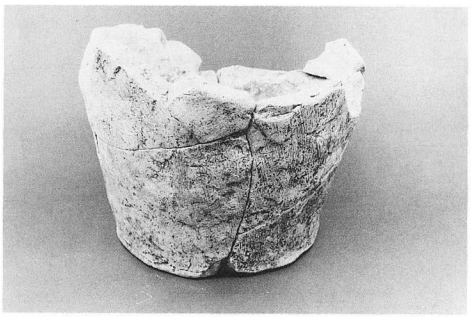
30



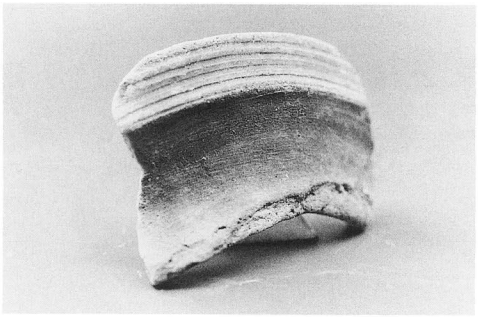
24



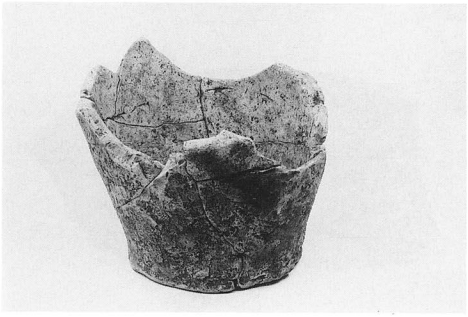
27



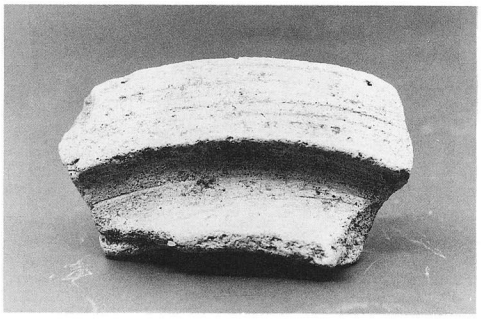
32- ①



15



32- ②



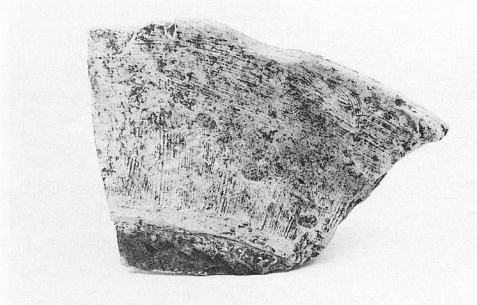
28

33

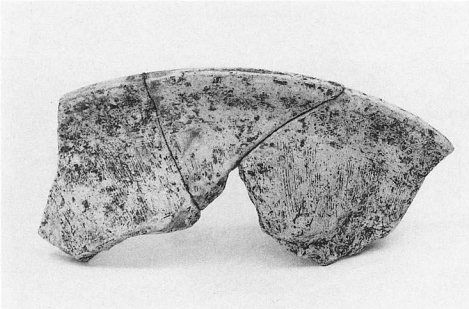
34

39

35



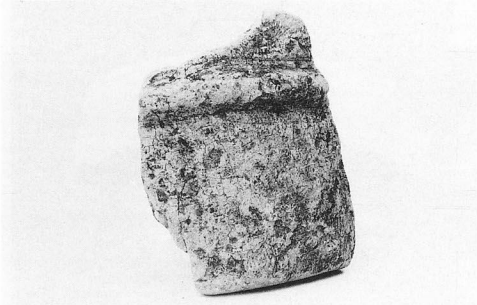
40



37

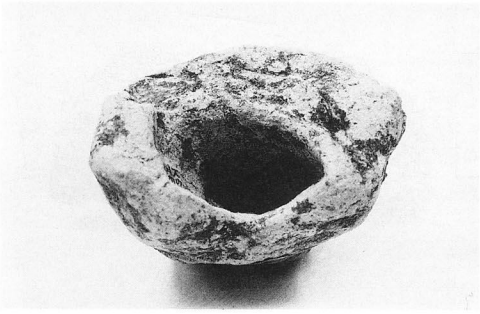
36

38

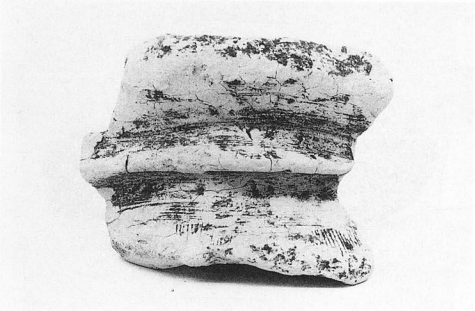


41

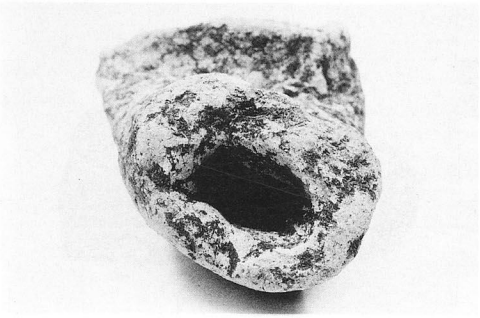
43



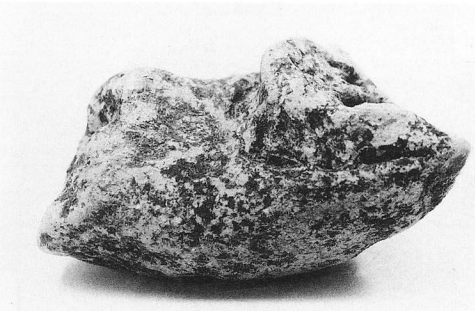
44- ③



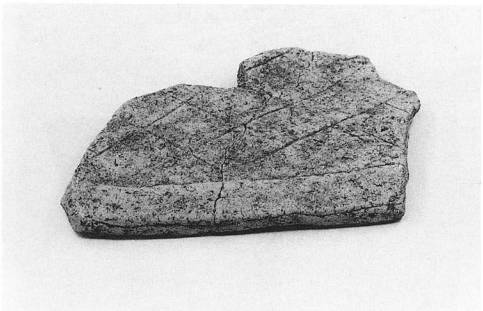
42



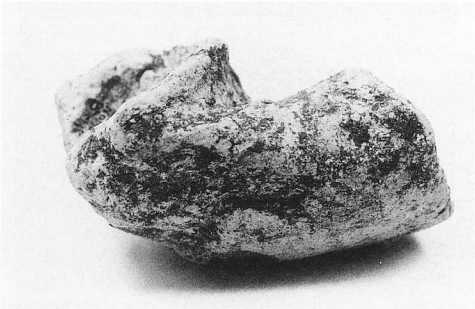
44- ④



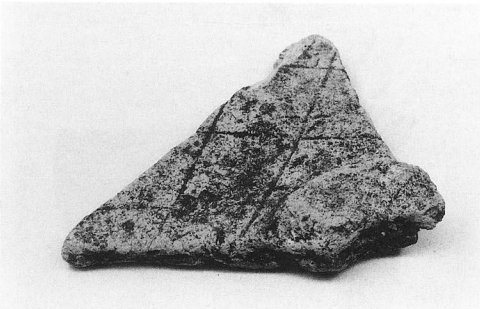
44- ①



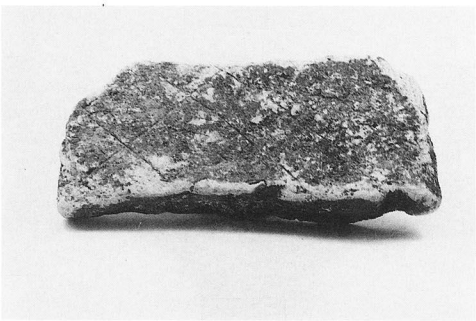
45



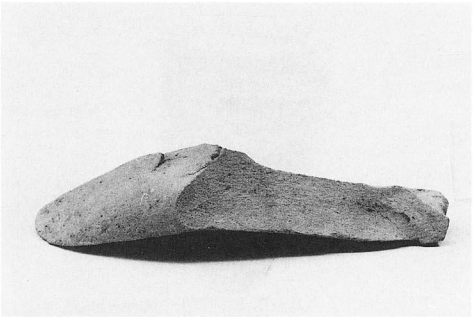
44- ②



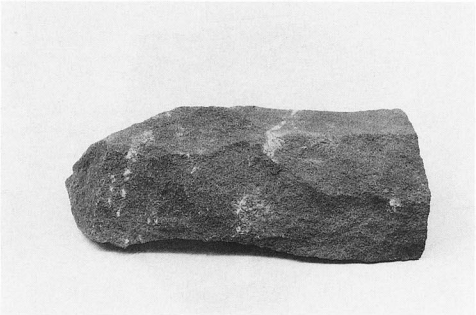
46



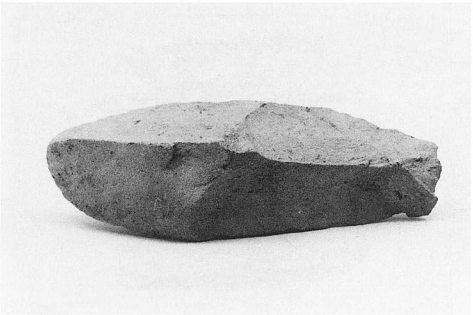
47



49- ①

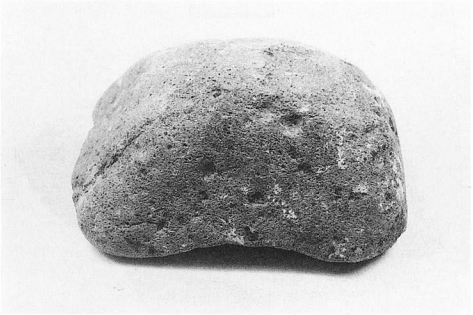


48- ①



49- ②

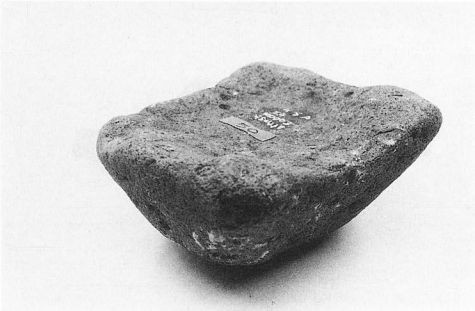
48- ②



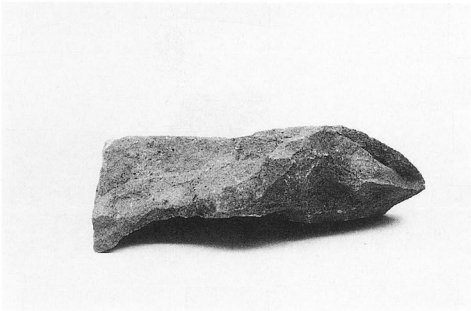
50- ①

48- ③

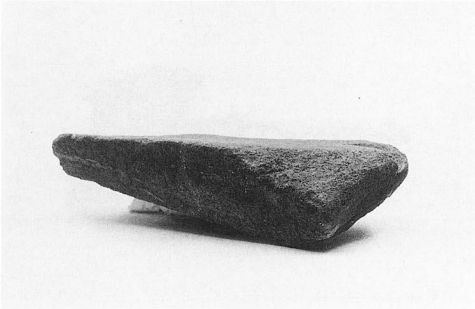
50- ②



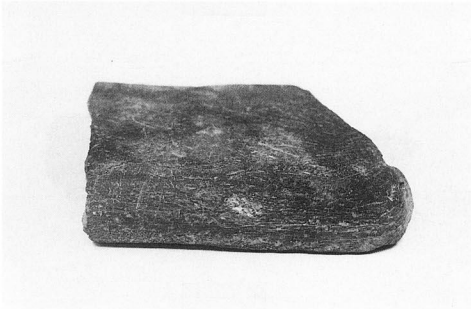
50- ③



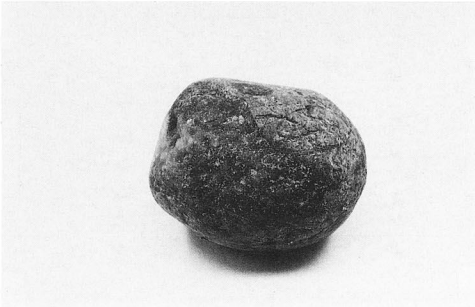
54



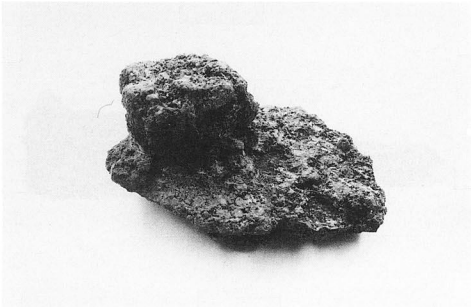
51



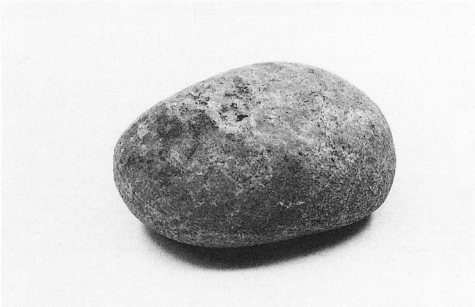
56



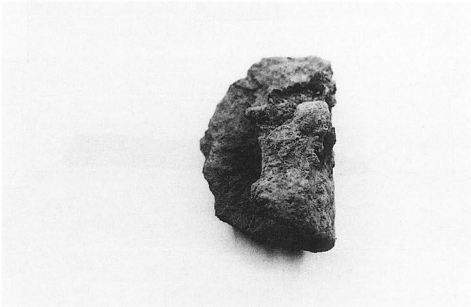
52



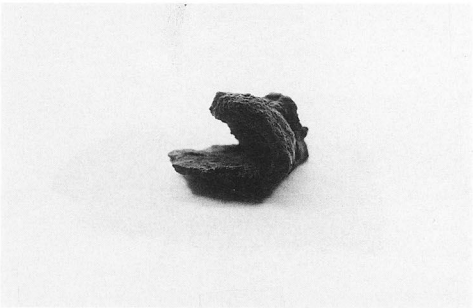
57



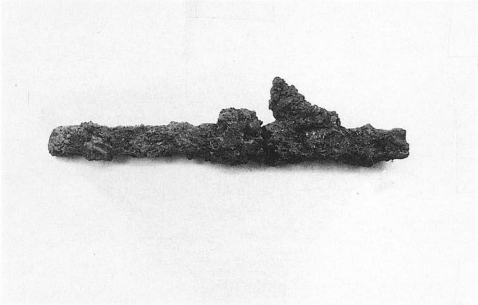
53



58- ①

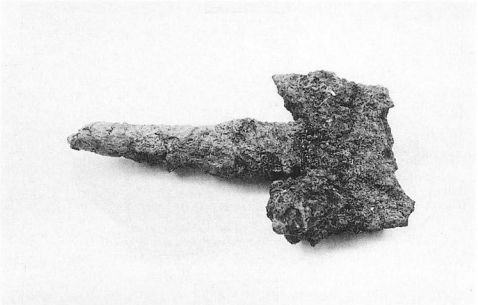


58- ②

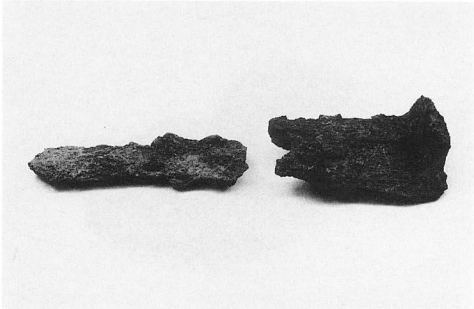


63

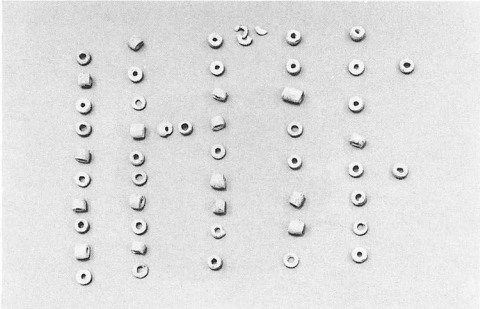
59



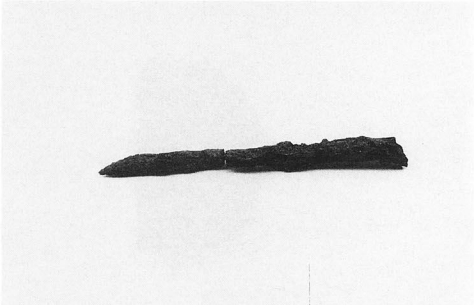
64



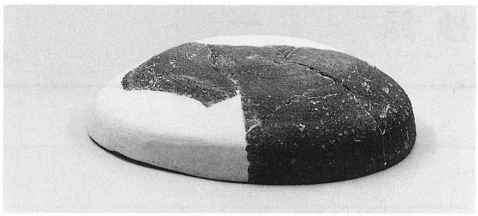
60



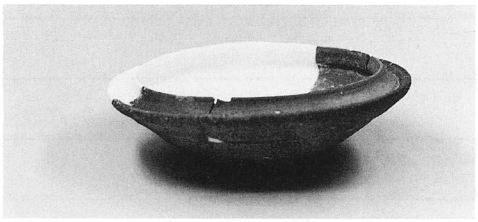
65



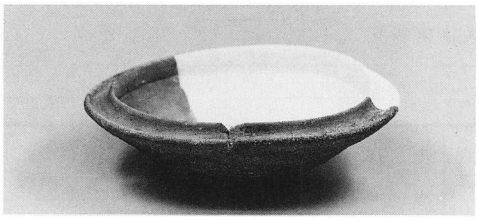
61



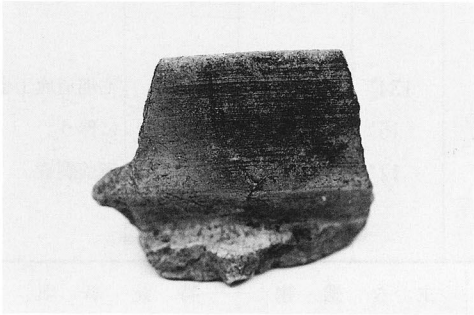
B1



B2



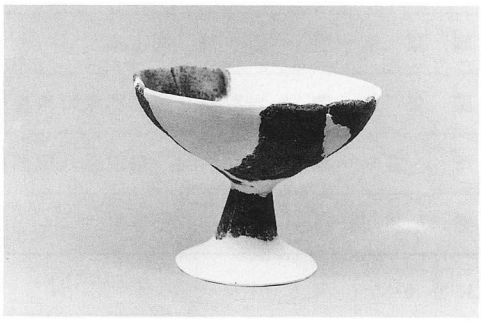
B3



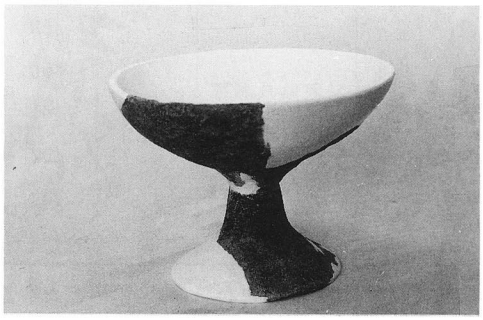
B4

B.5.B6

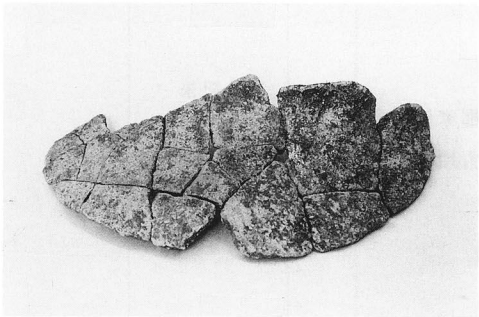
B7



B8



B9



B10

報告書抄録

ふりがな	こおげさわだやまこふんぐんはっくつちょうさほうこく
書名	郡家澤田山古墳群発掘調査報告
副書名	住宅造成工事に伴なう事前調査
シリーズ名	郡家町文化財報告書
シリーズ番号	18
編集者名	道谷　冨士夫
編集機関	鳥取県八頭郡郡家町教育委員会
所在地	〒680-04　鳥取県八頭郡郡家町大字宮谷80
発行年月日	西暦1997年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
こおげさわだやま 郡家澤田山 古墳群	とっとりけんやずぐん 鳥取県八頭郡 こおげちょうこおげ 郡家町郡家 さわだやま 字澤田山	31321	399 400 401 402 403 404	35° 24′ 13″	134° 15′ 12″	19950401 ～ 19970331	3,000	宅地造成工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡家澤田山古墳群	古墳	３世紀末 ～ ７世紀初頭	円墳　６基	土師器・須恵器 （甕・壺・器台 椀・蓋杯 高杯） 管玉 埴輪（円筒・朝顔形象） 石材・石器	５・８・９号墳は弥生住居跡との複合遺跡の可能性あり

報告書抄録

ふりがな	くのうじおたてやま27・31ごうふんはっくつちょうさほうこく
書名	久能寺御建山27・31号墳調査報告
副書名	住宅造成工事に伴なう事前調査
シリーズ名	郡家町文化財報告書
シリーズ番号	18
編集者名	道谷　冨士夫
編集機関	鳥取県八頭郡郡家町教育委員会
所在地	〒680-04　鳥取県八頭郡郡家町大字宮谷80
発行年月日	西暦1997年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
久能寺御建山 27号墳 31号墳	鳥取県八頭郡 郡家町久能寺 字御建山	31321	391 709	35° 24′ 11″	134° 15′ 08″	19960801 ～ 19970331	400	宅地造成工事 に伴う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久能寺御建山 27号墳 31号墳	古墳	５世紀末 ～ ６世紀初頭	円墳　２基	土師器・須恵器 （壺・高杯 杯蓋）	１基の円墳と推察されていたが、２基の古墳の周溝が検出された （27号墳・31号墳）

郡家町文化財報告書18

郡家澤田山古墳群

久能寺御建山27・31号墳

発　行　1997. 3
発行者　郡家町教育委員会
〒680-04　TEL（0858）76－0001
鳥取県八頭郡郡家町宮谷80番地
（郡家町中央公民館内）
印　刷　中央印刷株式会社